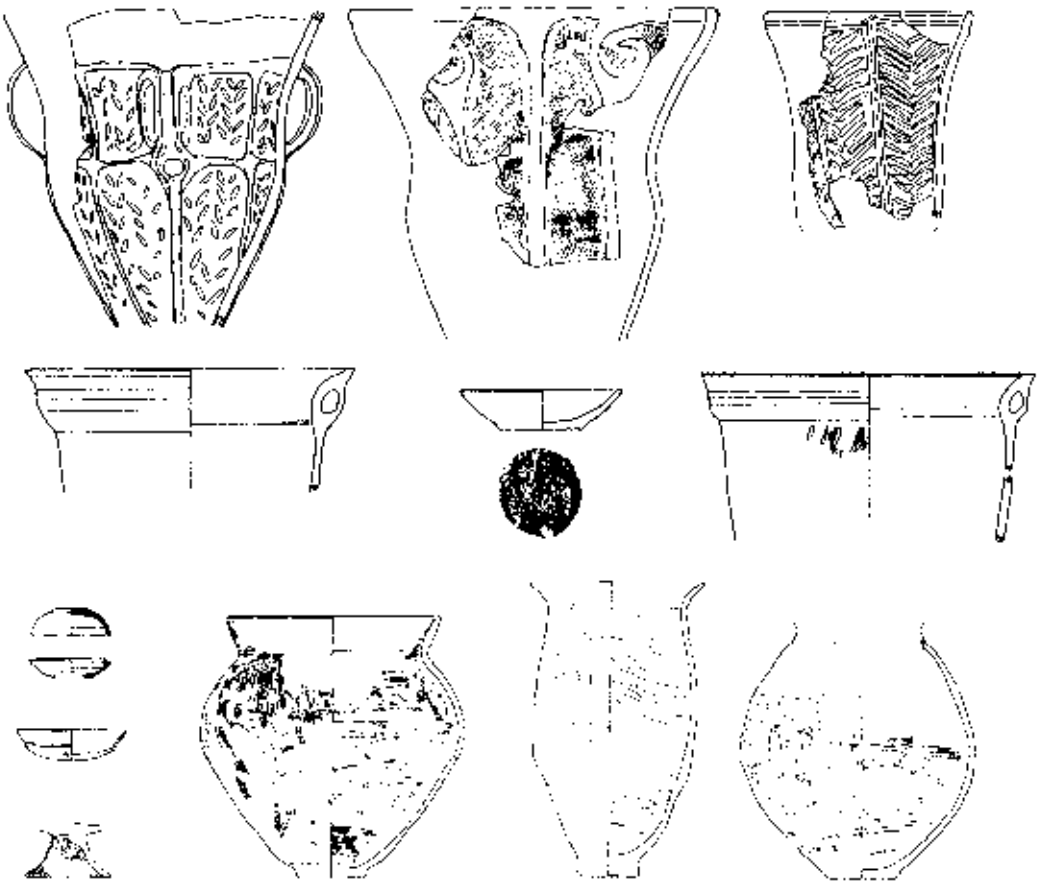
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 252 集

山梨県甲州市

西畑Ｂ遺跡
北田中遺跡

―国道411号塩山バイパス建設に伴う発掘調査報告書―



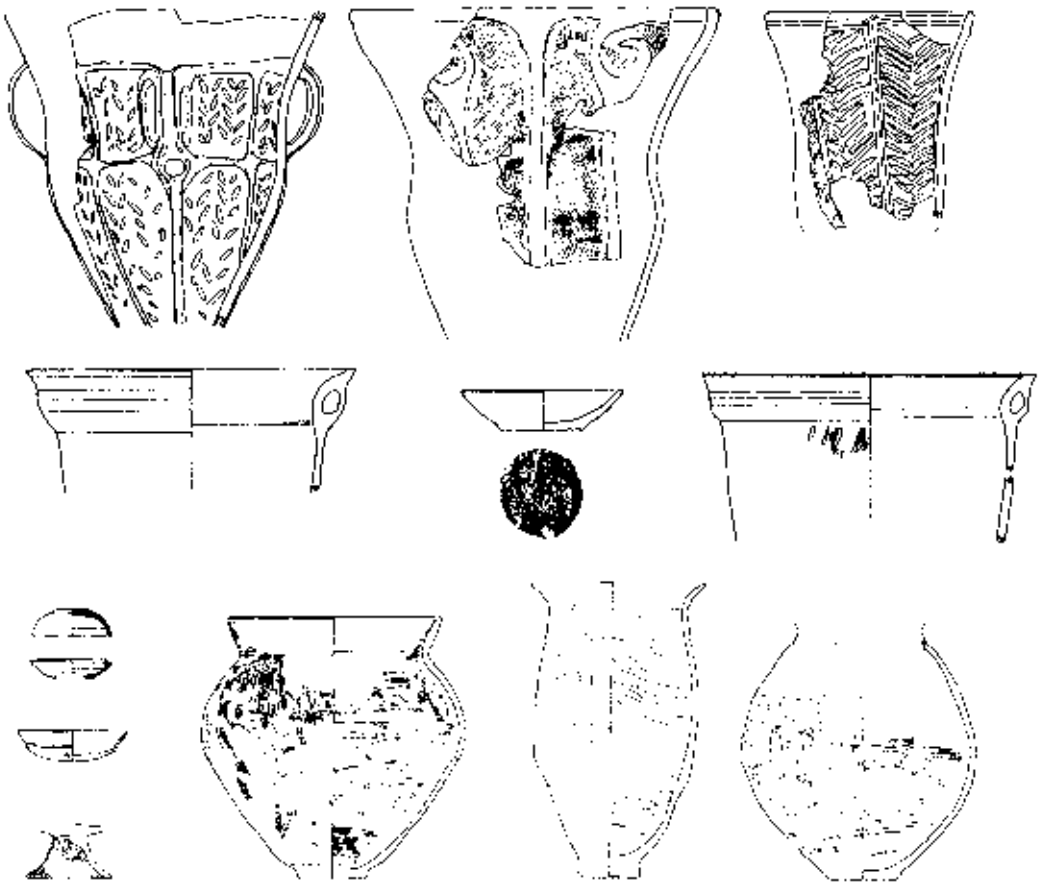
２００８．３

山梨県教育委員会
山 梨 県 土 木 部

山梨県甲州市

西畑Ｂ遺跡
北田中遺跡

―国道411号塩山バイパス建設に伴う発掘調査報告書―



２００８．３

山梨県教育委員会
山 梨 県 土 木 部

西畑Ｂ遺跡の概要

ここに報告する西畑Ｂ遺跡の南区と北区の発掘調査は2006年７月５日～９月13日に、西区の試掘調査は2007年２月13日～３月２日にかけて、国道411号塩山バイパス建設に先立って行いました。

西畑Ｂ遺跡南区全景［南から］

石垣を境に南区は低い土地

南区は旧河道にあたり、転々とある巨石の間を細かい砂が堆積しています。上の写真の左側（西側）は用水路です。用水路の中の段差がある部分には、かつては水車があったそうです。用水路付近から、近世から近代の遺物が多く出土しました。この土地は、畑として利用されていため、耕作に支障が少ない用水路脇に、不要なものを埋めたようです。

第２トレンチ土層断面［南から］

左は土層の断面をていねいに削った写真です。細かい縞のようなラミナがたくさん観察できます。ラミナは、この土層が水流で運ばれてつくられた証拠です。この土地が洪水の影響を受けていることがわかります。

※ラミナ：葉理ともいわれ、粗砂以下の洪水堆積層の中にみられる薄い縞状[10ｍｍ以下]の堆積構造です。

西畑Ｂ遺跡北区全景［南から］

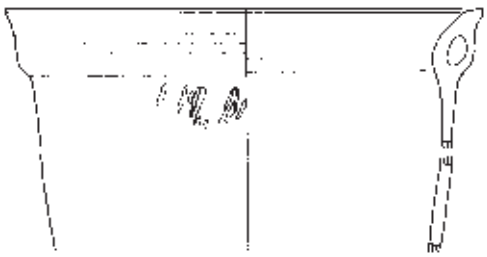
中世の土器が出土！

内耳鍋という土器が出土しました。吊り下げるためのヒモを付ける耳のような環（わ）が鍋の内側に付いています。煮炊きをするときに、ヒモが燃えないようにつくられたものです。これなら金具をつかわなくても、立派に役を果たします。

また「カワラケ」といわれる土師質土器の皿が７点出土しています。

内耳鍋（15 世紀中頃）

カワラケ［皿］(14 世紀～ 15 世紀前半）



内耳鍋（15 世紀中頃）実測図

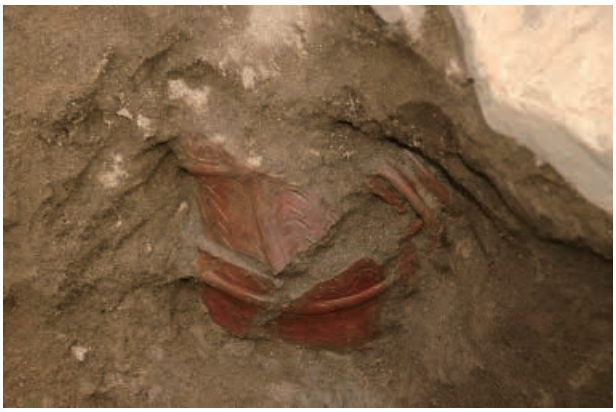
黒川金山の金山衆

西畑Ｂ遺跡の西側には、「保坂氏屋敷（遺跡番号 212)」が隣接しています。ここの屋敷には、天正２年(1574)の保坂次郎右衛門尉宛の武田家朱印状が伝えられています。保坂次郎右衛門尉は、黒川金山に関わる金山衆のひとりであったことがわかります。今回、発見した土器は、この文書が書かれた時代に、この場所で生活が営まれていた証拠となりました（詳細は第２章)。

西畑Ｂ遺跡西区全景［南から］

縄文時代中期末の土器が出土！

縄文土器（2）
（中期末 4000 年前）



出土した土器片をつなぎ合わせると、残っている部分だけで高さ 34 ｃｍもある大きな土器になりました。

縄文土器 (1)[中期末 約 4000 年前]

縄文土器 (3)[中期末 約 4000 年前]

縄文土器 (23)[後期初頭 約 4000 年前]

西区「土器の送り場」付近 [北から]

土器捨て場

縄文土器の包含層は東に向かって大きく傾いており、役割を終えた土器などを納めた「土器の送り場」と考えられます。

縄文土器包含層を取り除くと、巨大な石がごろごろする河原のような状態になりました。ここが、土石流のような激しい洪水に襲われる場所であることを物語っています。

北田中遺跡の概要

ここに報告する北田中遺跡の発掘調査は、2006 年 8 月 7 日～ 9 月 15 日にかけて、国道 411 号塩山バイパス建設先立って行いました。

北田中遺跡全景［北から］

調査地点は、重川南岸の国道 411 号沿いの低い土地です。作業員が移植ゴテで掘っている付近から古墳時代後期の土器が集中的に出土しました。

巨石の間に土器が集中する傾向あり！

赤く塗られた土師器坏（はじきつき）（18）（古墳時代後期）

この土師器は、非常にていねいに仕上げられています。銘々が用いる食器として、使われたものです。

調査区東壁　南側

調査区東壁　中央部分

上から２番目の厚い白っぽい土層が、明治 40 年水害で堆積した「花崗岩片混じりの灰粗砂層です（詳細は第 27 図参照）。

黒褐色シルト質土ブロック混じりの黄灰差質土が、近世～近代の掘り込み（落込１）を覆っていた土層です。

須恵器　坏蓋（つきふた）（25）

須恵器　坏（つき）（24）

須恵器の出土状態

土師器　球胴甕（51）

土師器　球胴甕（27）

土師器　長胴甕（56）

土師器　長胴甕（57）

土師器　甑　底部破片（62）

底に穴が空いています。この穴から蒸気を通して食物を蒸しました。

瓦質土器（65）

この瓦質の土器だけが、中世のものです。県外で生産されたものと思われます。

高坏 (23)［古墳時代後期］黒漆塗り

年間を通して乾燥が進まない環境に埋まっていたと思われ、光沢のある漆膜が残っています。

黒漆が付着した破片 (21)

黒漆が付着した破片 (22)

溜まった漆が固まったようなものが付着しています。漆塗の製品ではなく、漆塗り工程で使用された器と考えられます。直接接合しませんが、高坏 (23) の一部と思われます。

高坏 (24)［古墳時代後期］黒漆塗り

序

この報告書は、山梨県土木部による国道411号線塩山バイパス建設事業に先立って実施した西畑Ｂ遺跡ならびに北田中遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

甲州市塩山赤尾の西畑Ｂ遺跡では、縄文時代の遺物として、今から約4000年前の中期末の土器を集中的に発見しました。縄文土器が出土したのは、傾斜がある場所で、おそらく縄文集落のはずれにあたり、役割を終えた土器などを納めた"土器の送り場"と考えられます。

中世のものとしては、14世紀から16世紀後半のカワラケ（土師質土器）と15世紀中頃の内耳鍋を発見しました。調査地点のすぐ西には、遺跡として登録されている「保坂氏屋敷」があり、ここには、天正２年（1574）の武田家朱印状等が伝えられ、黒川金山に関わる金山衆のひとりとされています。また塩山赤尾には、黒川金山から移転された法蓮寺や、永禄4年（1561）の文書に、神官が「あかをの祢き」として登場する大石神社があります。現在も、赤尾集落は大きな敷地をもつ家が集中し、「赤尾の十八人名主」と呼ばれていたという言い伝えがあります。今回の発掘調査で確認した内耳鍋や土師質土器は、文献や伝承にみえる赤尾の人々の活動を考古学的に裏付けるものとなりました。

同市勝沼町山の北田中遺跡では、河川の堆積層の中から、古墳時代後期の遺物を多数発見しました。土器は全体の形がわかるような状態のよいものが多く、川の中を遠くから運ばれてきたのではなく、近隣に集落があったと考えられます。北田中遺跡の立地は、重川に沿った洪水の影響を強く受ける低い土地であり、この付近に集落が営まれたということは、古墳時代後期には重川沿いの低地の開発が進んでいたものと思われます。

また、注目すべき遺物としては、黒漆塗りの土師器高坏があります。保存状態が非常に良く光沢を保ち、一部には溜まっていた漆が固まったような付着物があります。単なる漆塗の品物でなく、漆塗り作業で使用された器であり、近くに漆塗りの工房があった可能性があります。

本書および出土遺物・発掘調査資料が甲州市を中心とする地域の歴史解明あるいは地域学習の糧となれば幸いです。

末筆ではありますが、西畑Ｂ遺跡ならびに北田中遺跡の発掘調査および報告書作成にあたり、さまざまな協力をいただいた機関および関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 20 年 3 月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　末木　健

例　　言

1．本書は、山梨県甲州市塩山赤尾672番地外に所在する西畑Ｂ遺跡と山梨県甲州市勝沼山429・430に所在する北田中遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は国道411号線塩山バイパス建設に先立って、山梨県教育委員会が山梨県土木部からの委託を受け、山梨県土木部の経費負担により、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。ただし、西畑Ｂ遺跡西区の試掘の経費は、文化庁からの国庫補助を受けて、山梨県教育委員会が負担した。試掘調査の出土品や図面などの分析編集や報告書刊行などの整理作業は、北区・南区の整理作業と合わせて埋蔵文化財センターが実施し、経費は山梨県土木部が負担した。
3．本書に係わる発掘調査および整理作業について、山梨県土木部との調整は、山梨県教育委員会学術文化財課が担当した。
4．西畑Ｂ遺跡の発掘調査は、平成18年（2006）7月５日～９月13日、試掘調査は平成19年２月13日～３月２日、北田中遺跡の発掘調査は平成18年８月７日～９月15日の期間に行った。
5．整理作業は山梨県埋蔵文化財センターにおいて、基礎的整理を平成18年12月1日～平成19年３月30日に、本格的整理作業を平成19年６月20日～平成20年3月31日の期間に行った。
6．本書の執筆・編集は山梨県埋蔵文化財センターの村石眞澄・大木丈夫が担当した。
7．本書に掲載した発掘現場の写真は、村石眞澄・芦澤昌弘が撮影した。
8．本書に掲載した整理作業および遺物の写真は、村石眞澄・大木丈夫が撮影した。
9．本調査に係わる資料（出土品・写真・図面・他の記録類）は山梨県埋蔵文化財センターが一括保管している。
10．発掘調査および報告書作成にあたっては下記の組織・個人からご助言・ご協力を賜った。ご芳名を記し、深く感謝申し上げる。

組織　甲州市教育委員会
個人　飯島　泉、杉本悠樹、保坂幸義、保坂友一、萩原良知、古家福治、室伏　徹

凡　　例

1．遺構・遺物の縮尺は各図中に示した。
2．方位は図中に座標北で示した。
3．土層断面図は、横軸（水平軸）の縮尺を圧縮して作図した。その縮尺値は各図に示した。また標高はメートル単位で示した。
4．発掘調査が短期間あったため、グリッドを設定しなかった。公共座標値は、国道411号線塩山バイパス建設工事で使用している日本測地系座標（旧座標）の数値をもとに、国土地理院提供の変換プログラムを用いて世界測地系座標を求め表に示した。
5．遺物の注記の略号は、西畑Ｂ遺跡は「西ハタＢ」、トレンチ名は算用数字の後に「Ｔ」、平板測量で取り上げた遺物番号は頭に「Ｈ」付けた算用数字で示した。北田中遺跡は「キタ田中」、トレンチ名は算用数字の後に「Ｔ」、平板測量で取り上げた遺物番号は頭に「Ｈ」付けた算用数字で示した。個々の注記略号は遺物観察表に掲載した。
6．実測対象とした土器の抽出は、全体の1/3以上残存している個体、口縁部・底部など特徴的な形状が図示できるものを選択した。
7．遺物の計測値は、土器については、観察表に口径・器高・底径を示した。口径は口唇の直径とした。現存値の場合は括弧を付した。
8．既報告文献

山梨県教育委員会　2006　『山梨県県内分布調査報告書』平成17年「塩山バイパス建設事業[甲州市塩山赤尾]、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第240集、ｐ８-９
山梨県教育委員会　2006　『山梨県県内分布調査報告書』平成17年「塩山バイパス建設事業[甲州市勝沼]、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第240集、p28-29
山梨県教育委員会　2007　『年報』23　2006年度（平成18年度）、「１-11西畑B遺跡」、p34-35
山梨県教育委員会　2007　『年報』23　2006年度（平成18年度）、「１-９北田中遺跡」、ｐ30-31
山梨県教育委員会　2007　『年報』23　2006年度（平成18年度）、「４-７国道411号塩山バイパス建設に伴う試掘調査（西畑B遺跡）」、p44-45
山梨県教育委員会　2007　『山梨県県内分布調査報告書』平成18年「塩山バイパス建設事業[甲州市塩山赤尾]、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第257集

目　　次

序
例言・凡例
目次
西畑Ｂ遺跡あらまし …… i
北田中遺跡あらまし …… v

西畑Ｂ遺跡

第１章　調査経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　北区・南区の発掘調査の経過 …… 3
第３節　西区の試掘調査の経過 …… 3
第４節　整理調査の経過 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の方法と成果 …… 8
第１節　調査方法 …… 8
第２節　基本層序 …… 10
第３節　遺構 …… 11

まとめ …… 34

北田中遺跡

第４章　調査経過 …… 51
第１節　調査に至る経緯 …… 51
第２節　発掘調査の経過 …… 51
第３節　整理調査の経過 …… 52

第５章　遺跡の位置と環境 …… 54
第１節　地理的環境 …… 54
第２節　歴史的環境 …… 55

第６章　調査の方法と成果 …… 57
第１節　調査方法 …… 57
第２節　基本層序 …… 57
第３節　遺構 …… 60
第４節　遺物 …… 60

まとめ …… 75

挿図目次

第１図　西畑Ｂ遺跡調査範囲図（1/500）…… 2
第２図　西畑Ｂ遺跡位置図（1/25000）…… 5
第３図　西畑Ｂ遺跡および周辺遺跡位置図（1/3000）…… 7
第４図　西畑Ｂ遺跡トレンチ設定図（1/300）…… 9
第５図　西畑Ｂ遺跡基本土層図 …… 11
第６図　西畑Ｂ遺跡北区土層断面図（1/40）…… 12
第７図　西畑Ｂ遺跡南区平面図・土層断面図 …… 13
第８図　西畑Ｂ遺跡北区礫集中第１面（1/40）…… 14
第９図　西畑Ｂ遺跡北区礫集中第２面（1/40）…… 15
第10図　西畑Ｂ遺跡北区礫集中第３面（1/40）…… 16
第11図　西畑Ｂ遺跡西区調査範囲図（1/300）…… 17
第12図　西畑Ｂ遺跡西区土器集中平面図（1/40）…… 18
第13図　西畑Ｂ遺跡西区土層断面図（1）…… 19
第14図　西畑Ｂ遺跡西区土層断面図（2）…… 21
第15図　西畑Ｂ遺跡出土遺物実測図（1）…… 28
第16図　西畑Ｂ遺跡出土遺物実測図（2）…… 29
第17図　西畑Ｂ遺跡出土遺物実測図（3）…… 30
第18図　西畑Ｂ遺跡出土遺物実測図（4）…… 31
第19図　西畑Ｂ遺跡出土遺物実測図（5）…… 32
第20図　西畑Ｂ遺跡出土遺物実測図（6）…… 33

第21図　北田中遺跡調査範囲図（1/500）…… 53
第22図　北田中遺跡位置図（1/25000）…… 54
第23図　北田中遺跡および周辺遺跡位置図（1/10000）…… 56
第24図　北田中遺跡基本土層図 …… 58
第25図　北田中遺跡発掘範囲図（1/100）…… 61
第26図　北田中遺跡遺物出土位置図（1/80）…… 62
第27図　北田中遺跡土層断面図 …… 63
第28図　北田中遺跡出土遺物実測図（1）…… 64
第29図　北田中遺跡出土遺物実測図（2）…… 65
第30図　北田中遺跡出土遺物実測図（3）…… 66
第31図　北田中遺跡出土遺物実測図（4）…… 67
第32図　北田中遺跡出土遺物実測図（5）…… 68
第33図　北田中遺跡出土遺物実測図（6）…… 69

表 目 次

第１表　西畑Ｂ遺跡　測点平面直角座標 …… 10
第２表　西畑Ｂ遺跡出土遺物観察表 …… 23
第３表　北田中遺跡　測点平面直角座標 …… 57
第４表　北田中遺跡出土遺物観察表 …… 70

南区調査着手前（北から）

西畑Ｂ遺跡

南区調査着手前（南から）

第１章　調査経過

第１節 調査に至る経緯

北区・南区の発掘調査

西畑Ｂ遺跡の発掘調査を実施するに至った経緯は、国道411号塩山バイパス道路建設予定地内に周知の遺跡である「西畑B遺跡」が存在し、平成17年２月８日に試掘を行ったところ、15世紀に位置づけられる内耳鍋や土器が出土し、遺構が存在する可能性が高いことが判明したためである。

これに基づき事業主である山梨県土木部峡東建設事務所と山梨県教育委員会学術文化財課と山梨県埋蔵文化財センターの３者で協議を行い、発掘調査を実施することとなった。

そこで山梨県埋蔵文化財センターが、平成18年（2006）７月５日から９月13日にかけて発掘調査を実施した。この発掘調査の経費は、山梨県土木部が負担した。

調査範囲は狭いながらも高さ約1.5ｍの石垣で南北に分割されることから、北区と南区とに区別することとした。北区は、石垣で保護された高い土地であり、これに対し南区は低い土地であった。そこで発掘調査は、土地の標高差が大きいことに加えて排土置き場を確保するために２段階方式で行った。具体的には、まず南区の調査に着手し、南区の調査の終了後に、北区の発掘調査を実施した。

以上の西畑Ｂ遺跡（北区・南区）の発掘調査に関わる法的手続きは次のとおりである。

平成18年７月11日　文化財保護法第99条に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第258号）

平成18年９月28日　遺失物法第13条に基づく埋蔵文化財の発見通知を山梨県教育委員会教育長を経由して塩山警察署長に提出（教埋文第435号）

西区の試掘調査

西区は、前述の北区・南区とは用水路を隔てて西側に当たる。北区・南区の調査の段階では、用地が未取得であったが、北区・南区の発掘調査前に行った山梨県土木部峡東建設事務所と山梨県教育委員会学術文化財課と山梨県埋蔵文化財センターの３者との協議で、試掘調査が必要であることを確認してあった。そこで、用地取得後に家屋撤去など試掘調査の準備が整ったために、埋蔵文化財センターが平成19年２月13日から３月２日にかけて試掘調査を実施した。この試掘調査の経費は、文化庁からの国庫補助を受けて、山梨県教育委員会が負担した。

第３トレンチから縄文時代中期末の土器が集中的に出土する範囲があることを確認した。しかし、遺物出土範囲が狭い部分に限定されたため、試掘調査の期間内で、遺物出土範囲の調査を完了した。出土遺物は、縄文時代中期末の土器を主とするもので、その量はコンテナ（長さ45cm×幅30cm×25cm）６箱であった。この試掘調査の出土品や図面などの分析編集や報告書刊行などの整理作業は、北区・南区の整理作業を合わせて埋蔵文化財センターが実施し、経費は山梨県土木部が負担することを協議により確認した。

以上の西畑Ｂ遺跡（西区）の発掘調査に関わる法的手続きは次のとおりである。

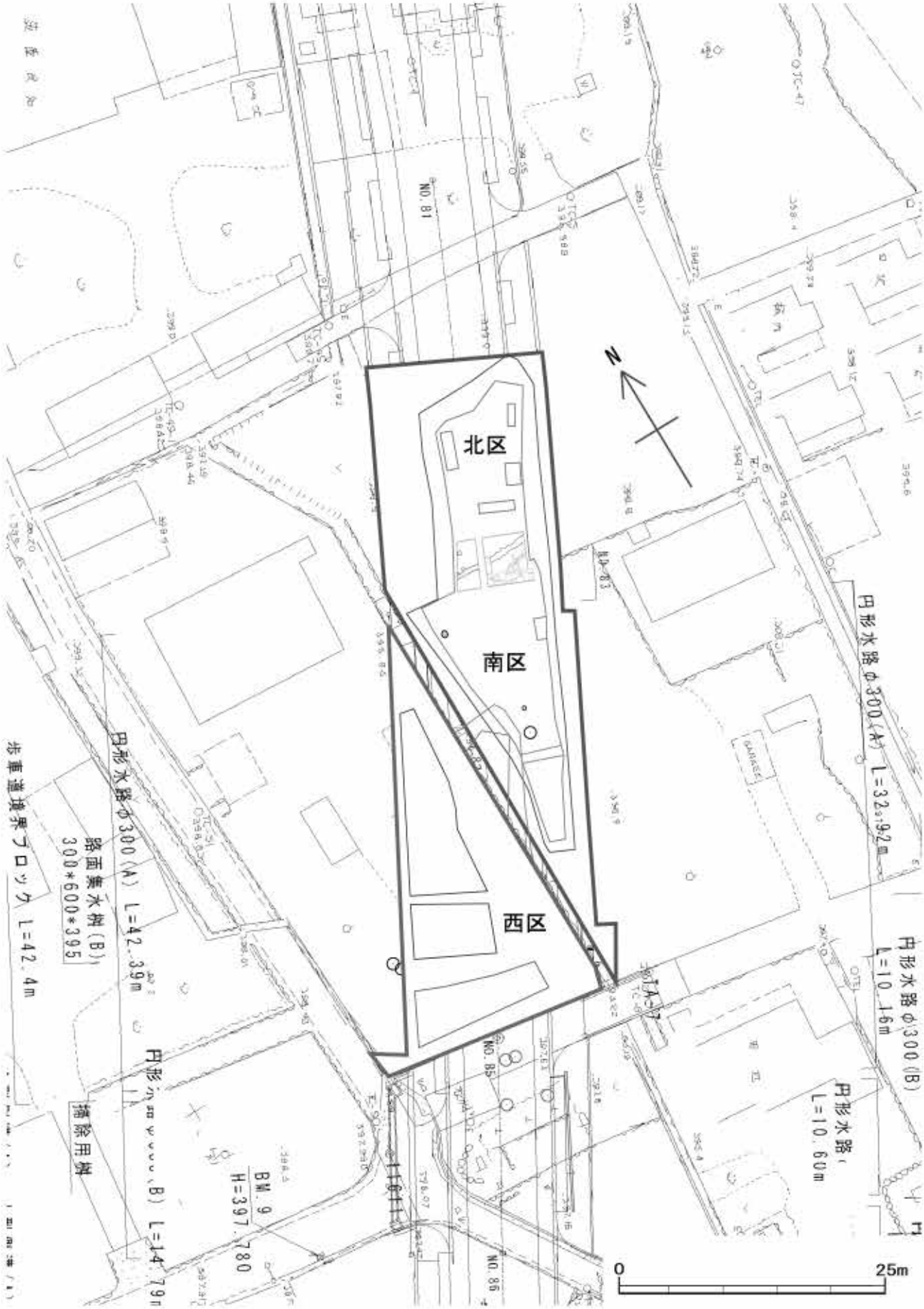
平成19年２月８日　文化財保護法第99条に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第812号）

平成19年３月７日　遺失物法第13条に基づく埋蔵文化財の発見通知を山梨県教育委員会教育長を経由して塩山警察署長に提出（教埋文第857号）

整理作業

西畑Ｂ遺跡の北区・南区の発掘調査および西区の試掘調査の出土品や図面などの室内整理作業については、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。基礎的整理は平成18年12月１日から平成19年３月30日に、本格的整理作業は平成19年６月１日から平成20年３月31日の期間に行った。

これらの報告書刊行を含めた整理作業の経費は山梨県土木部が負担した。



第１図　西畑B遺跡調査範囲図(1/500)

第 2 節 北区・南区の発掘調査の経過

調査範囲は高さ約 1.5 mの石垣で北区と南区に分割され、北区は石垣で保護された高い土地であり、南区はこれに対して低い土地であった。そこで発掘調査は、土地の標高差が大きいことと、排土置き場を確保するために２段階方式で行った。

まず、7 月 5 日から南区の調査に着手し、バックホー（0.4m³）と 4 トンダンプにより、南区の表土を剥ぎ作業を行い、仮舗装された道路上へ排土を仮置きした。この際、ブルーシートで養生し、降雨による土砂流出防止を行った。

作業員によるジョレン掛けによる精査と、ミニバックホーによる掘り下げを併用し、南区全体の遺構確認を行なった。さらに、3 本のトレンチを設定し、部分的に掘り下げを行った。遺構は焼土跡などのみであり、平面図と土層断面図を作成し、7 月 21 日に南区の調査を終了した。

北区の調査は、7 月 24 日のバックホー（0.4m³）による表土剥ぎから開始した。北区の表土剥ぎと同時に、南区の埋め戻しを行い、最終的には南区を北区の排土仮置き場とした。

北区全面のジョレン掛けによる遺構確認を行い、3 本のトレンチと 2 本のサブトレンチを設定し、調査を進めた。石垣の基礎と考えられる礫集中と溝などの調査を行い、写真撮影と平面図および土層断面図を作成し、8 月 16 日に調査を終了した。

埋め戻し作業は、北田中遺跡の埋め戻し工程に合わせて、9 月 11 日から 9 月 13 日に実施した。

調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	村石眞澄、芦澤昌弘
発掘作業作業員	雨宮久美子、長田美代子、土屋常子、手塚理恵、戸田ひろ、正木なつ子、皆川勇貴

第 3 節 西区の試掘調査の経過

西区の中でも、西側は東側に比べて、やや高く「保坂氏屋敷」遺跡の中心部に近いために、表土から人力で慎重に掘り下げて、丹念に調査を実施したが、中世の遺構は確認できなかった。

西区西側に比べ、用水路よりの東側は土地がやや低く、遺構の密度も低いと予想していたが、第 3 トレンチから縄文時代中期末の土器が集中的に出土した。平板測量により、土器の出土位置を記録しながら、取り上げを行った。試掘対象範囲も狭く、縄文土器を包含する黒褐色砂質土を掘り下げ、粗砂混じりの大礫（拳大以上人頭大以下）～巨礫層に達し、土器が出土しなくなったので、掘り下げを中止し、写真撮影、平面図および土層断面図を作成し、3 月 2 日ミニバックホーにより埋め戻し、試掘調査を終了した。

調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	村石眞澄、大木丈夫
発掘作業作業員	雨宮久美子、長田美代子、沢登淳子、戸田ひろ、深沢茂子

第 4 節 整理調査の経過

室内における出土品や図面などの整理作業については、出土遺物の水洗・注記と分類などの基礎的整理作業を平成 18 年 12 月1日から平成 19 年 3 月 30 日の期間で実施した。平成 19 年6月1日から平成 20 年3月 31 日の期間に、分類・観察に基づき出土品の評価を行い、実測図・トレース図を作成した。さらに発掘調査において、現地で作成した遺物出土位置図などを取りまとめて調査成果を示す、発掘調査報告書を刊行する本格的整理作業を実施した。

調査組織

調査主体　　山梨県教育委員会

調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　平成 18 年度　村石眞澄、芦澤昌弘

　　平成 19 年度　村石眞澄、大木丈夫

整理作業員　川住たまみ、土屋常子、樋口久子、野澤まゆみ、萩原里江子、渡辺麗子（平成 18・19 年度）

関連文献

山梨県教育委員会　2006 『山梨県県内分布調査報告書』平成 17 年「塩山バイパス建設事業 [甲州市塩山赤尾]、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 240 集、p 8 - 9

山梨県教育委員会　2007 『年報』23　2006 年度（平成 18 年度）、「1 -11 西畑 B 遺跡」、p34-35

山梨県教育委員会　2007 『年報』23　2006 年度（平成 18 年度）、「4 - 7国道 411 号塩山バイパス建設に伴う試掘調査（西畑 B 遺跡）」、p44-45

山梨県教育委員会　2007 『山梨県県内分布調査報告書』平成 18 年「塩山バイパス建設事業 [甲州市塩山赤尾]、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 257 集

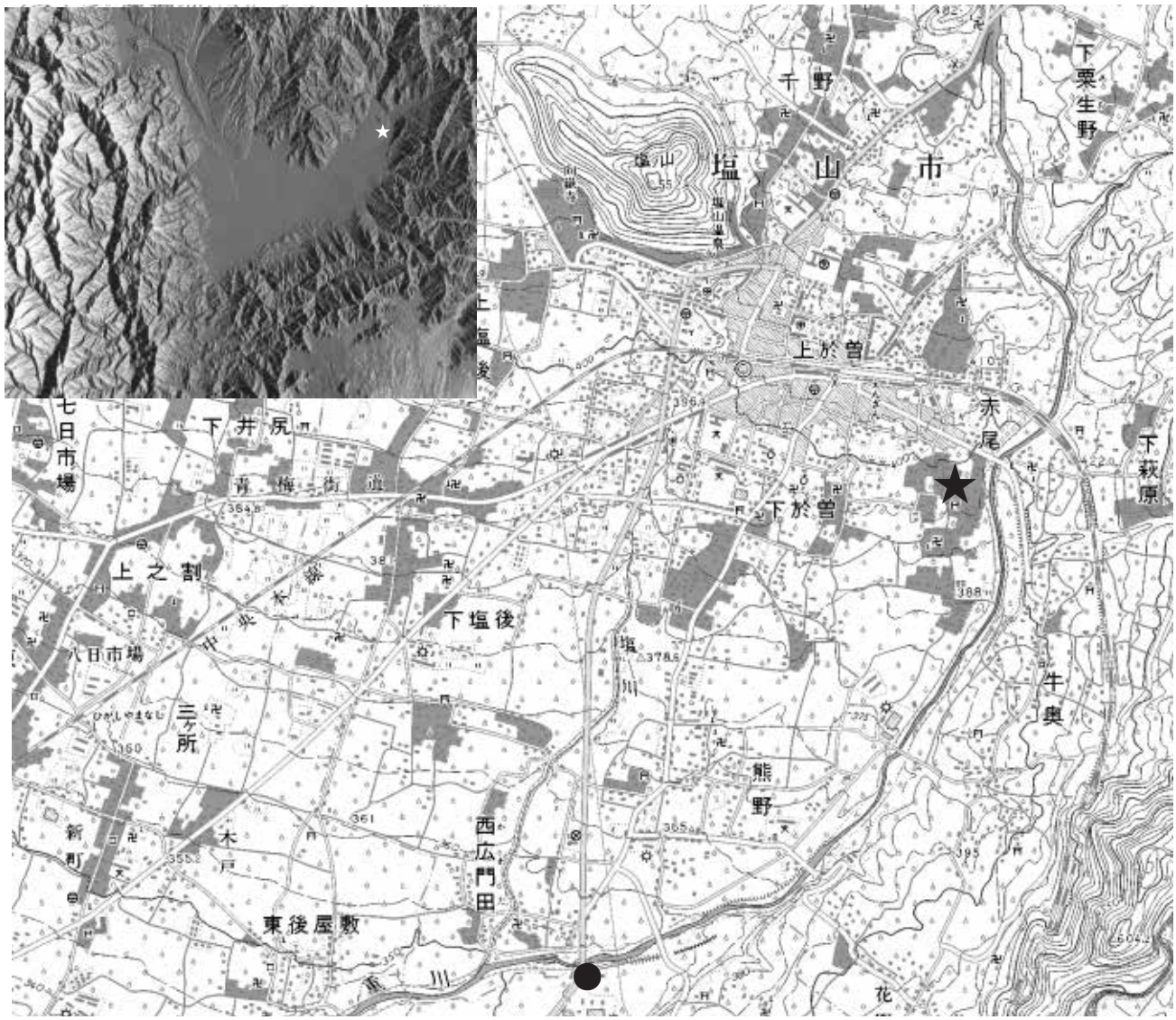
第２章　遺跡の位置と環境

第１節 地理的環境

西畑Ｂ遺跡は、甲府盆地の北東部にそびえる大菩薩嶺を代表とする山地を水源とする重川が、形成した扇状地上の標高約 398 mに立地している。西畑B遺跡が位置する扇状地は、南に向かって傾斜し、日当たりが良好な土地である。本遺跡は、塩山駅東南約 500 m、甲州市塩山赤尾に所在する。

西畑Ｂ遺跡の西側に位置する保坂氏屋敷（第３図 212）に典型的に見られるように、古い集落は、周囲の畑に比べてわずかに高い土地に立地している。平面形も、紡錘形を呈し、扇状地が形成される過程でつくられた微高地を利用していると考えられる。

この古い集落中の鍵手に曲がって通っている道は、北方へは法蓮寺門前（第２節参照）を経て千野付近で青梅街道に接続し、南は大石神社、湧泉寺を経てから勝沼へ通じる古道となっている。この集落には、大きな敷地を占める家が集中し、また「赤尾の十八人名主」と呼ばれたという言い伝えがある。つまり、近代以前から、赤尾は、重川の東岸の重要な集落であったと考えられる。



★：西畑B遺跡　●：北田中遺跡

第２図　西畑B遺跡位置図（1/25000）

第 2 節 歴史的環境

西畑B遺跡が所在する旧塩山市域の代表的な遺跡を概観してみる。縄文時代前期の遺跡では、諸磯ａ～b式の集落跡で、有脚土偶や多量の水晶原石が出土した獅子之前遺跡がある。縄文時代中期では、中部高地の豊かな文化を物語る、多くの土器が出土した安道寺遺跡や重郎原遺跡がある。この安道寺遺跡や重郎原遺跡は、重川左岸の河岸段丘上に分布している。また、大木戸遺跡では、縄文時代前期の住居跡 10 軒、中期の住居跡 4 軒確認されている。さらに、一ノ坪遺跡も、縄文時代前期から中期の遺跡である。これらの獅子の前遺跡、大木戸遺跡、一ノ坪遺跡は、重川右岸の扇状地上に立地している。

弥生時代から古墳時代の遺跡では、西田遺跡が昭和 52・53 年に発掘調査され、弥生時代末から古墳時代前期の集落や古墳時代前期末の方形周溝墓群が確認されている。下西畑遺跡（41）からも同時期の方形周溝墓が検出されている。五反田遺跡は古墳時代前期末の集落跡である。しかし、旧塩山市域での古墳の存在は知られていない。これらの遺跡は、重川右岸に位置している。

西畑 A 遺跡（49）や影井遺跡などでは、8～11 世紀の平安時代の集落跡が検出されている。重川右岸に平安時代の集落が展開していたことが知られる。

西畑B遺跡から、内耳鍋などの中世の遺物が出土しているので、旧塩山市域の中世の遺跡などについて触れたい。この地域は、甲斐源氏と強い結びつきを持つ寺社が数多くある。例えば、安田義定を開基とする放光寺や、武田信玄の菩提寺の恵林寺や向嶽寺がある。また、国宝に指定されている武田家相伝の小桜韋威鎧兜、大袖付（楯無しの鎧）を所蔵している菅田天神社や、武田氏とゆかりの深い熊野神社が鎮座する。県指定史跡の於曽屋敷は中世の土豪の屋敷跡である。

旧塩山市北東には、戦国時代、多量に金を産出した黒川金山があり、下於曽から熊野にかけて池田氏屋敷（下於曽）、田辺氏屋敷（下於曽）、依田宮内左衛門屋敷（熊野）など、黒川金山の採掘に関わった金山衆の屋敷も存在する。

西畑B遺跡が所在する大字赤尾には、天正 2 年（1574）12 月 23 日付の保坂次郎右衛門尉宛て武田家朱印状が伝えられている（212）。同日に全く同じ内容の古文書が金山衆に宛てて出されており、そのうえ、他の金山衆も武田信玄以来の特権を勝頼から再び保護されていることから、保坂次郎右衛門尉も黒川金山に関わる金山衆の一人であったことがわかる（武田家朱印状〔保坂家文書〕『山梨県史』資料編 4　451 号文書等）。

また、永禄 4 年（1561）閏 3 月、武田信玄は国中（くになか）の禰宜に対し、府中八幡神社で国家安穏の祈祷するよう命じている。一般に「永禄の番帳」といわれるもので、二人の神主八十二組が、二晩ずつ府中八幡神社で甲斐国の平和を祈った。その十六番に「あかをの祢き」とある。「あかをの祢き」とは、当遺跡の東南に隣接する大石神社の神主のこととされる（武田家朱印状写〔今沢家文書〕『山梨県史』資料編 4　40 号文書）。大石神社の神主が、神社の所在地である地名をとって、赤尾の禰宜と称されているので、当時から遺跡周辺の地は「赤尾」と呼ばれていたと考えられる。これらのことから、遅くも中世末には、赤尾という集落が形成されていたものと思われる。

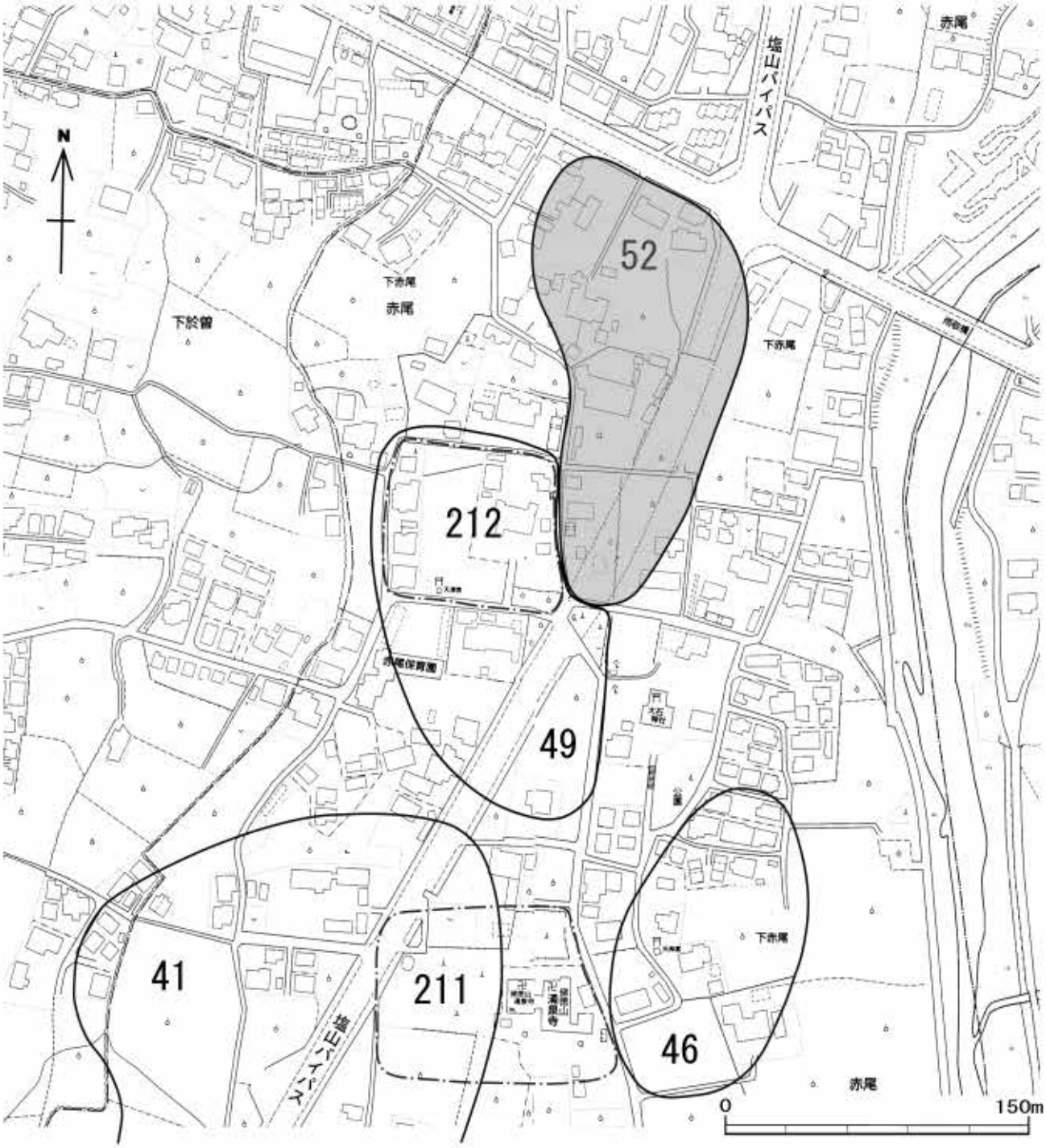
また、本遺跡北方約 600m の同地区には、法蓮寺がある。『甲斐国志』によると黒川山内から古府中に移り、そして赤尾に移転したという（『甲斐国志』巻 75　大日本地誌体系第 3 巻 P229 等）。もともと黒川山内にあったとされるので、金山衆との関わりも想定される。また、この法蓮寺の門前には、「黒川下り」と呼ばれた、いくつかの家があったとことを近隣の調査で聞き取っている。

遺跡の所在する赤尾は、保坂次郎右衛門尉宛武田家朱印状が伝えられていること、法蓮寺の存在などからみても、黒川金山や金山衆とつながりが深い地域であることがわかる。（大木丈夫）

参考文献

山梨県教育委員会他編　昭和 53 年『西田遺跡－第 1 次発掘調査報告書－』
山梨県教育委員会他編　平成 3 年『獅子之前遺跡発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 61 集
山梨県教育委員会他編　平成 9 年『西田遺跡－第 2 次発掘調査報告書－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 138 集

山梨県教育委員会他編　平成 9 年『一ノ坪遺跡発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 141 集
山梨県教育委員会他編　平成 14 年『五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 194 集
山梨県教育委員会他編　平成 14 年『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 196 集
山梨県教育委員会他編　平成 15 年『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 205 集



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
41	下西畑遺跡	縄文/弥生/古墳	52	西畑Ｂ遺跡	縄文/中世
46	宮沢遺跡	縄文/古墳/平安	211	八代氏屋敷	
49	西畑Ａ遺跡	平安/中世	212	保坂氏屋敷	

第 3 図　西畑B遺跡および周辺遺跡位置図（1/3000）

第３章　調査の方法と成果

第１節 調査方法

西畑Ｂ遺跡は、試掘調査で、山梨県内で類例の少ない15世紀中頃の内耳鍋や土師質土器が発見されており、中世の遺構が存在する可能性が高く、地表面から浅い部分で遺構を確認すべく留意した。

本遺跡は、平成18年（2006）７月５日から９月13日の期間に発掘調査を行った北区と南区、平成19年２月13日から３月２日の期間に試掘調査を行った西区の３区に分割される。

北区と南区の境界には、高さ約1.5ｍの石垣があり、北半はこの石垣で保護された高い土地であり、南区は石垣下に広がる低い土地である。発掘調査は、標高差が大きいことに加えて、排土置き場を確保するために２段階方式で実施した。

遺構と遺物出土位置の記録は、平板測量によって行った。

調査グリッドは、発掘対象が小面積であるために、設定しなかった。公共座標への取り付けは、公共座標による計測点（道路中心杭など）が示されている本体工事図面（1/500）へ、調査区の平板測量図を記入し図示した。本体工事の測量基準点は、旧日本測地系の座標値で示されているので、国土地理院提供の計算プログラムにより、世界測地系（日本測地系2000）の新座標値を求めた。

南区では、遺構としては時期不明の焼土跡、遺物では、近世・近代の瓦質土器・瓦の集中を確認した。

南区

南区の調査から着手し、バックホー（0.4m^3）と４トンダンプにより表土剥ぎ作業を行い、北側の仮舗装された道路上へ排土を仮置きした。この際には、ブルーシートを敷き、降雨による土砂の流出防止を図った。

人力で調査区壁面を整形し、土層断面の精査を行った。遺構が確認できなかったので、ミニバックホーで灰茶褐色土を除去し、黒褐色砂質土の上面をジョレン掛けにより、遺構確認を進めたが、遺構を確認できないため、第１～3トレンチを設定し、さらに掘り下げを行った。

第１・２トレンチの壁面の土層堆積は、一部にシルトを含む粘土層を主体とする堆積であり、中にはラミナ構造[(1)]が顕著な河川堆積層もあり、遺構覆土や遺物包含層を確認することができなかった。第３トレンチでは、巨礫の間にシルト・細砂が堆積している河川堆積層まで掘り下げた。

北区

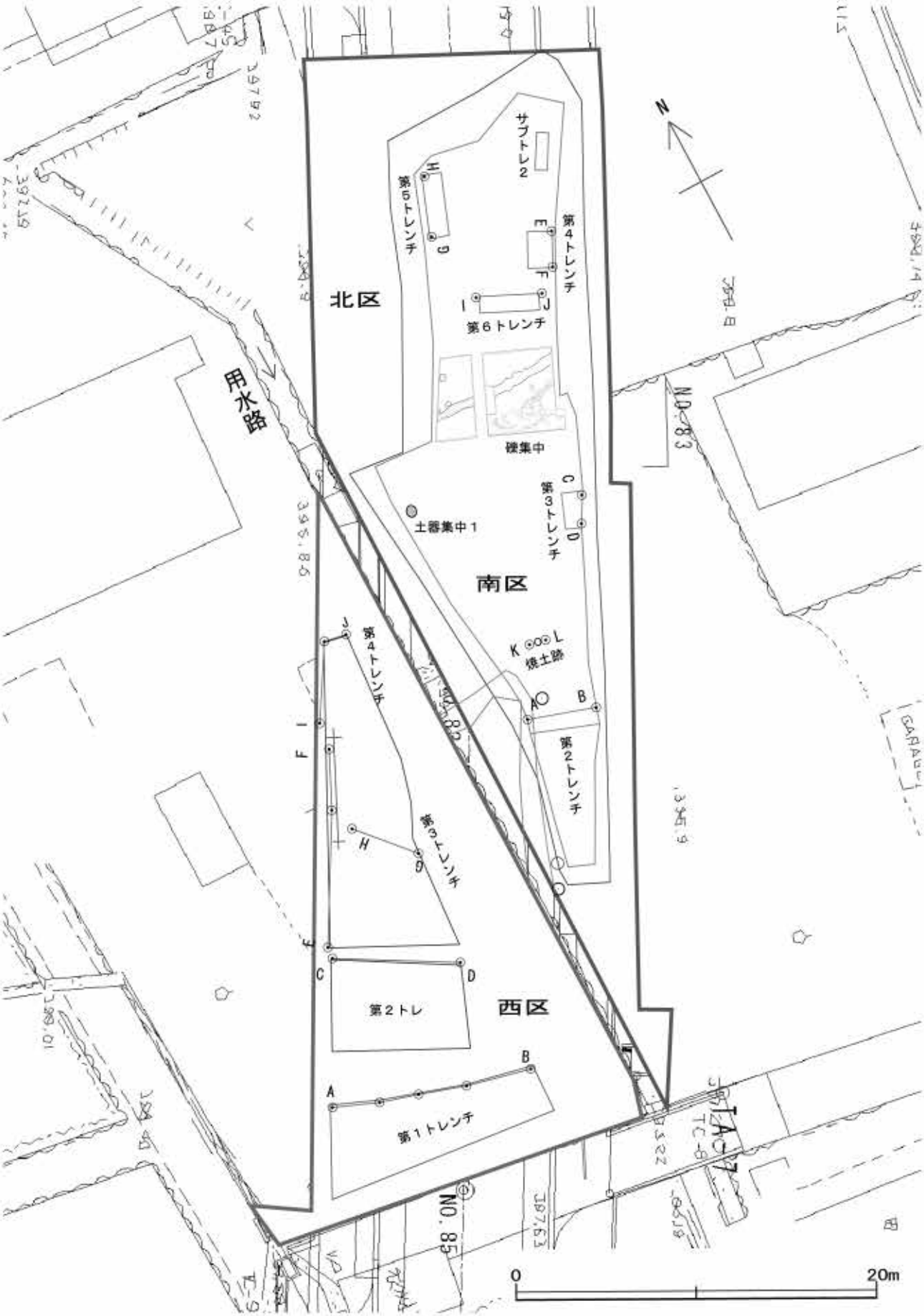
北区の調査も、バックホー（0.4m^3）による表土剥ぎから開始した。北区の表土剥ぎによる排土にて、南区の埋め戻しを行い、南区を北区の排土仮置き場とした。

北区も南区と同様にジョレン掛けを行って、とくに中世の遺構が存在する可能性に配慮して、遺構確認を進めた。さらに、第４～６トレンチの３本のトレンチと２本のサブトレンチを設定し、掘り下げて調査を進めた。また石垣の基礎部分の礫が集中している箇所と、これに付属する溝などの調査を行った。土師質土器や内耳鍋破片などが出土した。

西区

西区は、南区・北区とは用水路を隔てて、西側にあたり、「保坂氏屋敷遺跡（第３図212）」の中心部により近く、標高もやや高いため、中世の遺構が存在する可能性を考慮し、慎重に調査を行った。第１～４トレンチを設定し、表土から人力で慎重に掘り下げて、丹念に調査を進めた。しかし、古代・中世の遺構は確認できなかった。しかし、用水路よりの東側の部分では土地がやや低く、遺構の密度も低いと予想していたが、第３トレンチから縄文時代中期末の土器が集中的に出土した。平板測量により、土器の出土位置を記録しながら、取り上げを行った。

第３・４トレンチ東側は、用水路際は石垣となっており、撹乱が深く、包含層の残りが悪く、石垣が崩壊する危険性を考慮し、慎重に掘削をした。掘削可能な範囲については、縄文土器を包含する黒褐色砂質土を掘り下げ、土器を含まない粗砂混じりの大礫（拳大以上人頭大以下）～巨礫層（河川堆積層）まで調査を行った。



第４図　西畑B遺跡トレンチ設定図(1/300)

第１表　西畑Ｂ遺跡　測点平面直角座標

測点名	X座標(世界測地系)	Y座標（世界測地系）	X座標（旧日本測地系）	Y座標（旧日本測地系）
NO.81	-33035.2139	21531.8392	-33387.489	21813.787
NO.82	-33053.3973	21523.5159	-33405.673	21805.464
KE4-2	-33068.9168	21515.9067	-33421.193	21797.855
NO.83	-33071.3357	21514.6767	-33423.612	21796.625
NO.83+11.5	-33081.5364	21509.3705	-33433.813	21791.319
NO.84	-33089.0282	21505.3574	-33441.305	21787.306
NO.84+11.0	-33098.6699	21500.0643	-33450.947	21782.013
NO.85	-33106.5197	21495.6632	-33458.797	21777.612
NO.86	-33123.8641	21485.7079	-33476.142	21767.657

※VIII系原点（北緯36°00分00秒、東経138°30分00秒からの距離

第２節 基本層序

代表的な土層堆積を第５図基本土層図に示した。

北区と南区の基底をなす、Ｖ層は、大円礫～巨礫の間をシルトや砂質土が充填するように堆積している。巨礫を運搬するのは、土石流のような激しい流れと考えられる。つまり、大円礫や巨円礫が先に堆積し、その後、比較的流速の遅い水流によって、シルトや砂質土だけが運ばれて形成された可能性が高い。

Ⅰ層　表土・畑地の耕作土層

北区第４トレンチ東壁　1a：暗灰黄 (2.5Y5/2) 細砂質土混じり灰オリーブ (2.5Y6/2) 細砂層

※ 部分的に北区第４トレンチ東壁 1b 層のようなラミナ構造が部分的に認められる洪水堆積が存在する。

Ⅱ層　明治 40 年水害の洪水堆積砂層

西区第４トレンチ西壁　3：灰シルト混じり黄褐 (2.5Y5/3) 細砂層　ラミナ（葉理）が顕著に認められる。

Ⅲ層　明治 40 年以前の旧耕作土層　堆積構造が観察できない。

北区第４トレンチ東壁　2：褐 (10YR4/4) 土層

南区第３トレンチ東壁　2：にぶい黄褐 (10YR4/3) 砂質土層

西区第４トレンチ西壁　4：亜小円礫混じり黄褐 (2.5Y5/4) 砂質シルト層

Ⅳ層　河川堆積物を主体とする層　シルトから中粒砂、粒度が比較的細かい。

北区第４トレンチ東壁　4：にぶい黄褐 (10YR5/3) 砂質土混じり褐灰 (7.5YR4/1) 砂質土層

南区第３トレンチ東壁　4：黒 (10YR2/1) 砂質土層　灰白 (2.5Y8/2) 細砂を含む。

南区第３トレンチ東壁　5：灰白 (2.5Y8/2) 粗～中粒砂層　下部は褐灰 (10YR5/1) と灰黄シルトの互層となっている。

※ラミナ（葉理）構造が顕著【河川堆積層】

南区第３トレンチ東壁　6：黒 (10YR2/1) 砂質土層　灰白シルトを含む。

Ⅴ層　大円礫から巨円の間をシルトや砂質土が堆積する河川堆積層

北区第４トレンチ東壁　5：大～巨円礫混じり灰黄 (2.5Y6/2) 砂質土層

南区第３トレンチ東壁　7：褐灰 (10YR5/1) 細砂と灰白シルト～細砂の混入層　※ラミナ構造あり

Ⅵ層　洪水堆積層　明治 40 年洪水堆積層より古く、縄文時代の包含層より新しい。

西区第３トレンチ西壁　7：黄褐色砂質土混じり中～大亜円礫層　巨礫も若干含む。

Ⅶ層　縄文土器を含む包含層　縄文土器は中期末を主体として、一部後期初頭のものを若干含む。

西区第３トレンチ西壁　8：小亜円礫混じり黒褐 (10YR3/1) 砂質土層　[縄文時代中期末の土器包含層]

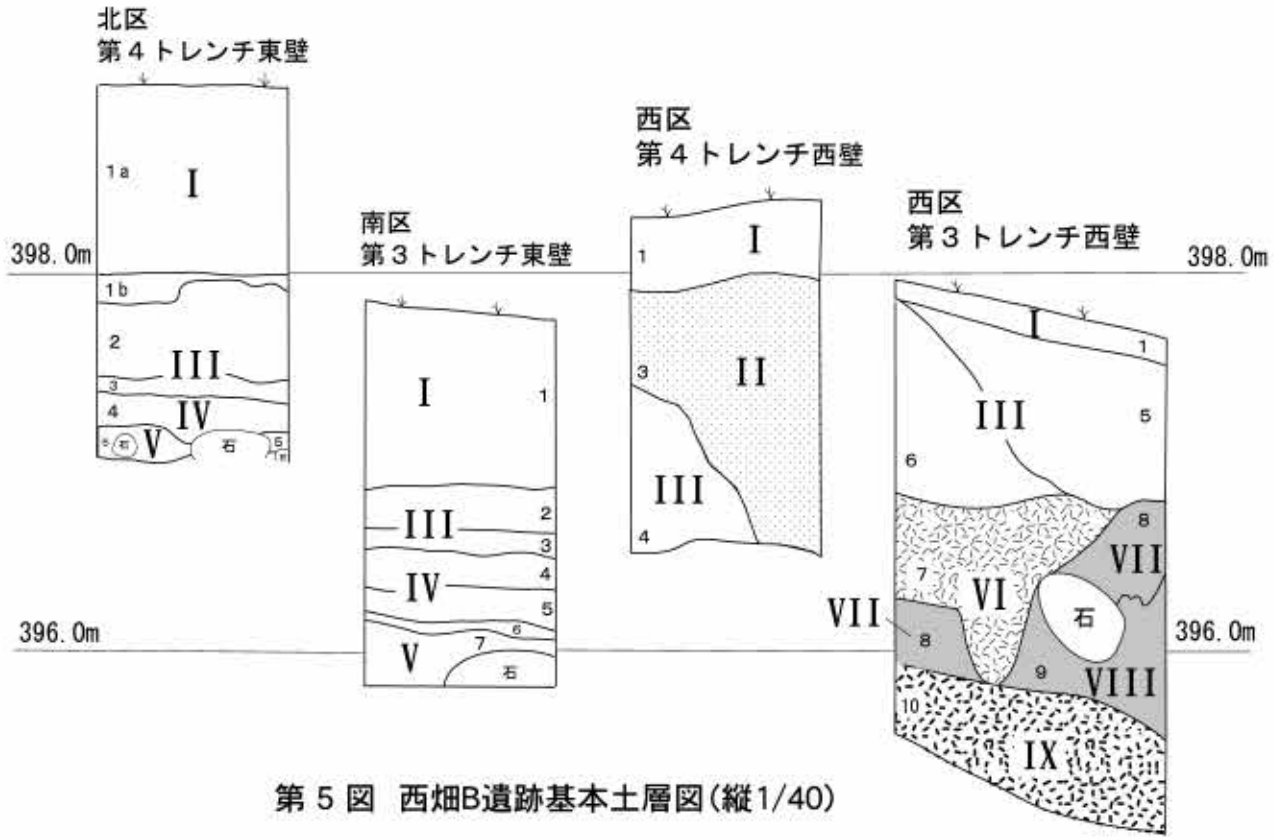
Ⅷ層　縄文時代中期末の地山と考えられる堆積層

西区第３トレンチ西壁　9：黄褐 (2.5Y5/6) 砂質土層

Ⅸ層　縄文時代中期以前の洪水堆積層

西区第３トレンチ西壁　10：褐色粗砂混じり小～大亜円礫層

註(1)　葉理（ラミナ）構造（粗砂以下の洪水堆積層の中にみられる薄い縞状 [通常 10 mm以下] の堆積構造）。



第５図　西畑B遺跡基本土層図（縦1/40）

第３節 遺構

南区

南区で確認できた遺構は、熱により強く硬化した焼土跡である。確認面から８cm 程度の深さまで熱を受けて、赤化し、硬化している。明治 40 年の水害に由来する洪水堆積層の下で確認したので、明治時代以前のものと考えられるが、周辺から遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

西側の用水路に近い地点から、近世・近代の瓦質土器・瓦などの集中している部分を発見した（土器集中 1）。この周辺からは、幕末から明治時代の陶磁器（遺物番号 48 ～ 57）が出土した。また他に、腐食して銭名が不明な穴あき銭１点（遺物番号 59）が出土した。畑などの耕作に支障のない用水路の際に、不要になったものを穴を掘って廃棄したものと考えられる。

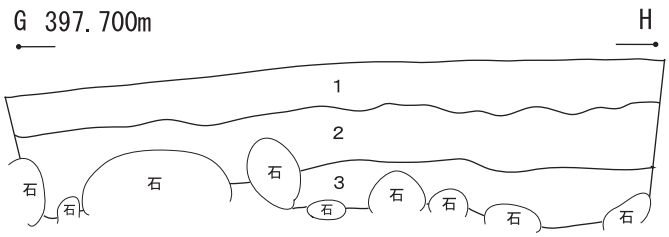
北区

南区との境界の石垣の地上部を取り除いた石垣の基礎部分で礫の集中を確認した。内耳鍋（遺物番号 43・44）・土師質土器（遺物番号 36）が出土し、石垣の面と直交する溝があり、礫が充填されていた。中世の遺構と考えて調査を進めていたが、最終的に、第３面の溝中の礫の間から、江戸時代末の染付け磁器の小片が出土した。この染付け磁器が出土した箇所は、上層からの撹乱の及ばない部分であり、江戸時代末以降のものと判断した。土地の元の所有者からの聞き取り調査では、明治 40 年水害の際に、敷地内など大量に運ばれてきた土砂を、付近の低い畑に入れ、石垣を積んだとのことであった。

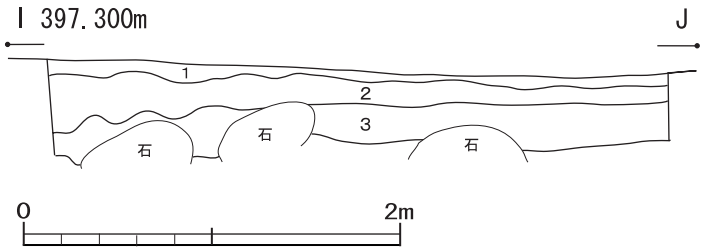
この聞き取り内容と確認した遺構を合わせて考えると、明治 40 年以前に新しく石垣を築いた可能性と、あるいは以前に低いながらも何らかの石垣が存在していた上に、明治 40 年の水害復旧のために石垣を積み直した可能性があ

る。いずれにしても、遺構の構築は江戸時代末以降であり、礫を充填した溝は、石垣内部に溜まった水を排出するためのものと考えられる。

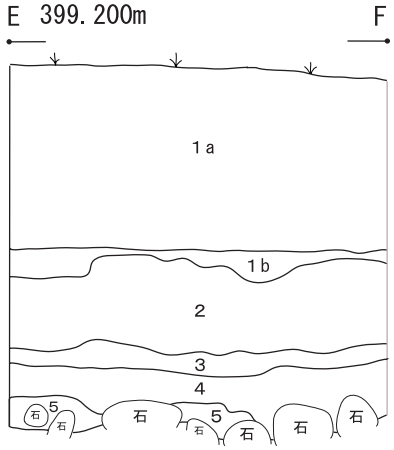
遺物観察表に示すように北区からは、遺物番号36以外にも土師質土器6点出土しているが、いずれも散在的な出土で、遺構を確認できなかった。この北区の堆積は、洪水堆積層などの河川堆積物を基として、耕作を受けたものであり、安定的な土地でなく、建物などの構造物が存在した可能性は低いと考えられる。



第５トレンチ西壁
１．にぶい黄褐(10YR5/3)砂質土混じり褐灰(7.5YR4/1)砂質土層
２．黒(7.5YR2/1)砂質土層
３．灰黄(2.5Y6/2)～黒(7.5YR2/2)砂質土層



第６トレンチ北壁
１．にぶい黄褐(10YR5/3)砂質土混じり褐灰(7.5YR4/1)砂質土層
２．黒(7.5YR2/1)砂質土層
３．大～巨円礫混じり灰黄(2.5Y6/2)砂質土層



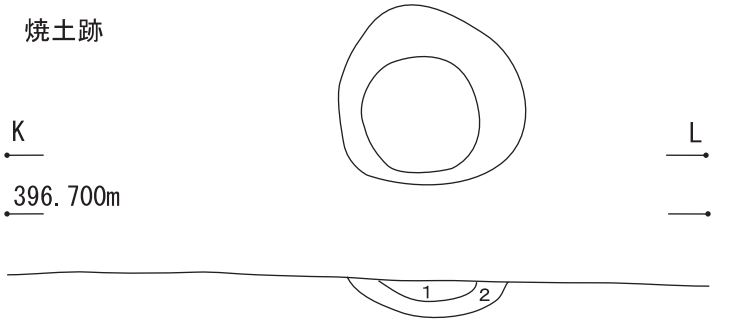
第４トレンチ東壁
1a. 暗灰黄(2.5Y5/2)細砂質土混じり灰オリーブ(2.5Y6/2)細砂層
1b. 灰オリーブ(2.5Y6/2)細砂層　ラミナ構造が認められる。【河川堆積層】
※このトレンチから北西方向に屋敷にお住まいの保坂良知氏からの聞き取りでは、明治40年の洪水ときに、屋敷西側の道へ砂が押し、その砂をこの付近に入れて、低い畑を高くするようにしたという。
２．褐(10YR4/4)土層　【旧耕作土】
３．褐(10YR4/4)土層　黒褐色砂質土を含む。
４．にぶい黄褐(10YR5/3)砂質土混じり褐灰(7.5YR4/1)砂質土層
※６トレの１層に相当。
５．大～巨円礫混じり灰黄(2.5Y6/2)砂質土層

第６図　西畑B遺跡北区土層断面図(1/40)

西区

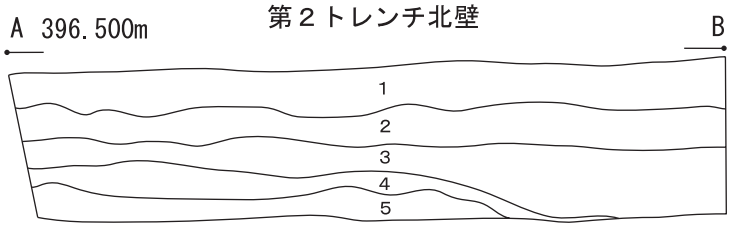
西区は、南区・北区とは用水路を隔てて、西側にあたり、「保坂氏屋敷遺跡（第３図212)」の中心部により近く、標高もやや高く、中世の遺構が存在する可能性を想定し、慎重に調査を行ったが、中世の遺構は確認できなかった。しかし、用水路よりの東側の部分では土地がやや低く、遺構の密度も低いと予想していたが、第３トレンチから縄文時代中期末の土器が集中的に出土した。平板測量により、土器の出土位置を記録しながら、取り上げを行った。

第3・4トレンチ東側は、用水路際は石垣となっており、撹乱が深く、包含層の残りが悪く、石垣が崩壊する危険性を考慮し、慎重に掘削を進めた。掘削可能な範囲については、縄文土器を包含する黒褐色砂質土を掘り下げ、土器を含まない粗砂混じりの大礫（拳大以上人頭大以下）～巨礫層（河川堆積層）まで調査を行った。縄文土器を含んだ黒褐色層（８層）は、第４トレンチと第３トレンチに跨る大きな撹乱と、７層の黄褐色砂質土混じりの中～大亜円礫層などにより、削り取られていたが、縄文時代中期末と後期初頭の土器が集中して出土した。第３トレンチ南壁の断面図で明確なように、縄文土器の包含層は東に向かって大きく傾いており、集落中心というよりも、集落の縁辺にあたり、いわゆる土器捨て場などの遺構である可能性が高い。縄文土器包含層下の10層は、土石流のような激しい洪水で形成された可能性が高いが、この８層の包含層は小亜円礫を含むがラミナも見られず、河川の影響をほとんど受けていない環境にあったものと考えられる。

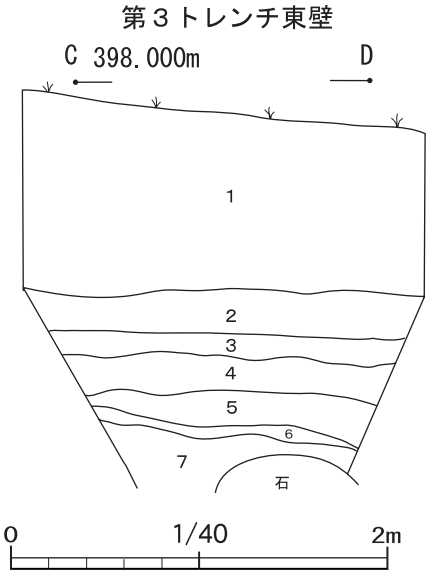


焼土跡北壁
1．にぶい赤褐(2.5YR4/4)土層　※熱により強く硬化している。
2．暗赤褐(2.5YR3/1)土層　※熱により硬化している。

0　1/10　50cm

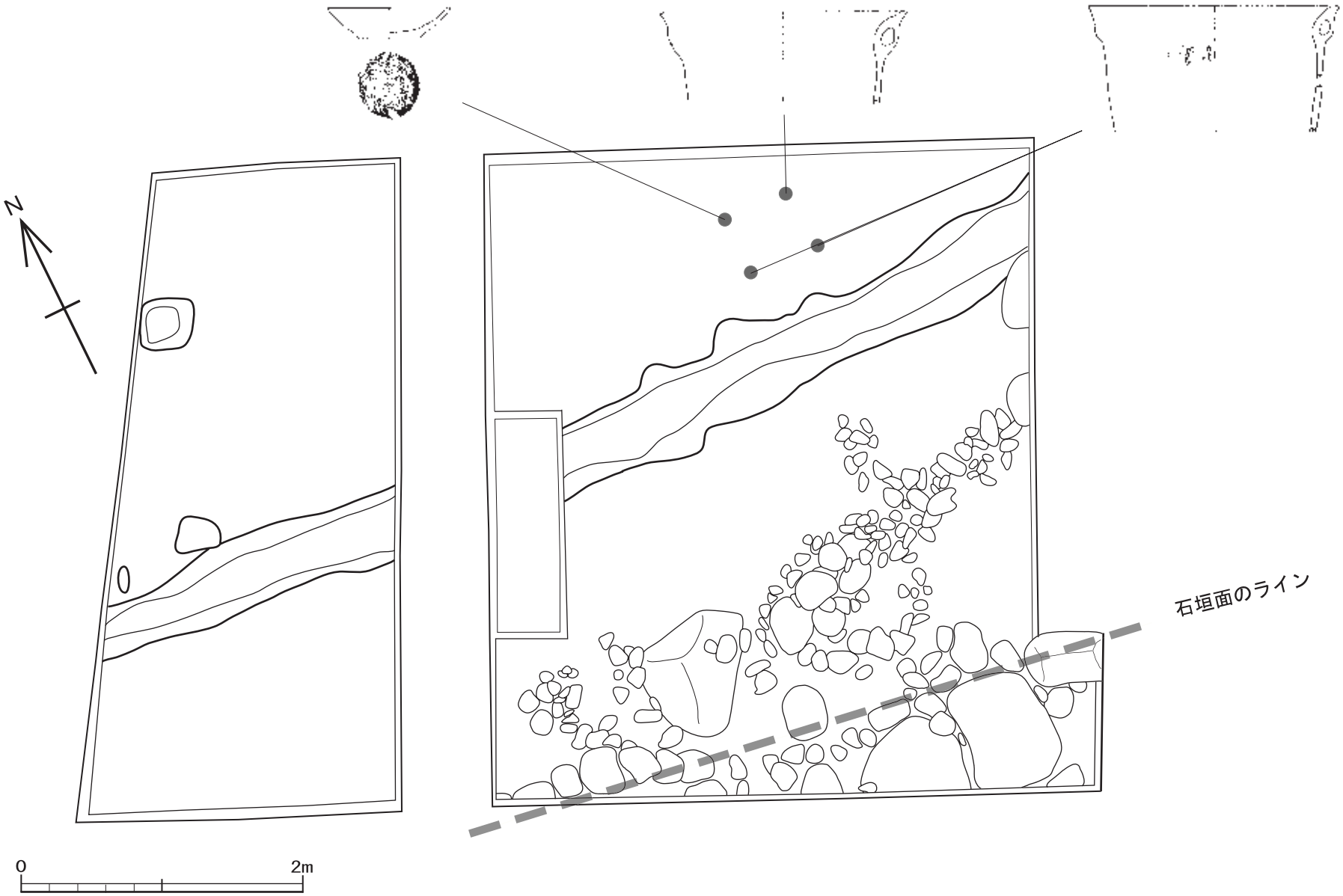


第２トレンチ北壁
1．褐灰(10YR4/1)砂質シルト層　灰白(10Y7/2)中～粗砂を含む。
2．黒(10Y2/1)砂質シルト層　灰白(10Y7/1)細～中砂を含む。
3．黒褐(10YR3/1)シルト・灰白(2.5Y7/1)中粒砂・黄灰(2.5Y6/1)シルトの互層
4．黒(10YR2/1)粘土層
5．灰白(2.5Y7/1)細砂と黒褐黒褐(10YR3/1)シルトの互層



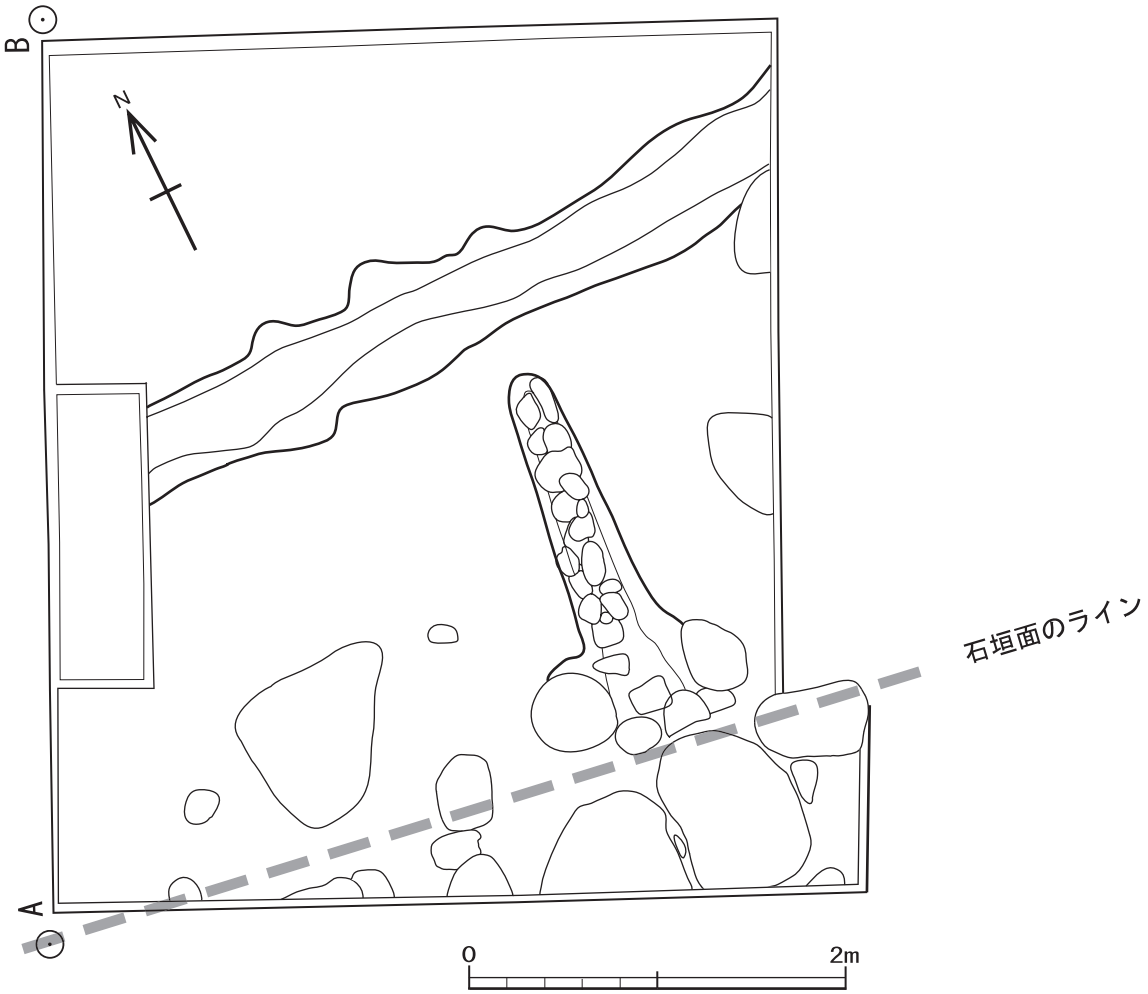
第３トレンチ東壁
1．大～中円礫混じり褐色砂質土層
　※明治40年代の洪水のときに周辺に堆積した砂を低い畑（調査対象範囲）に入れたと言われている。
2．にぶい黄褐(10YR4/3)砂質土層
　※堆積構造が観察できない。耕作などにより人的に擾乱されているためと思われる。
3．褐灰(10YR6/1)シルト・浅黄(2.5Y7/3)中粒砂・褐(10YR4/4)砂質土層
　※洪水堆積層であったが、耕作により、擾乱されたものと思われるが、一部シルトや中粒砂が部分的に残っている。
4．黒(10YR2/1)砂質土層　灰白(2.5Y8/2)細砂を含む。
5．灰白(2.5Y8/2)粗～中粒砂層　下部は褐灰(10YR5/1)と灰黄シルトの互層となっている。
　※ラミナ（葉理）構造が顕著【河川堆積層】
6．黒(10YR2/1)砂質土層　灰白シルトを含む。
7．褐灰(10YR5/1)細砂と灰白シルト～細砂の混入層
　※ラミナ構造あり【河川堆積層】

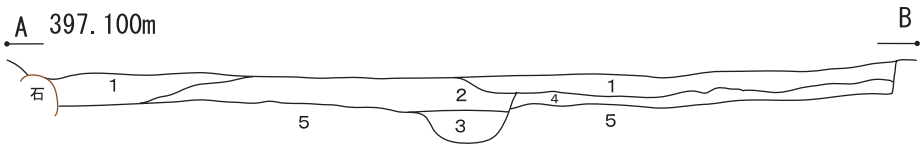
第７図　西畑B遺跡南区平面図･土層断面図



第 8 図　西畑B遺跡北区礫集中第1面（1/40）

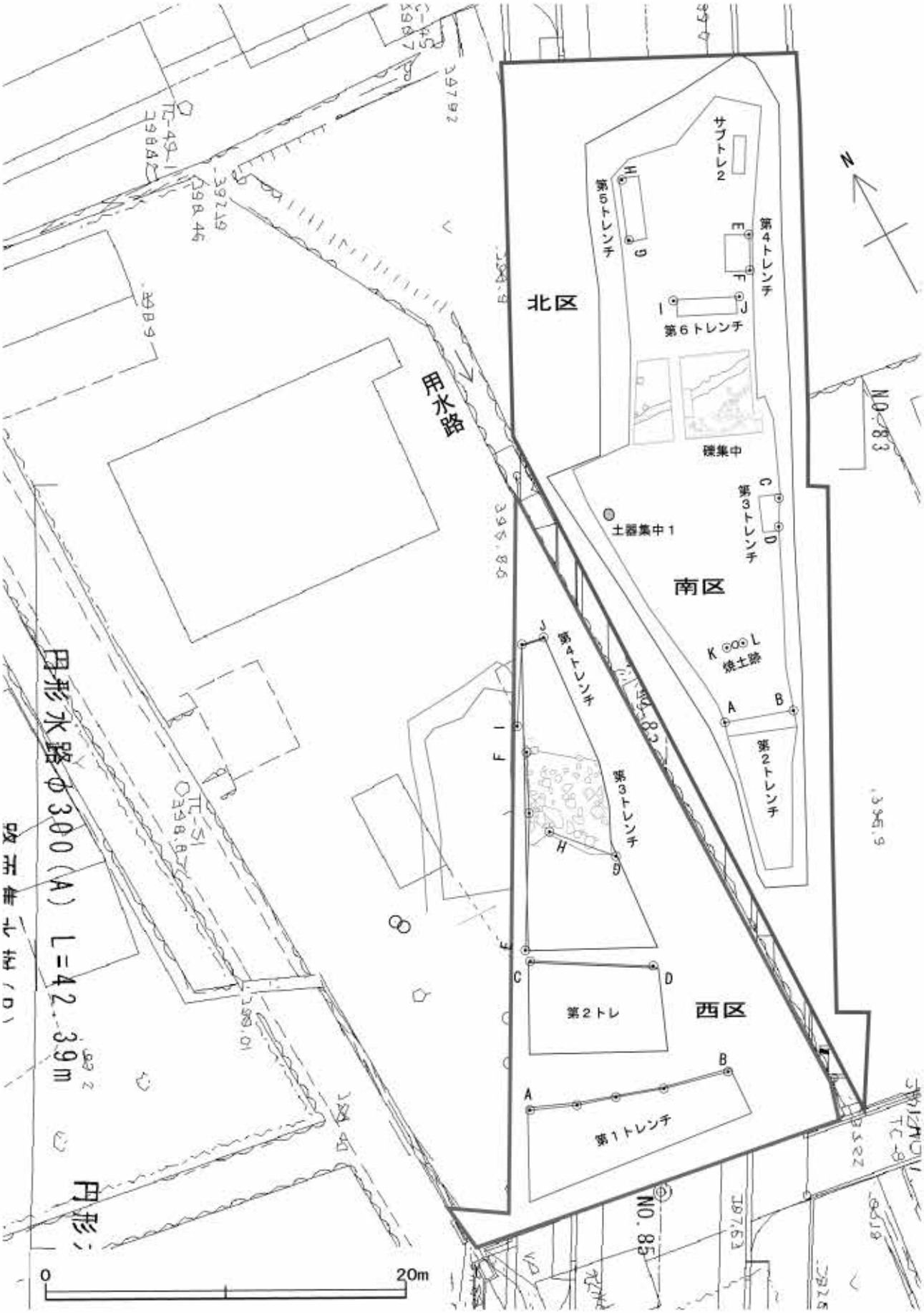
第 9 図　西畑B遺跡北区礫集中第2面（1/40）



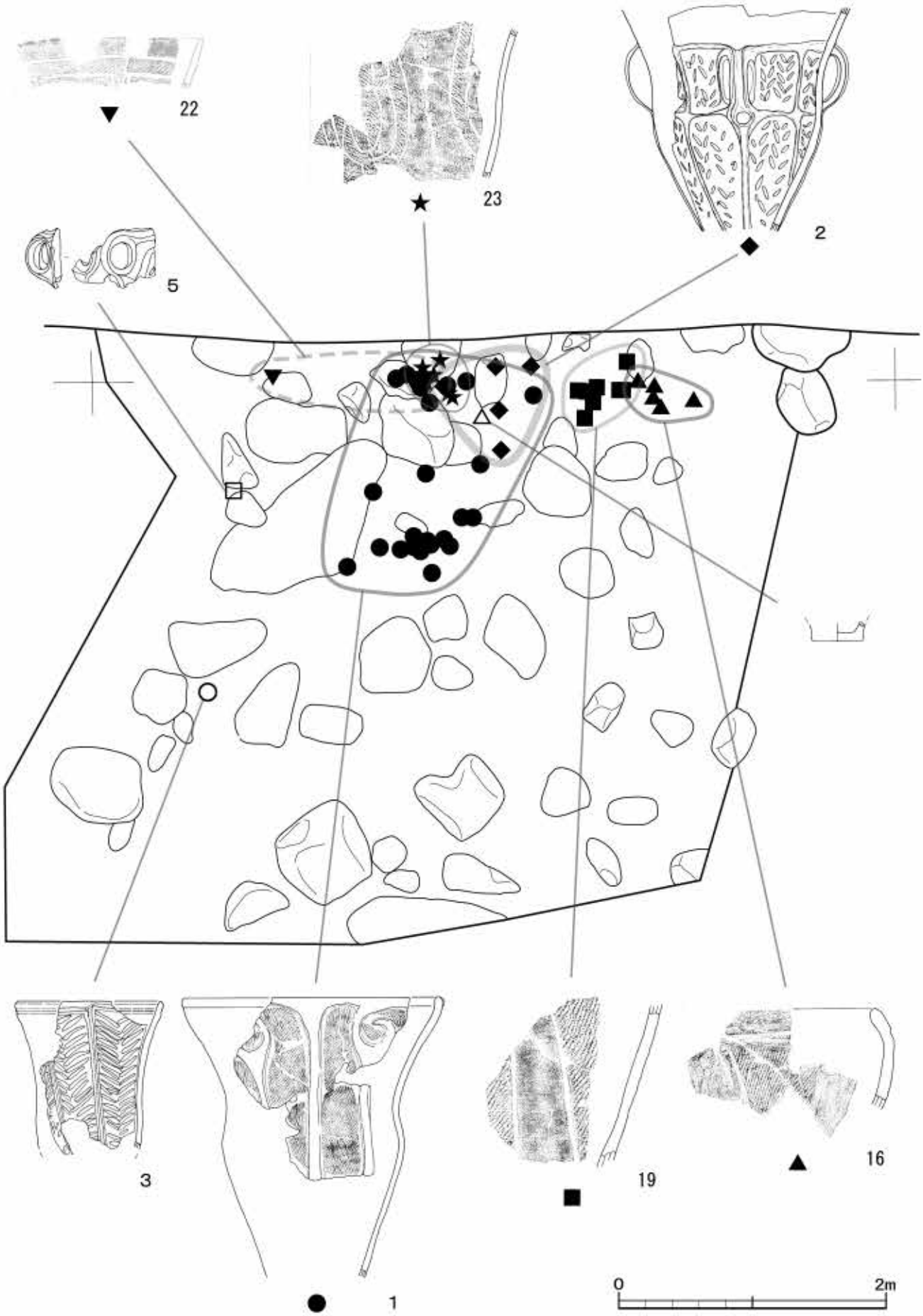


1．暗褐(10YR3/3)砂質土層
　※遺物取り上げのときに「茶褐色土」としたもの
2．灰白(2.5Y8/1)細砂・明黄褐(10YR6/8)細砂～中粒砂混じり暗褐色砂質土層
　※灰白(2.5Y8/1)細砂・明黄褐(10YR6/8)細砂～中粒砂の中にはラミナが一部認められる。
3．にぶい黄(2.5Y6/3)細～中粒砂と褐灰(10YR4/1)シルトないし粘質土層
4．黒褐(10YR3/1)砂質土混じり暗褐色砂質土層
5．黒(10YR1.7/1)粘質土・暗褐色砂質土混入黒褐(10YR3/1)砂質土層

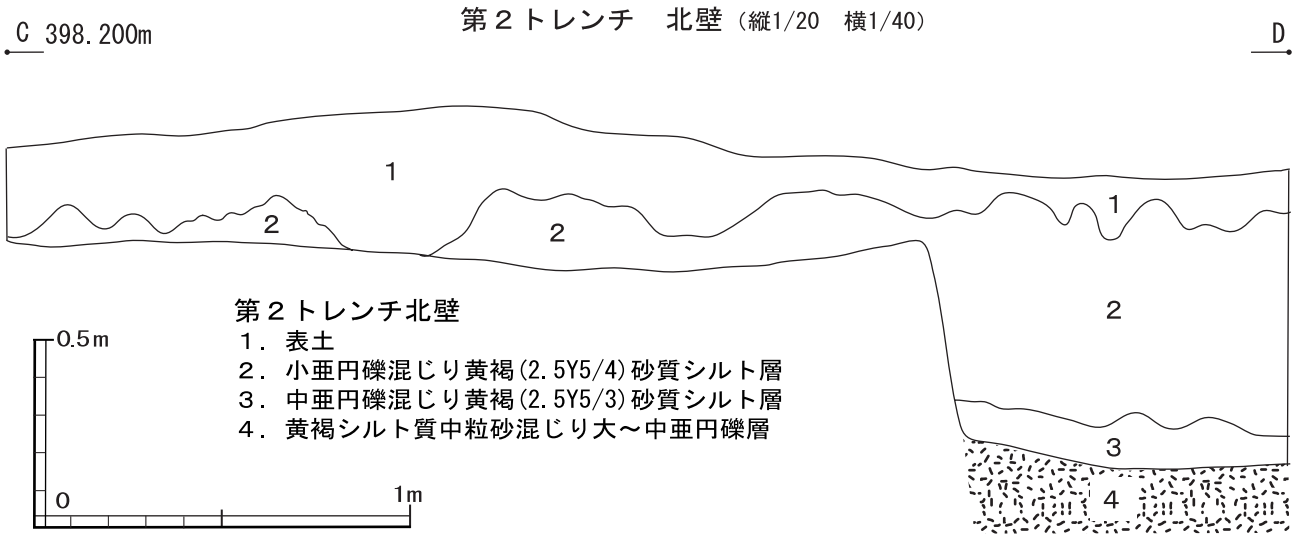
第10図　西畑B遺跡北区礫集中第3面(1/40)



第11図　西畑B遺跡西区調査範囲図(1/300)

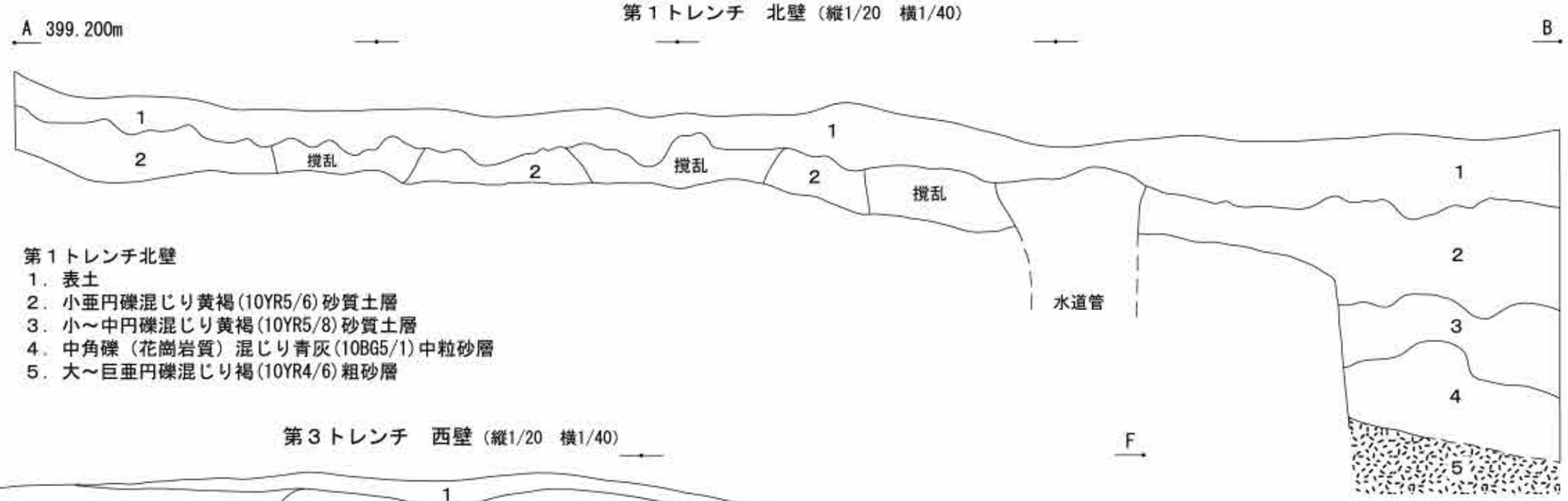


第12図　西畑B遺跡土器集中平面図(1/40)



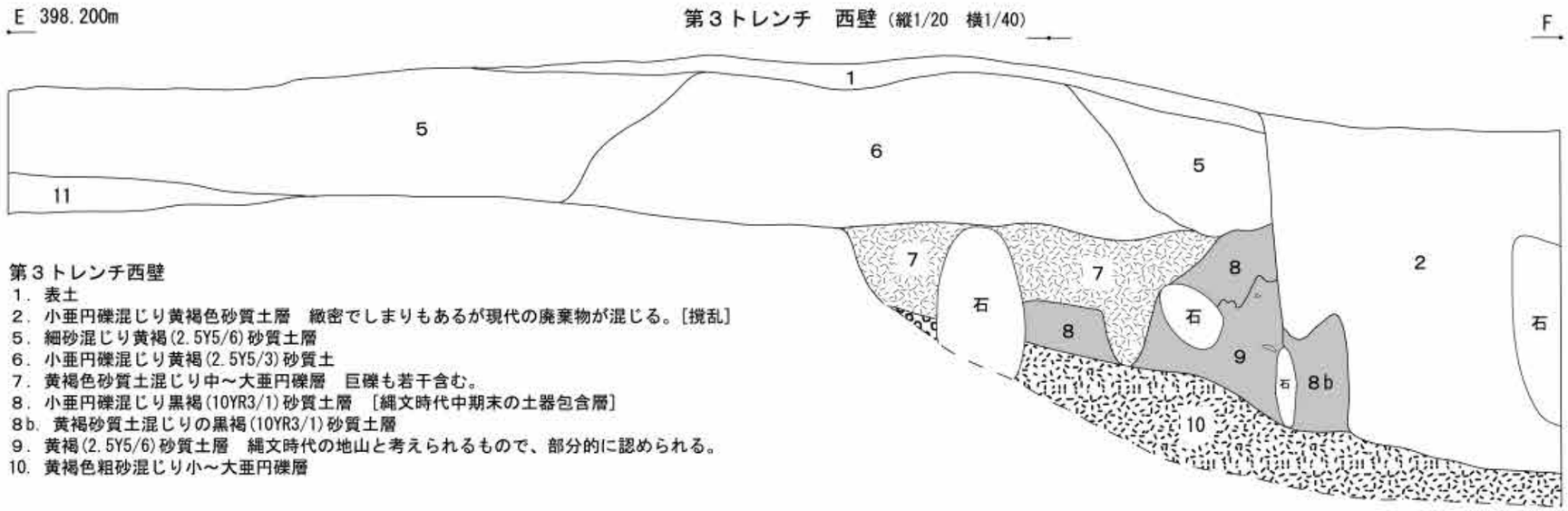
第13図　西畑B遺跡西区土層断面図（１）

第１トレンチ　北壁（縦1/20　横1/40）



第１トレンチ北壁
1．表土
2．小亜円礫混じり黄褐(10YR5/6)砂質土層
3．小～中円礫混じり黄褐(10YR5/8)砂質土層
4．中角礫（花崗岩質）混じり青灰(10BG5/1)中粒砂層
5．大～巨亜円礫混じり褐(10YR4/6)粗砂層

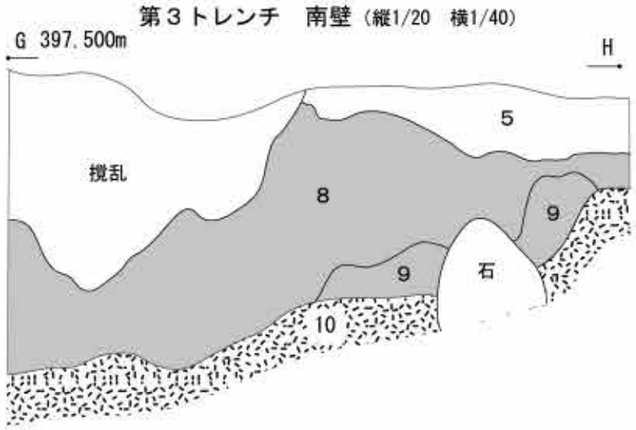
第３トレンチ　西壁（縦1/20　横1/40）



第３トレンチ西壁
1．表土
2．小亜円礫混じり黄褐色砂質土層　緻密でしまりもあるが現代の廃棄物が混じる。[撹乱]
5．細砂混じり黄褐(2.5Y5/6)砂質土層
6．小亜円礫混じり黄褐(2.5Y5/3)砂質土
7．黄褐色砂質土混じり中～大亜円礫層　巨礫も若干含む。
8．小亜円礫混じり黒褐(10YR3/1)砂質土層　[縄文時代中期末の土器包含層]
8b．黄褐砂質土混じりの黒褐(10YR3/1)砂質土層
9．黄褐(2.5Y5/6)砂質土層　縄文時代の地山と考えられるもので、部分的に認められる。
10．黄褐色粗砂混じり小～大亜円礫層

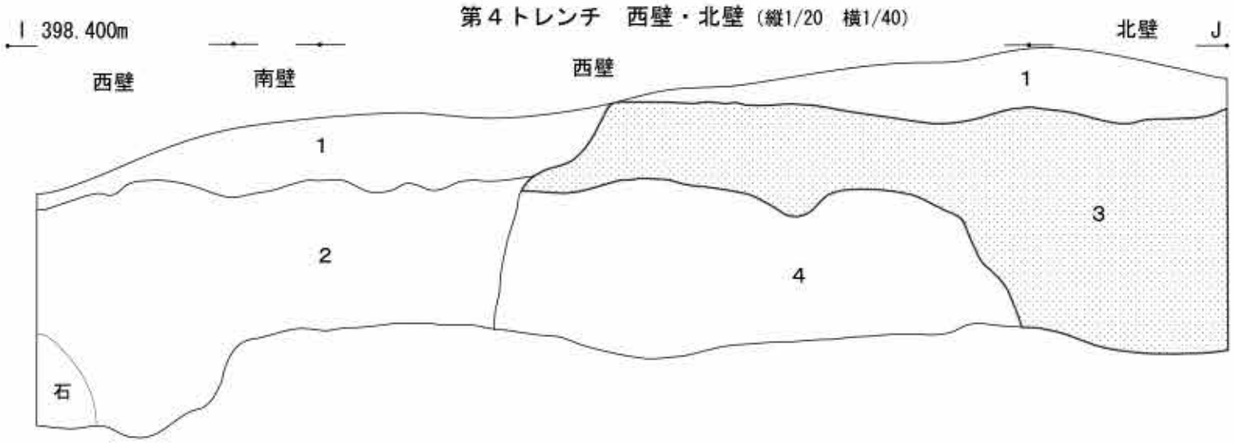
第４トレンチ北壁・西壁
1．表土 腐植土
2．小亜円礫混じり黄褐色砂質土層　緻密でしまりもあるが現代の廃棄物が混じる。[撹乱]
3．黄灰シルト混じり黄褐(2.5Y5/3)細砂層　ラミナ（葉理）が顕著に認められる。[洪水堆積層]
明治40年水害のものと考えられる。
4．亜小円礫混じり黄褐(2.5Y5/4)砂質シルト層

第３トレンチ　南壁（縦1/20　横1/40）



第３トレンチ南壁
5．細砂混じり黄褐(2.5Y5/6)砂質土層
8．小亜円礫混じり黒褐(10YR3/1)砂質土層　[縄文時代中期末の土器包含層]
9．黄褐(2.5Y5/6)砂質土層　縄文時代の地山と考えられるもので、部分的に認められる。

第４トレンチ　西壁・北壁（縦1/20　横1/40）



第14図　西畑B遺跡西区土層断面図（２）

第２表　西畑B遺跡出土遺物観察表（１）

図版	遺物番号	注記	地区	種別	器種･部位	時代・時期	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率%	技法・形態の特徴	色調	焼成	備考
第15図	1	西ハタB西P1-5・74・94・101・102・107・108・115・131・134・4・33・56・98・17・20･43･50･53･54･116･128・153・160・181、西ハタB西P1	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ｖ）	(38.6)		—	50		にぶい橙 7.5YR6/4	良好	同一個体
第16図	2	西ハタB西P1-23・42・59・60・73、西ハタB西P1	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ｖ）	—	(33.4)	—	40		にぶい赤褐 5YR4/4	良好	
第16図	3	西ハタB西P1-190、西ハタB西3Ｔ	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ｖ）	(21.4)	(22.0)	—	30		にぶい橙 7.5YR5/3	良好	
第16図	4	西ハタB西3Ｔ	西区	縄文土器	把手	中期（曽利）	—	(7.0)	—	破片		褐7.5YR4/4	良好	
第16図	5	西ハタB西P1-1	西区	縄文土器	把手	中期（曽利）	—	(8.5)	—	破片		にぶい黄褐 10YR5/3	良好	
第16図	6	西ハタB西3Ｔ	西区	縄文土器	深鉢	前期（諸磯ｂ）	—	(4.0)	—	破片		明褐 7.5YR5/6	良好	
第16図	7	西ハタB西3Ｔ	西区	縄文土器	深鉢	前期（諸磯）	—	(5.1)	—	破片		褐10YR4/6	良好	
第16図	8	西ハタB西P1-40	西区	縄文土器	深鉢	—	—	(5.1)	—	破片		明褐 7.5YR5/6	良好	
第16図	9	西ハタB西P1-188	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利）	—	(4.4)	—	破片		明褐 7.5YR5/6	良好	
第16図	10	西ハタB西P1-185	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利）	—	(6.7)	—	破片		明赤褐 5YR5/6	良好	
第16図	11	西ハタB西P1-41	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ｖ）	—	(5.3)	—	破片		にぶい褐 7.5YR5/3	良好	

第２表　西畑B遺跡出土遺物観察表（２）

第16図	12	西ハタB西P1-193	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ⅴ）	—	(5.8)	—	破片		にぶい黄褐 10YR5/4	良好	
第16図	13	西ハタB西P1-77	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利）	—	(3.4)	—	破片		明褐 7.5YR5/6	良好	
第16図	14	西ハタB西3Ｔ	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利）	—	(3.5)	—	破片		褐7.5YR4/3	良好	
第17図	15	西ハタB西P1-195	西区	縄文土器	口縁部	中期（曽利Ⅴ）	—	(12.6)	—	破片		にぶい黄褐 10YR5/4	良好	
第17図	16	西ハタB西P1-69・124・138・139・170	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ⅴ）	—	15.1	—	破片		灰黄褐 10YR5/2	良好	
第17図	17	西ハタB西P1-68・122・174	西区	縄文土器	口縁部	中期（曽利Ⅴ）	—	(8.0)	—	破片		にぶい黄褐 10YR5/4	良好	
第17図	18	西ハタB西P1-67・70	西区	縄文土器	胴部	中期（曽利Ⅴ）	—	(18.3)	—	破片		暗褐10YR3/3	良好	
第17図	19	西ハタB西P1-38・39・61・63・120・121・137・175・176	西区	縄文土器	深鉢	中期（曽利Ⅴ）	—	23.7	—	破片		暗褐色 10YR3/3	良好	
第17図	20	西ハタB西P1-62	西区	縄文土器	胴部	中期（曽利Ⅴ）	—	(7.2)	—	破片		暗褐10YR3/3	良好	
第17図	21		西区	縄文土器	胴部	中期（曽利Ⅴ）	—	(20.1)	—	破片		褐7.5YR4/4	良好	
第18図	22	西ハタB西P1-2・7・12、西ハタB西3Ｔ	西区	縄文土器	口縁部	後期（称名寺併行）	(38.8)	(7.5)	—	破片		にぶい黄褐 10YR5/3	良好	23と同一個体
第18図	23	西ハタB西P1-8・9・10・12・13・44	西区	縄文土器	胴部	後期（称名寺併行）	—	21.5	—	破片		にぶい黄橙 10YR6/4	良好	22と同一個体
第18図	24	西ハタB西P1-192・193	西区	縄文土器	口縁部	—	—	(3.3)	—	破片		にぶい赤褐 5YR4/3	良好	
第18図	25	西ハタB西P1-165・166	西区	縄文土器	胴部	—	—	(5.5)	—	破片		にぶい黄褐 10YR4/3	良好	

第２表　西畑B遺跡出土遺物観察表（３）

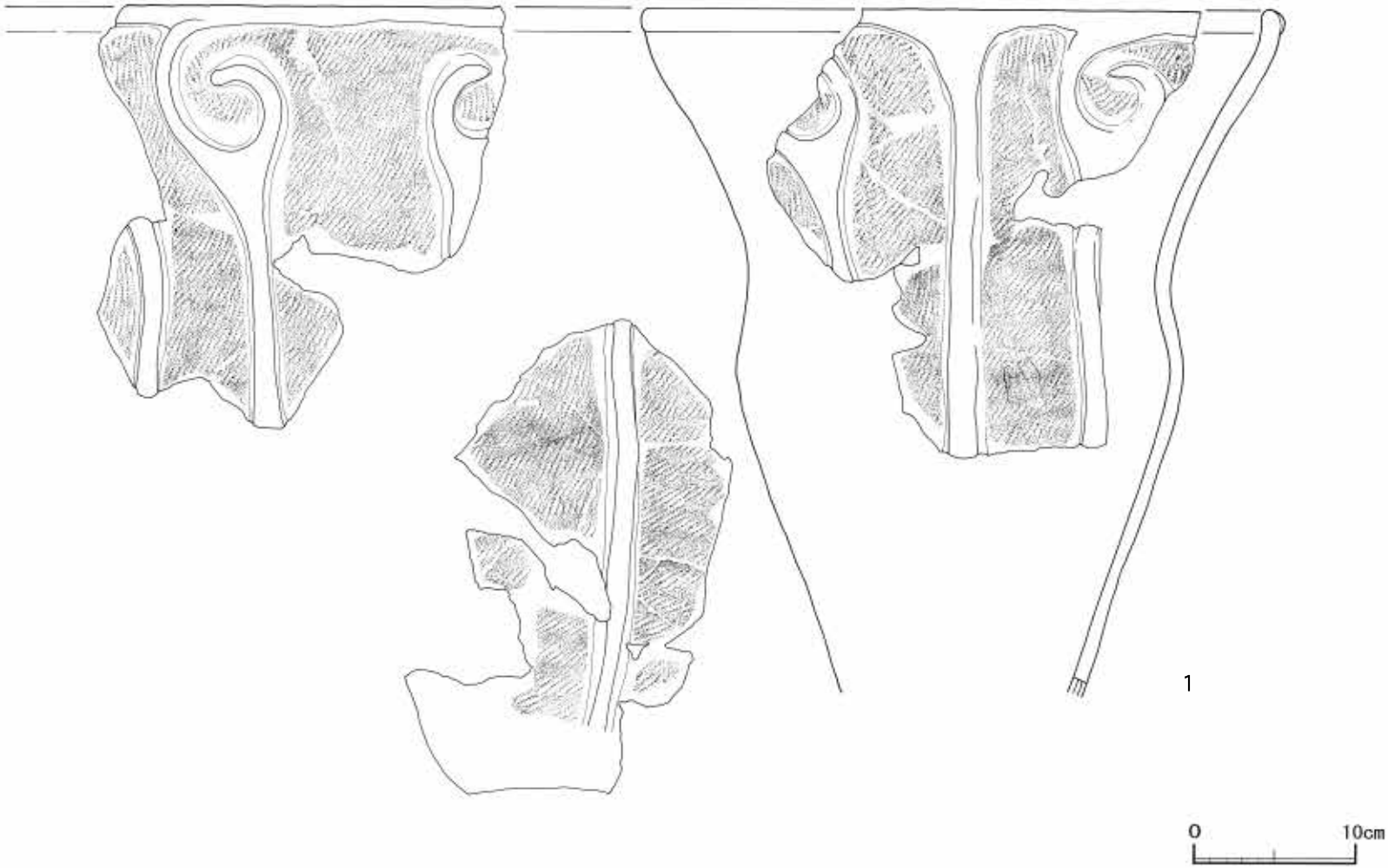
第18図	26	西ハタB西P1-96	西区	縄文土器	口縁部	—	—	(3.0)	—	破片		にぶい褐 7.5YR5/4	良好	
第18図	27	西ハタB西P1-25	西区	縄文土器	底	—	—	(2.6)	7.4	破片		明褐 7.5YR5/6	良好	
第18図	28	西ハタB 西3T	西区	内耳土器	焙烙	江戸時代	—	(5.1)	—	破片		オリーブ褐 2.5Y4/3	良好	
第18図	29	西ハタB西3T	西区	陶器	中碗	江戸～明治時代	(11.3)	(6.3)	—	30		浅黄 2.5YR7/3	良好	
第18図	30	西ハタB西1トレ	西区	土製品	泥めんこ	江戸～明治時代	2.7	2.8	0.95	50		橙5YR7/8	良好	
第18図	31	西ハタB西シクツ1トレ	西区	石器	砥石	—	6.3	2.2	1.2	60		浅黄5Y7/4 オリーブ褐 2.5Y4/3		
第18図	32	西ハタB西シクツ3トレ	西区	石器	砥石	—	12.0	2.7	2.6	100		明オリーブ 灰5GY7/1		
第18図	33	西ハタB西3T	西区	石器	スリ石	—	11.4	6.7	3.1	100		灰10Y6/1 暗褐7.5YR		
第19図	34	西ハタB灰カツ	不明	弥生土器	甕	中期	—	—	—	破片		明褐色 7.5YR5/6	良好	口唇に刻み目あり
第19図	35	西ハタB HY0	不明	土師質土器	皿	14～16世紀	—	(2.1)	6.5	破片		橙7.5YR	良好	見込に黒変あり
第19図	36	西ハタBキタH19	北半	土師質土器	皿	14～16世紀	(13.6)	3.1	6.4	70		にぶい黄橙 10YR7/4	良好	底部糸切り痕あり
第19図	37	塩山BPアカオ2トレ5	北半	土師質土器	皿	14～16世紀	(15.6)	3.4	(8.0)	40		にぶい黄橙 10YR6/4	良好	タール状の付着物あり、灯明皿として使用か
第19図	38	西ハタBキタHY0	北半	土師質土器	皿	14～16世紀	(13.2)	(2.6)	—	20		浅黄橙 7.5YR8/4	良好	
第19図	39	塩山BPアカオ2トレ	北半	土師質土器	皿	14～16世紀	—	(1.5)	(6.5)	50		黄橙 7.5YR7/8	良好	
第19図	40	塩山BPアカオ2トレ3	北半	土師質土器	皿	14～16世紀	(10.7)	(2.4)	(5.7)	40		橙7.5YR7/6	良好	
第19図	41	塩山BPアカオ2トレ1	北半	土師質土器	皿	14～16世紀	(10.1)	—	—	20		にぶい黄橙 10YR7/3	良好	

第２表　西畑B遺跡出土遺物観察表（４）

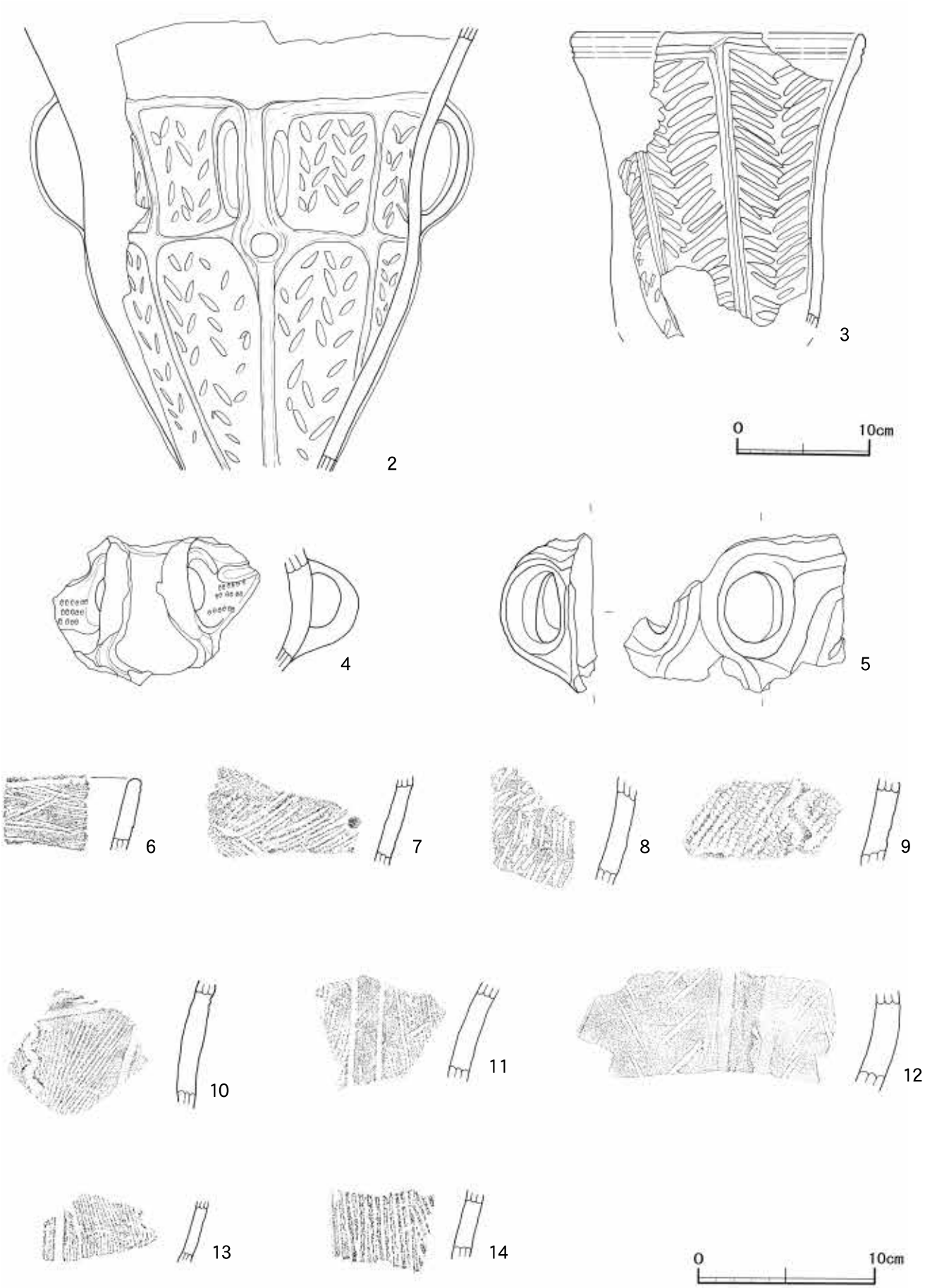
第19図	42	西ハタBキタH15	北半	土師質土器	皿	14～15世紀	7.0	1.8	3.5	100		にぶい橙7.5YR6/4	良好	
第19図	43	塩山BPアカオ2トレ2・2トレ3、西畑キタH26・H27	北半	土師質土器	内耳鍋	15世紀中頃	(25.4)	(9.0)	25.4	30		褐灰10YR6/1	良好	
第19図	44	西ハタBキタH40	北半	土師質土器	内耳鍋	15世紀中頃	(26.4)	(9.7)	—	破片		橙7.5YR6/6	良好	
第19図	45	西ハタBキタHY0	北半	土製品	円板	—	2.4	—	厚さ0.7	100		橙7.5YR6/6	良好	
第19図	46	西ハタBキタH3	北半	土製品	有孔円板	—	2.2	—	厚さ0.8	50		橙7.5YR6/6	良好	
第19図	47	塩山BPアカオ2トレ	北半	石器	打製石斧	縄文時代	—	7.8	1.85	50		灰5Y6/1	-	重量176ｇ
第20図	48	西ハタBミナミ	南半	磁器	中碗	幕末	(10.4)	5.3	4.0	80	手描き	灰白5Y8/1	良好	瀬戸産
第20図	49	西ハタBミナミ	南半	磁器	中碗	幕末	10.6	5.2	2.2	60	手描き	灰白N8/	良好	瀬戸産
第20図	50	西ハタBミナミ	南半	磁器	中皿	幕末	15.2	4.2	8.4	50	手描き	灰白N8/	良好	瀬戸産
第20図	51	西ハタBミナミ	南半	磁器	中碗	明治時代	10.8	5.2	3.6	100	型紙刷	灰白N8/	良好	瀬戸産
第20図	52	西ハタBミナミ	南半	磁器	中碗	明治時代	11.1	4.6	3.4	90	型紙刷	灰白N8/	良好	瀬戸産
第20図	53	西ハタBミナミ	南半	磁器	中碗	明治時代	11.2	5.1	4.0	30	型紙刷	灰白N8/	良好	瀬戸産
第20図	54	西ハタBミナミ	南半	磁器	香炉	近代	(5.2)	6.7	4.8	90	手描き	灰白N8/	良好	瀬戸産
第20図	55	西ハタB HY0	南半	陶器	大皿	江戸～明治時代	28.0	(5.3)	—	破片		灰黄2.5Y7/2	良好	補修ために緑青で覆われた付着物あり（鋳掛け痕か）
第20図	56	西ハタBミナミ	南半	陶器	土瓶	江戸～明治時代	7.9	9.1	8.4	50	緑色釉薬の上にイッチン描き	灰白7.5Y7/2	良好	
第20図	57	西ハタBミナミ	南半	石製品	砥石	—	4.9	2.5	7.5	50		灰白10Y7/1	良好	

第２表　西畑B遺跡出土遺物観察表（５）

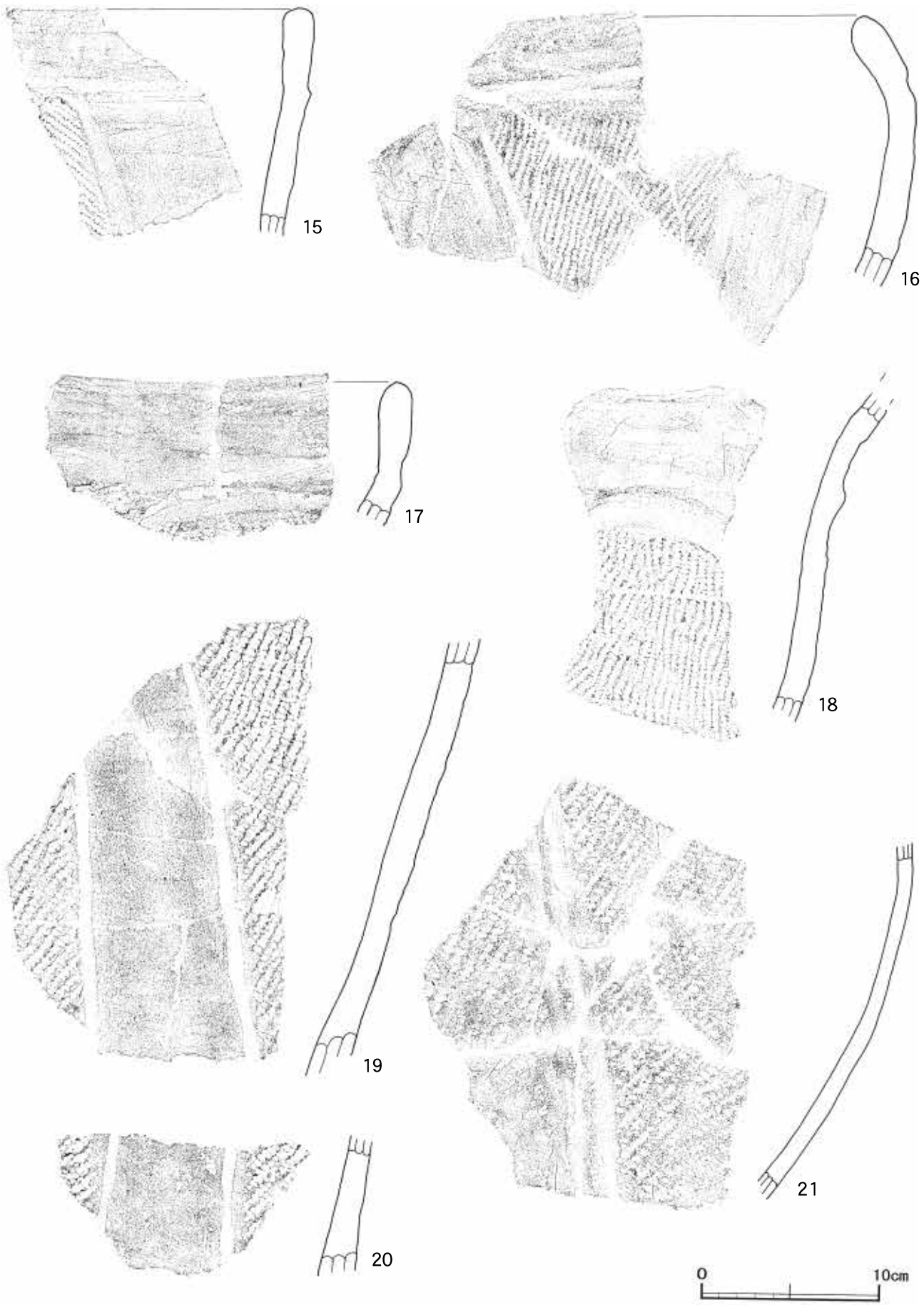
－	－	西ハタB北半茶褐色土	北半	石器	石鏃	縄文時代	(1.4)	(1.3)	0.3	40				
－	－	西ハタB南半銭1	南半	穴あき銭	銅銭	江戸時代	2.4	穴0.5	0.18	90				
－	－	西ハタBピット1-141	西区	穴あき銭	寛永通宝	江戸時代	2.4	穴0.6	0.12	90				
－	－	西ハタBピット1-141	西区	穴あき銭	銅銭・鉄銭	江戸時代	2.4	穴0.6	0.37	90				
－	－	西ハタB西HY0	西区	磁器	大皿	江戸～明治時代	30	4.5	16.6	40				
－	－	西ハタB西HY0	西区	磁器	中鉢	明治時代	12.5	(4)	(6)	40				
－	－	西ハタB西HY0	西区	磁器	中皿	明治時代	13.8	2.4	7.9	70	銅版刷			
－	－	西ハタB西HY0	西区	磁器	中皿	近代	(14)	2.7	9.8	30				底面に上絵の赤色で「[八の下にセ]橋本魚店雨啓町電話五五五」の文字あり
－	－	西ハタB西HY0	西区	陶器	甕？	―	(21)	(13.4)	12	20				
－	－	西ハタB西シクツ2トレ	西区	原石	水晶	―	1.4	3.0	1.3	破片				
－	－	西ハタB 西1トレ	西区	骨格	ウマ歯	―	3.8	5.0	2.4	破片				
－	－	西ハタB西3T	西区	石製品	石筆	近代	0.9	2.2	0.9	破片				
－	－	西ハタB 西3トレ	西区	石製品	石板	近代	(5.5)	(5.4)	0.3	破片				



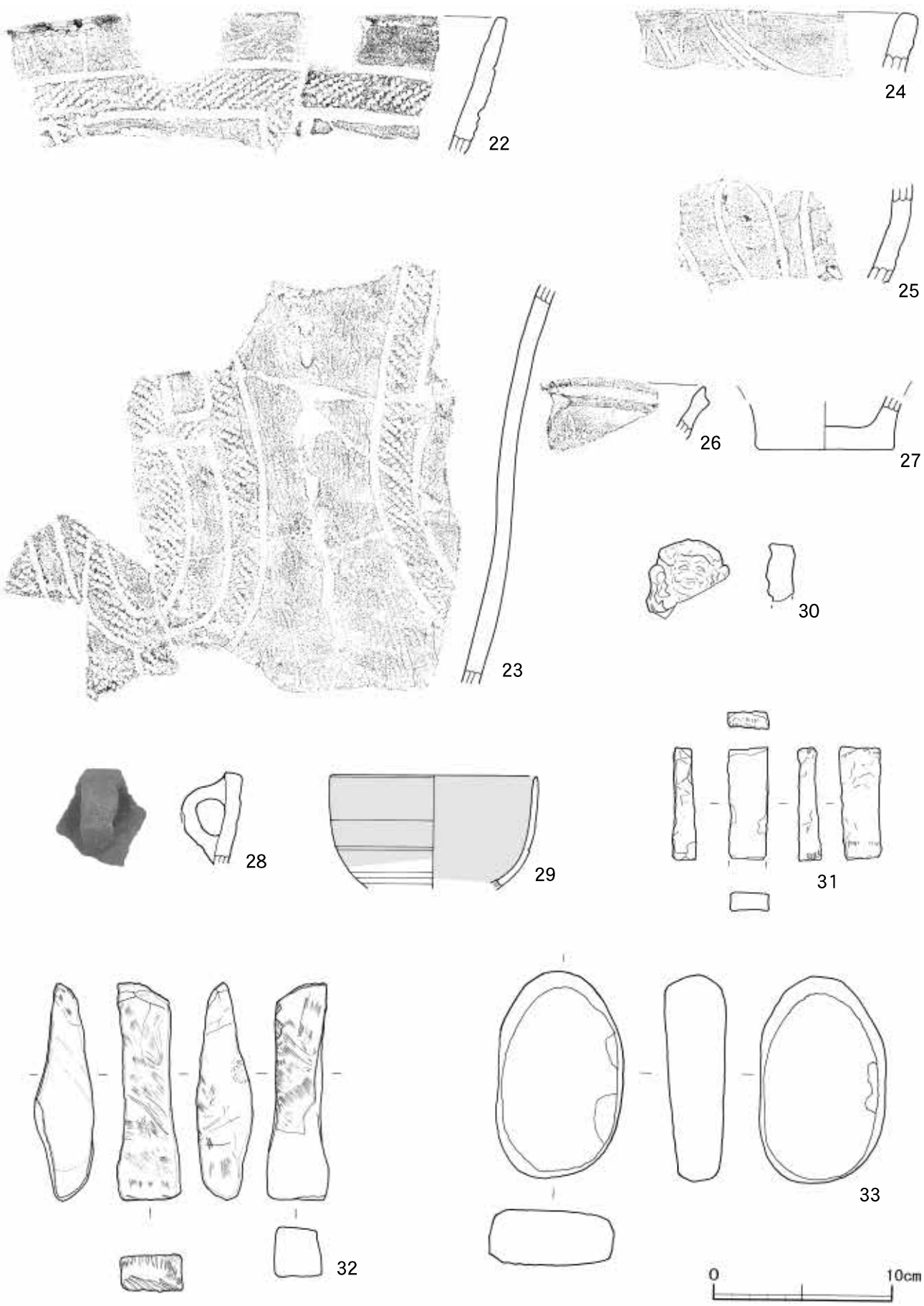
第15図　西畑B遺跡出土遺物実測図（1）



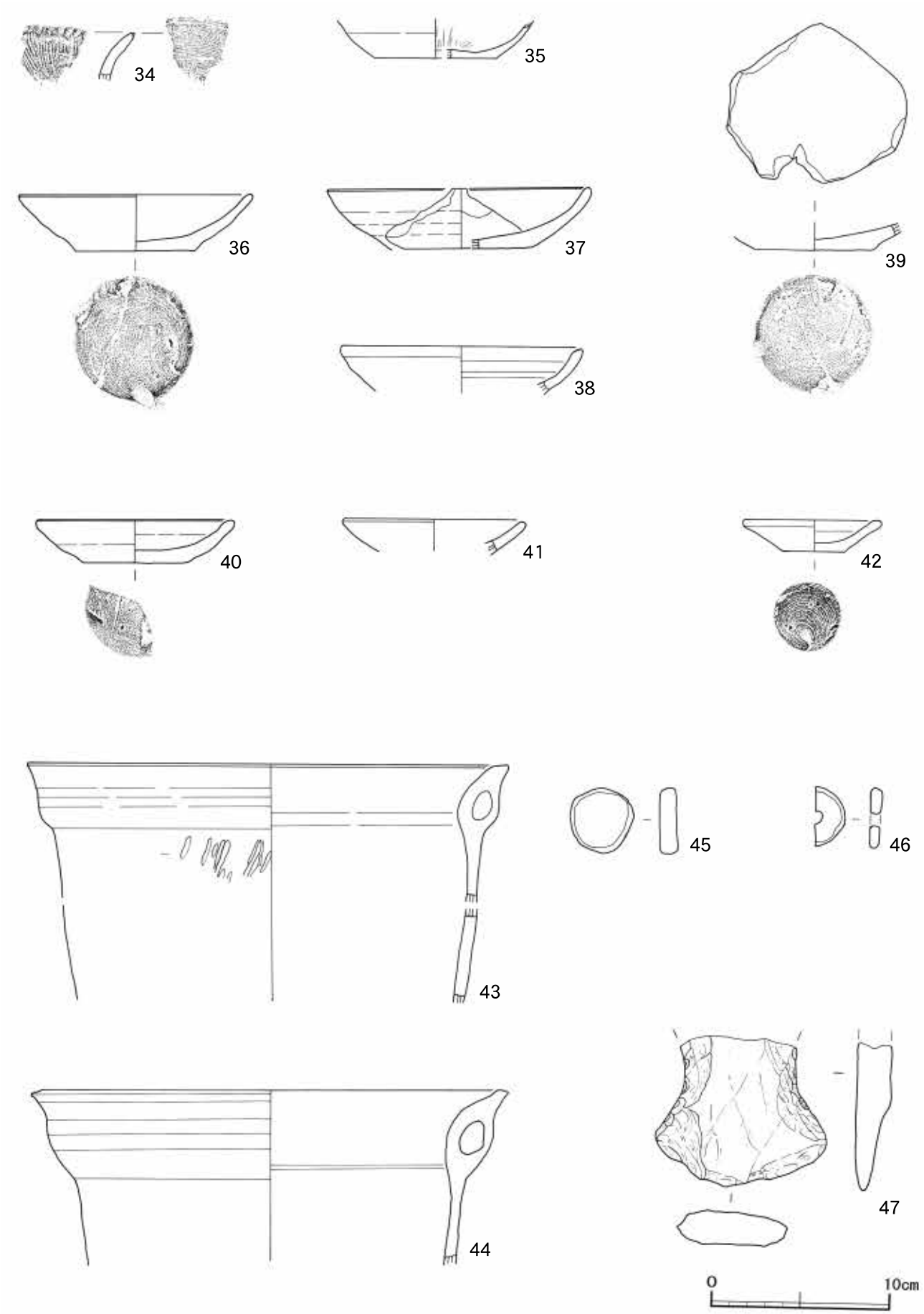
第16図　西畑B遺跡出土遺物実測図（２）



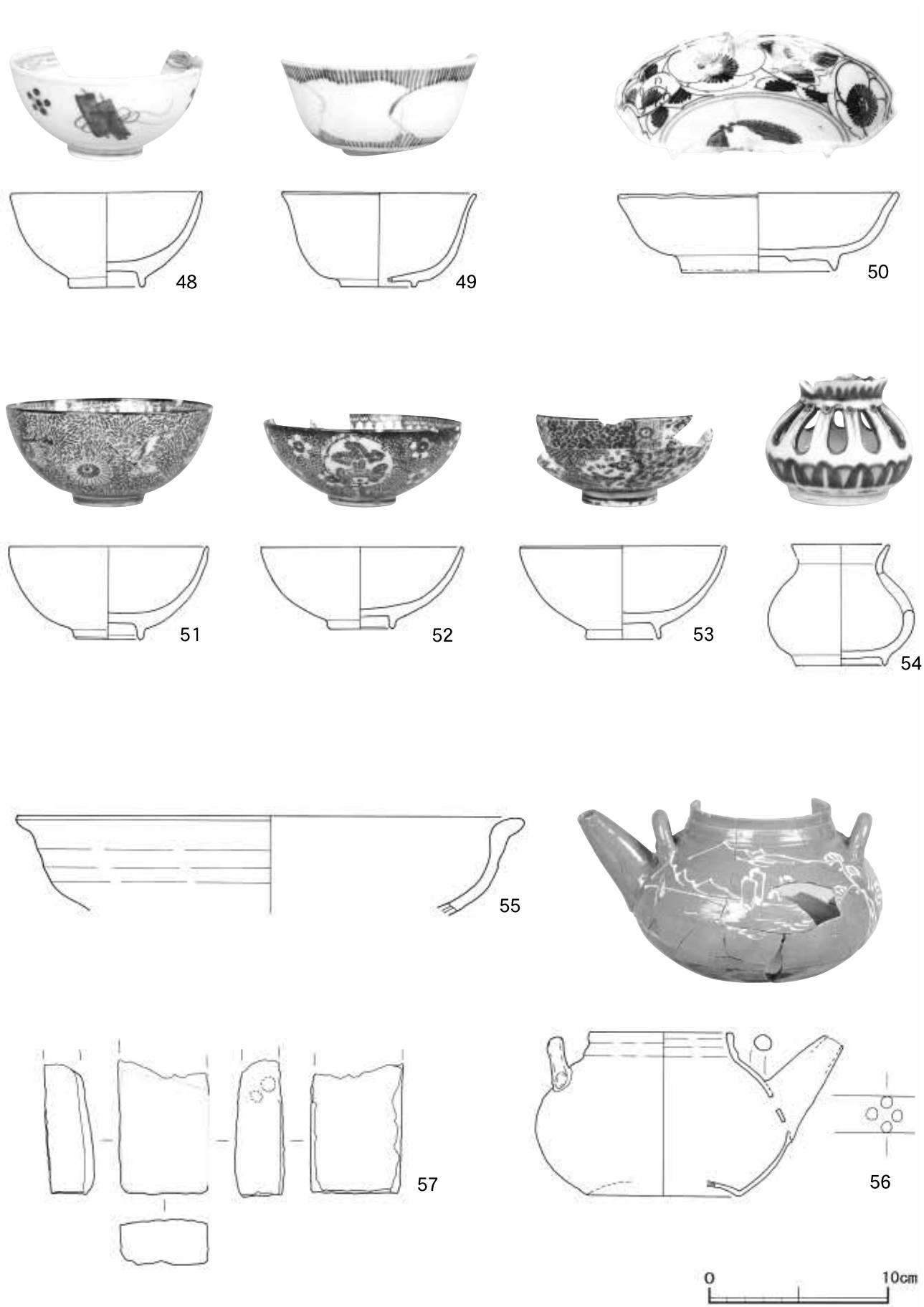
第17図　西畑B遺跡出土遺物実測図（３）



第18図　西畑B遺跡出土遺物実測図（４）



第19図　西畑B遺跡出土遺物実測図（５）



第20図　西畑B遺跡出土遺物実測図（６）

まとめ

南区

表土を取り除くと、中粒砂～シルト～粘土で構成され、ラミナ（葉理）が随所で認められた。この地区が基本的に河川の堆積作用で形成されたことがわかる。住居などを構築するには適した土地でなく、遺構は、中央部で明治40年以前の焼土跡を検出したのみである。

西側の用水路脇から、近世・近代の瓦質土器・瓦などの集中を確認した（土器集中１）。この周辺から、幕末から明治時代の陶磁器（遺物No.48～57）、穴あき銭１点（遺物番号59）などが出土した。畑などの耕作に支障のない用水路脇へ、不要になったものを廃棄したものと考えられる。

北区

南区との境界の石垣は、明治40年水害復旧のために構築したものか、もしくは積み直したものである。この石垣基礎で、礫が充填された溝を確認した。これは石垣裏に溜まる水を石垣表に排水するためのものと考えられる。この溝中から、江戸時代末の染付磁器の小片が出土した。この染付け磁器が出土した部分は、上層からの撹乱の及ばない部分であり、この遺構は江戸時代末以降のものと判断した。

またこの付近の上層部分（石垣基礎の調査の第１面段階）で16世紀後半と考えられる土師質土器（遺物No.36）と15世紀中頃と考えられる内耳鍋（遺物No.43・44）が出土した。北区からは、遺物No.36以外にもカワラケ（土師質土器）6点出土しているが、散在的な出土で、遺構を確認できなかった。

この北区の土層堆積は、南区と同様に、河川堆積物を基調として、耕作を受けたものであり、安定的な土地でなく、建物などの構造物が存在した可能性は低いと考えられる。

第２章で述べたように、文献や近隣での調査によると、西畑Ｂ遺跡に隣接する保坂家屋敷（212）が遺跡として登録され、ここに位置する保坂家には、天正２年（1574）12月23日付けの保坂次郎右衛門尉宛の武田家朱印状が伝えられ、黒川金山に関わる金山衆のひとりとされている。また遺跡から北方600ｍにある法蓮寺は黒川金山から移転されたものである。永禄４年（1561）の文書には調査地点の南に隣接する大石神社の神官と思われる「あかをの祢き」という記述が見られる。

赤尾集落の中を鍵手に曲がって通っている道は、北方へは法蓮寺門前を経て千野付近で青梅街道に接続し、南は大石神社、湧泉寺を経てから勝沼へ通じる古道となっている。この付近の赤尾集落には、現在も大きな敷地をもつ家が集中し、「赤尾の十八人名主」と呼ばれたという言い伝えが残されている。これらのことを考え合わせると、近世以前から、赤尾は、重川の東岸の重要な集落であったと考えられる。

今回の発掘調査で確認した内耳鍋や土師質土器は、14世紀から16世紀のものであり、文献や伝承にみえる赤尾の人々の活動を考古学的に裏付けるものと考えられる。

西区

西区は、南区・北区とは用水路を隔てて、西側にあたり、「保坂氏屋敷」の中心により近く、慎重に調査を行ったが、古代・中世の遺構は確認できなかった。

第3・4トレンチでは、縄文時代中期末土器を多く含む黒褐色土砂質土の包含層を発見した。第3トレンチ南壁の断面図で示したように、縄文土器の含む黒褐色土砂質土の包含層は東に向かって大きく傾いており、縄文集落の縁辺にあたる。役割を終えた土器などを送った"土器捨て場"遺構と考えられる。

縄文土器を包含する黒褐色砂質土の下は、黄褐色粗砂混じり大礫～巨礫層であり、土石流のような激しい洪水で形成されたものである。

西畑Ｂ遺跡の立地は、南にゆるやかに傾斜し、日当たり良好な土地であるが、ときには重川の激しい洪水の影響を受ける土地であったと言える。

西畑Ｂ遺跡
写真図版

調査終了後（南から）

西畑Ｂ遺跡　写真図版１

南区　全景（南から）

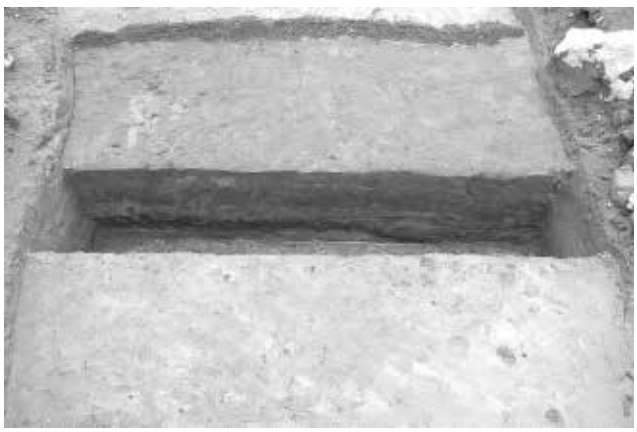
北区と南区の境界の石垣

石垣（東から）

石垣（西から）

焼土跡

ネコアンカの出土状態



第２トレンチ南壁

激しい降雨後の土砂の流入の様子

北区全景（南から）

礫集中下部

礫集中下部の溝

礫集中下部全景（南から）

礫集中下部（西から）

西畑Ｂ遺跡　写真図版３

西区北半（南から）

西区第２トレンチ北壁

西区第３トレンチ西壁

西区第３トレンチ西壁

縄文土器把手（５）出土状態

西畑B遺跡　写真図版４

西区第３トレンチ縄文土器出土状態

縄文土器（２）出土状態

西区第４トレンチ（南東から）

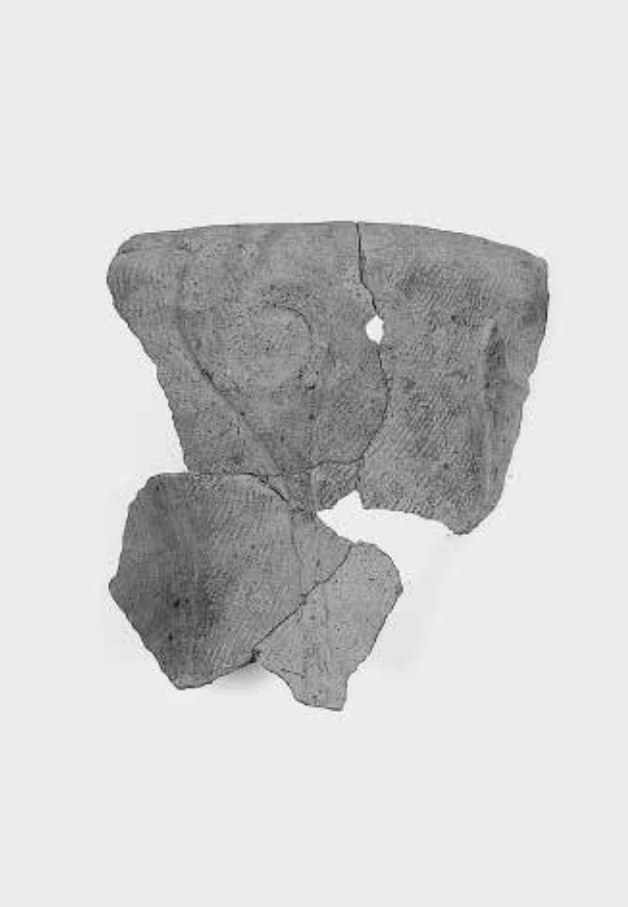
西区全景（北から）

西区第３トレンチ（北から）

西区第３トレンチ南壁（北から）

西区第３トレンチ作業風景

西区調査終了後埋め戻し

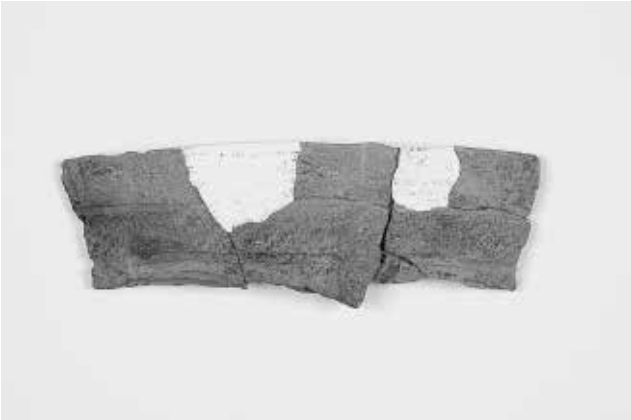


縄文土器（１）

縄文土器（１）

縄文土器（１）

縄文土器（３）



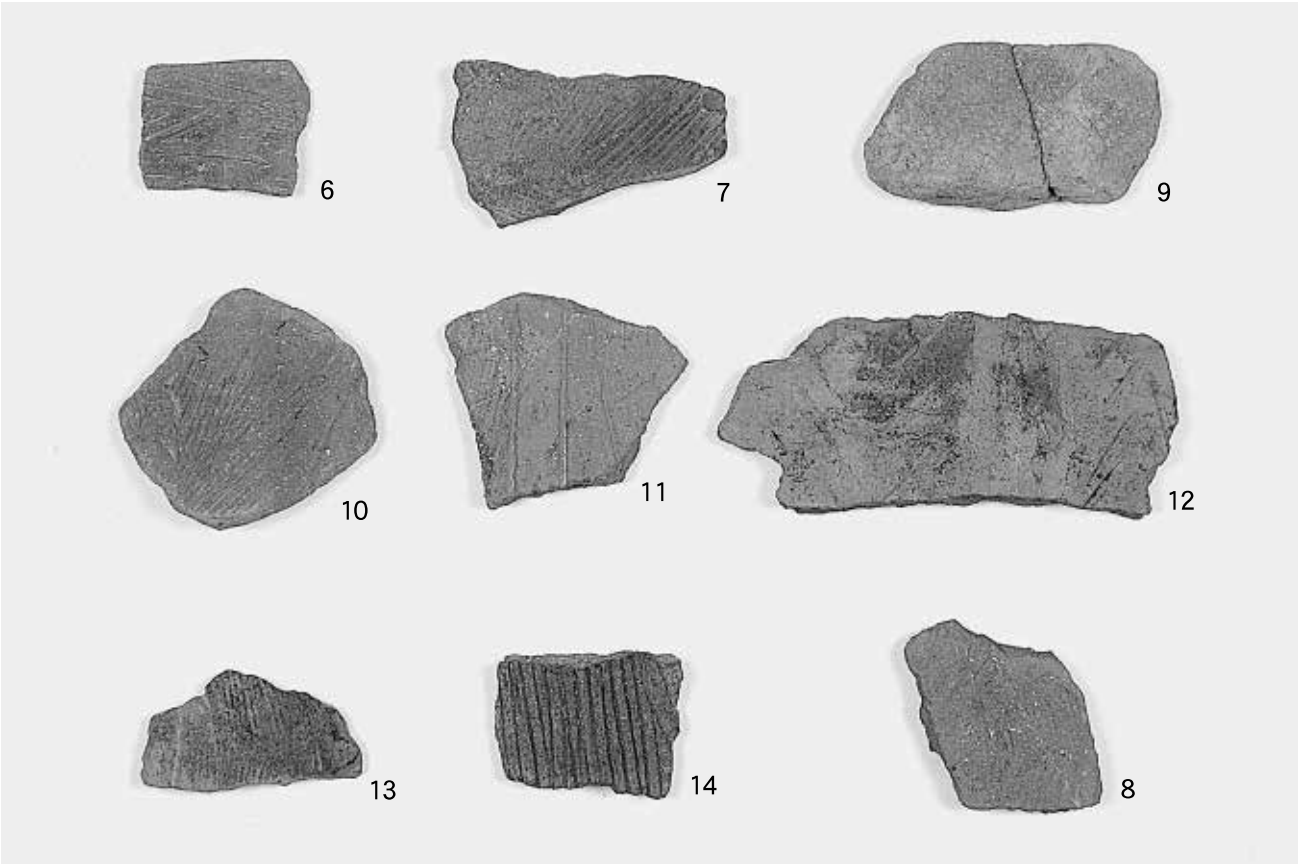
縄文土器(22)

縄文土器(23)

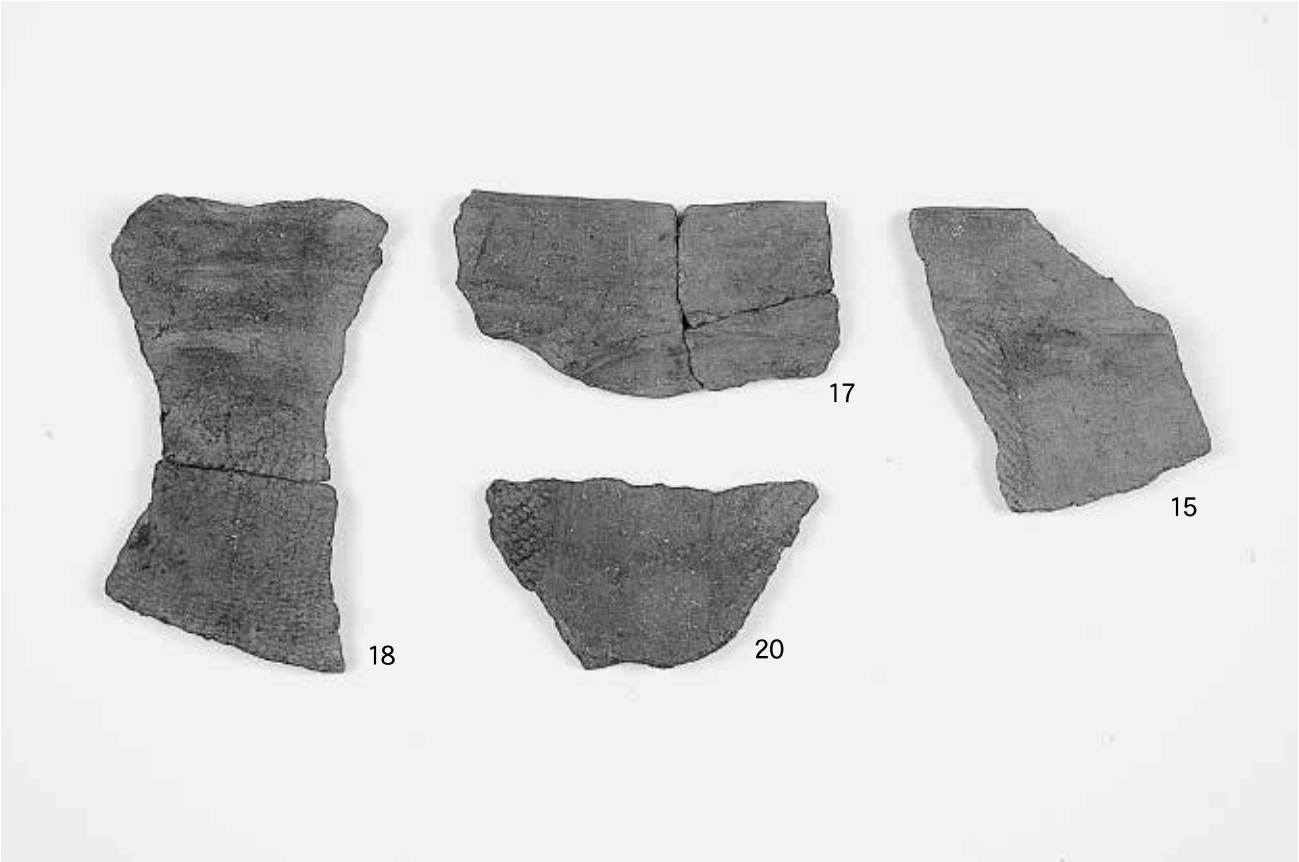
縄文土器(16)

縄文土器(19)

縄文土器(２)



縄文土器



縄文土器

西畑B遺跡　写真図版８

縄文土器(21)

縄文土器(25)

縄文土器(26)

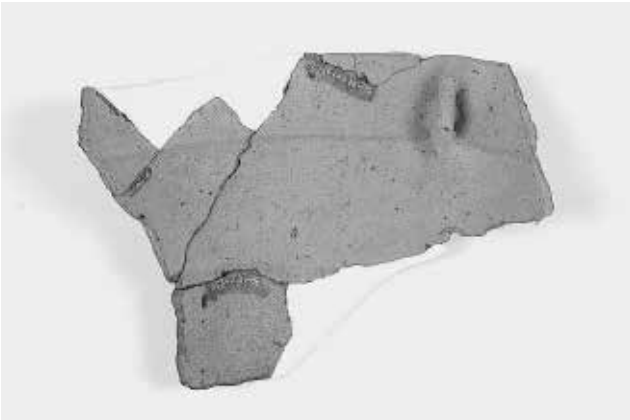
縄文土器底部(27)

縄文土器把手(４)

縄文土器把手(５)

石鏃

打製石斧(47)



内耳鍋(43)

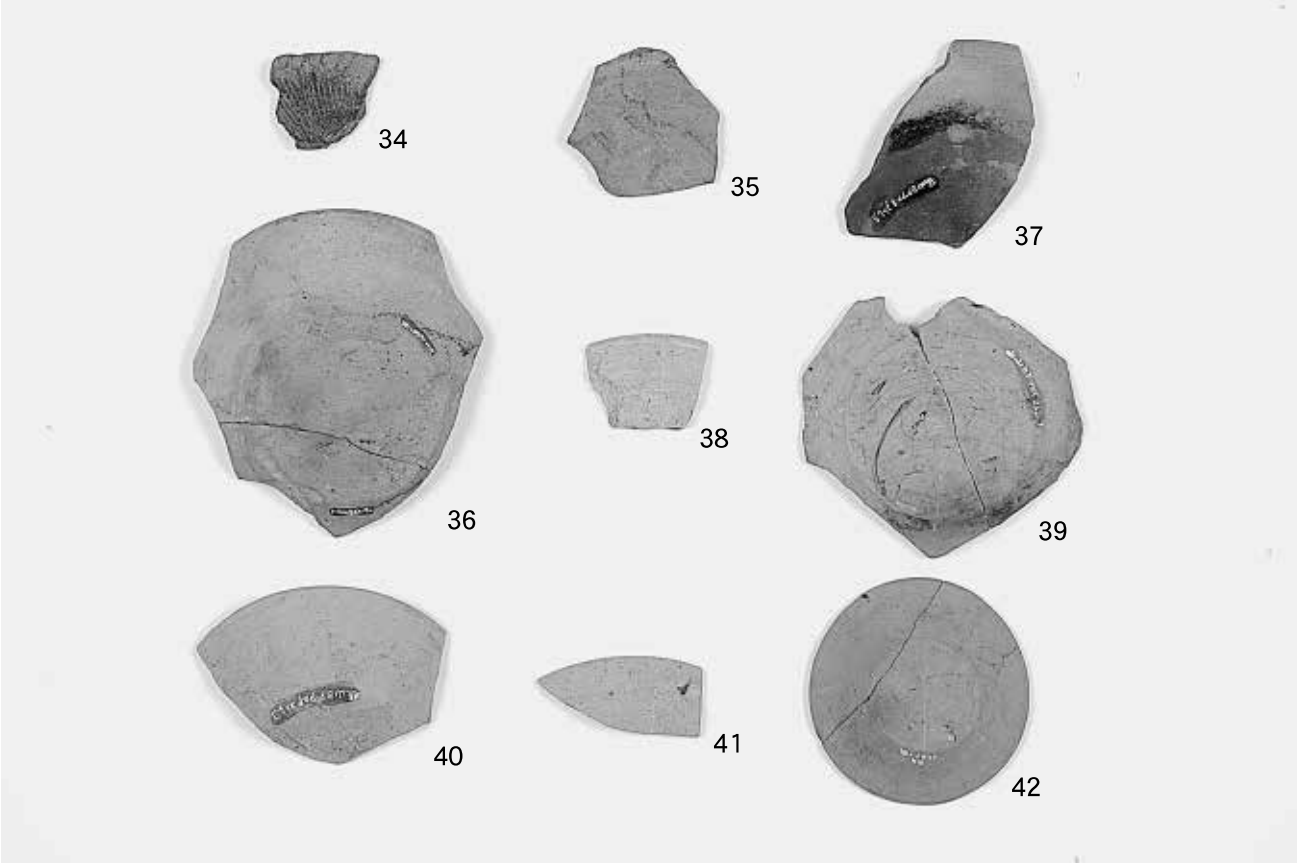
内耳鍋(43)

内耳鍋(43)

内耳鍋(43)

内耳鍋(44)

内耳鍋(44)



土師質土器

土師質土器(36)

土師質土器(36)

土師質土器(37)

土師質土器(37)

土師質土器(42)

土師質土器(40)

土師質土器(42)

泥めんこ(30)

土製円板(45)

土製有孔円板(46)

砥石(31・32)・スリ石(33)

砥石(57)

西畑B遺跡　写真図版12

磁器大皿

磁器中皿

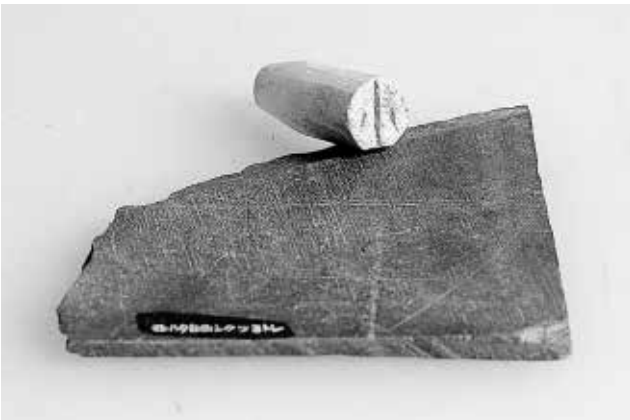
陶器中碗(29)

陶器中碗(29)

陶器甕

磁器中皿

銭・水晶・ウマ歯・石筆・石板



石板・石筆

調査着手前（北から）

北田中遺跡

調査終了後現況（北から）

第４章　調査経過

第１節 調査に至る経緯

国道411号塩山バイパス建設事業に先立ち埋蔵文化財の有無確認のために、平成17年（2005）９月８日および10月20・21日に、山梨県埋蔵文化財センターが試掘調査をおこなった。試掘調査では、第１～３号試掘溝を設定して、遺跡の有無の確認を行った。第２・３号では遺構・遺物とも確認できなかったが、第１号試掘溝から古墳時代の土器が多く出土し、また住居跡と思われる遺構を確認し、新たな遺跡の発見となった。

これにもとづき事業主である山梨県土木部峡東建設事務所と山梨県教育委員会学術文化財課と山梨県埋蔵文化財センターの3者で協議を行い、平成18年度に発掘調査を実施することとなった。

そこで山梨県埋蔵文化財センターが、平成18年８月７日から９月15日にかけて発掘調査を実施した。

また、室内における出土品や図面などの整理作業については、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。基礎的整理は平成18年12月１日から平成19年３月30日に、本格的整理作業は平成19年６月１日から平成20年３月31日の期間に行った。

これらに要する発掘調査と報告書刊行を含めた整理作業の経費は山梨県土木部が負担した。

以上の北田中遺跡の発掘調査に関わる法的手続きは次のとおりである。

平成18年８月16日　文化財保護法第99条に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第352号）

平成18年９月26日　遺失物法第13条に基づく埋蔵文化財の発見通知を山梨県教育委員会教育長を経由して塩山警察署長に提出（教埋文第434号）

第２節 発掘調査の経過

発掘調査の対象としたのは、試掘調査で遺構・遺物を確認した第１号試掘溝を中心した範囲である。国道に沿って南北に細長く、用地取得前には、モモ畑であった土地である。

発掘調査は、平成８月７日にバックホー（0.4m^3）による表土剥ぎから開始した。表土剥ぎの排土は、調査地点が手狭で、仮置きする余裕がないために、重川を渡って西広門田の国道411号塩山バイパスの未供用部分へ４トンダンプにより運搬し仮置きした。この際には、ブルーシートや土嚢を使用し、土砂が強風によって飛散したりや降雨によって流出しないように養生を行った。

表土剥ぎの後に、ジョレン掛けを行い、遺構・遺物の確認を進めた。人力で掘削した排土は、用地の制約から石垣上の北側へ仮置きする必要があり、狭い範囲ながらベルト・コンベアを設置した（８月10日）。この排土を処理するためにミニバックホーを使用した。

黒褐色シルト質土の５～10mm大のブロックを大量に含んだ黄灰砂質土を覆土とする落込みを確認し、「落込1」と命名した。この周辺から古墳時代の土師器片や須恵器片が出土した。

8月25日には、須恵器の完形品の小型坏蓋に隣接して、坏身（1/3残存）が出土する。その後、古墳時代の土師器を主として、残存状態の良好な遺物が多く出土する。

これら遺物の中で、全体の形が判明するほどに残存状態が良好なものについては写真撮影を行った。また、遺物の取り上げに際しては、平板測量により、出土位置を記録した。

遺物の取り上げを行いつつ掘り下げを進め、やがて河床の堆積物と考えられる巨礫混じりの中粒砂層に達すると、遺物が出土しなくなり、調査を終了した。

９月14・15日にバックホー（0.4m^3）と４トンダンプを使用し、西広門田に仮置きした排土を運び込み、調査範囲の埋め戻しを行った。また機材の撤収を行いすべての現場作業を終了した。

調査組織

調査主体　　山梨県教育委員会
調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　　村石眞澄、芦澤昌弘
発掘作業作業員　雨宮久美子、長田美代子、土屋常子、手塚理恵、戸田ひろ、正木なつ子

第 3 節 整理調査の経過

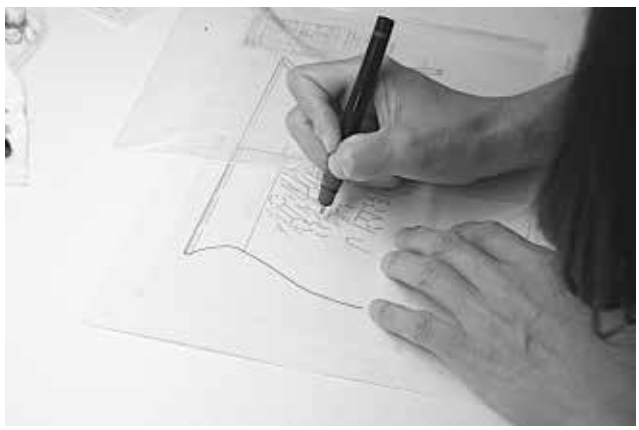
室内における出土品や図面などの整理作業については、遺物の水洗・注記と分類などの基礎的整理作業を平成 18 年 12 月 1 日から平成 19 年 3 月 30 日の期間で実施した。平成 19 年 6 月 1 日から平成 20 年 3 月 31 日の期間に、分類・観察に基づき出土品の評価を行い、実測図・トレース図を作成した。さらに発掘調査において現地で作成した遺物出土位置図などを取りまとめて調査成果を示す発掘調査報告書を刊行する本格的整理作業を実施した。

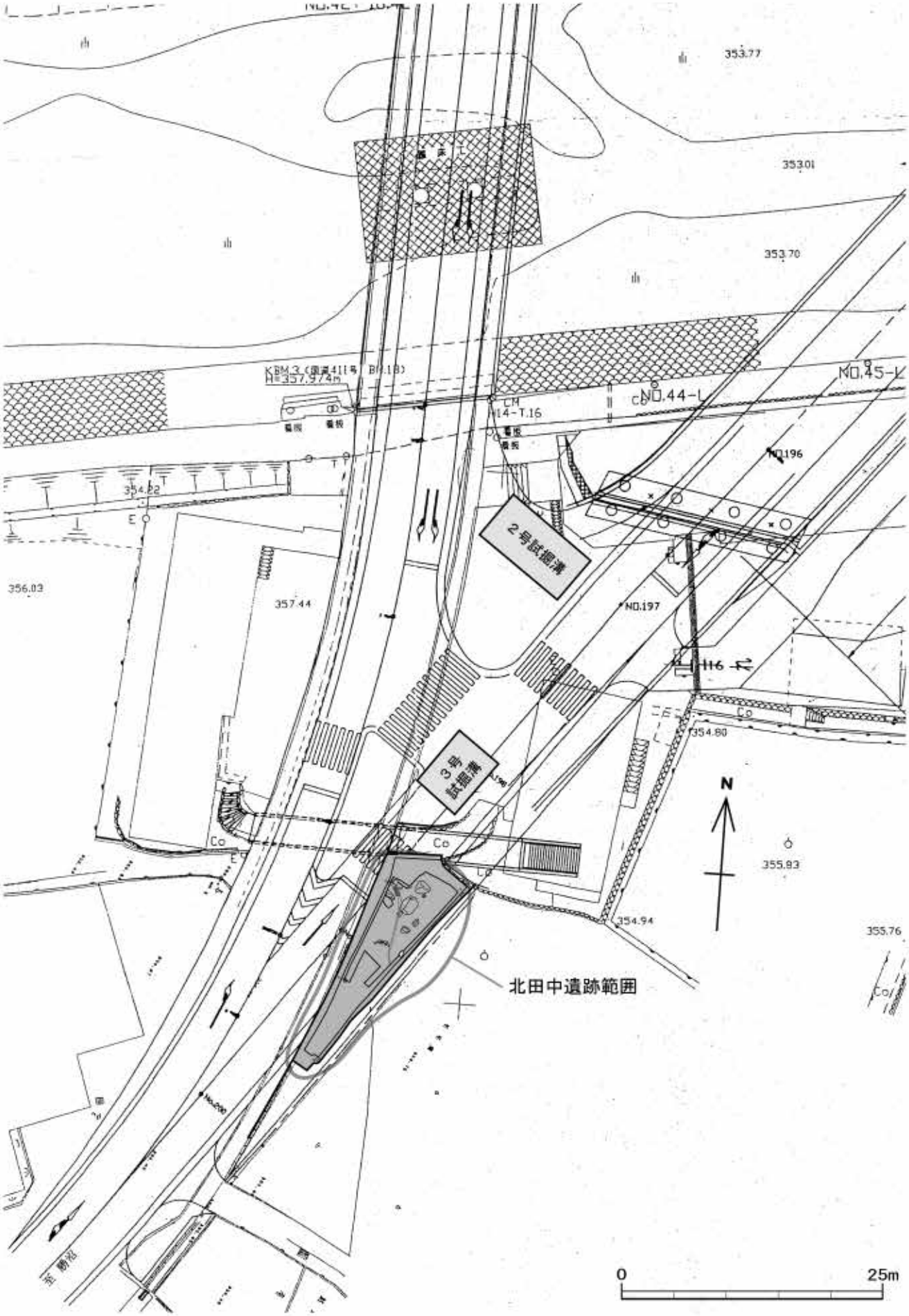
調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　平成 18 年度　村石眞澄、芦澤昌弘
　　平成 19 年度　村石眞澄、大木丈夫
整理作業員　川住たまみ、土屋常子、樋口久子、野澤まゆみ、萩原里江子、渡辺麗子（平成 18・19 年度）

関連文献

山梨県教育委員会　2006 『山梨県県内分布調査報告書』平成 17 年「塩山バイパス建設事業 [甲州市勝沼]、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 240 集、p28-29
山梨県教育委員会　2007 『年報』23　2006 年度（平成 18 年度）、「 1 - 9 北田中遺跡」、p30-31





第21図 北田中遺跡調査範囲図(1／500)

第５章　遺跡の位置と環境

第１節 地理的環境

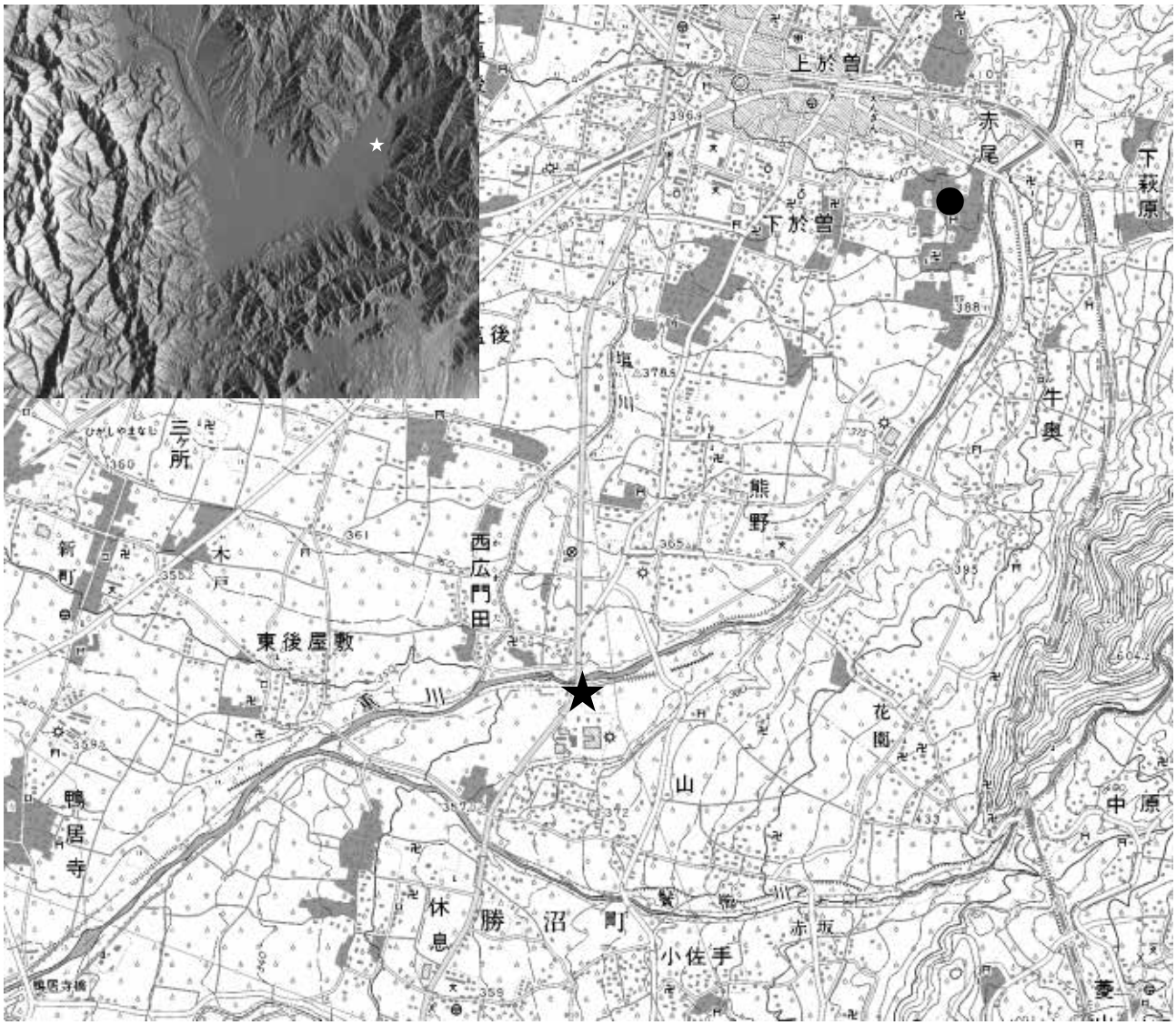
北田中遺跡は、甲府盆地の北東部、JR 塩山駅から南 2.5km の重川の南岸に位置する。重川は、甲府盆地の北東部にそびえる大菩薩嶺などを水源とし、JR 塩山駅付近から甲府盆地の東縁を南流し、やがて熊野付近で西流し、北田中遺跡に至り、笛吹川に合流している。

北田中遺跡から約 250 m南に、かつて重川が侵食した段丘崖が広がっている。北田中遺跡から南の段丘崖に至る間は、低位の氾濫原となっている。

現在は、国道 411 号沿いに大規模なワイナリーや建物があるが、旧来は水田や果樹園として利用されてきた低い土地である。

重川の北岸は、重川が形成した扇状地の末端にあたり、南向きの傾斜をもった安定した土地であり、西田遺跡など大規模な遺跡が立地している。これに対し、重川南岸は、流路が南向きから西向きに変わり、河川の攻撃面となっているために、北田中遺跡以外はいずれも段丘上に立地している。

明治 40 年の水害でも、北田中遺跡は重川の氾濫の被害を受け、その痕跡を調査区東壁の土層断面で観察することができた。つまり、本遺跡の地形環境は、重川による氾濫を蒙る可能性の高い土地である。



★：北田中遺跡　●：西畑Ｂ遺跡

第２２図　北田中遺跡位置図（1／25000）

第 2 節 歴史的環境

北田中遺跡は、旧勝沼町と旧塩山市の境の旧勝沼町側に所在する。周辺の遺跡について、時代を順に追って述べる。

北田中遺跡の周辺で発掘調査された縄文時代の遺跡では、大木戸遺跡が挙げられる。平成 10・11・14 年に調査され、縄文時代前・中期の遺構・遺物が発見されている。重川左岸では、本遺跡の東約 1.7 ㎞に牛奥遺跡があり、縄文時代中期から後期の土坑が見付かっている。発掘調査されていないが、ほかに縄文時代の遺跡として、下整田遺跡（第 23 図 E9）、住蓮木平遺跡（E5）、東田遺跡（E7）がある。

今まで述べてきたのは、旧塩山市内の遺跡である。旧勝沼町内では、大塚南遺跡（1）、若林遺跡（4）、天神遺跡（7）、塚穴遺跡（63）、中村遺跡などが縄文時代の周知の遺跡として知られている。

弥生時代の遺跡では、発掘調査されていないが、芦原田遺跡（E8）や熊野神社遺跡（E25）がある。これらは、旧塩山市内の遺跡である。

古墳時代の遺跡としては、北田中遺跡から重川を隔てて、北方に西田遺跡（E6）が所在する。昭和 52・53 年に発掘調査され、県道建設に伴う調査では、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。塩山警察署の建設に伴う調査では、古墳時代前期の住居跡が 54 軒発掘されている。

また、下西畑遺跡は、西田遺跡と同じ古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。五反田遺跡でも、古墳時代前期の住居跡 6 軒が発見されている。

奈良時代の遺跡では、前述の五反田遺跡がある。さらにこの遺跡からは平安時代の住居跡も見付かっている。

発掘調査されていないが、平安時代の遺跡として、重川右岸の中道遺跡（E22）、熊野前田遺跡（E23）、熊野八反田遺跡（E24）、西堀遺跡らが、重川左岸には大塚北遺跡（2）、松原遺跡（3）、工宮遺跡らが分布している。

ここまで述べてきた北田中遺跡の周辺の遺跡の中で、重川左岸にあるものは、北田中遺跡を例外として、いずれも段丘上の立地している。地理的環境で述べたように、重川の影響を強く受けた立地となっているものと思われる。

本遺跡周辺には、中世の土豪の屋敷跡が存在する。遺跡北方に黒川金山に関わる金山衆の深沢氏屋敷、重川の左岸には、西ノ原の堡（E201）、中世の土豪の田草川氏屋敷、小佐手氏館跡ある。他に中世に属するものとして、上野経塚（6）や山富士塚（5）などの塚もある。

近世の遺跡とされている立正寺旧境内（67）は、中世にさかのぼると推定される。『勝山記』の文正元年（1466）や永正9年（1512）の条に立正寺関連の記載があり、戦国時代にも栄えていた様子がうかがえる。立正寺旧境内以外にも、保寿院跡や小佐手十王堂跡など近世の寺院跡もある。（大木丈夫）

参考文献

山梨県教育委員会編　昭和 53 年『西田遺跡−第 1 次発掘調査報告書−』

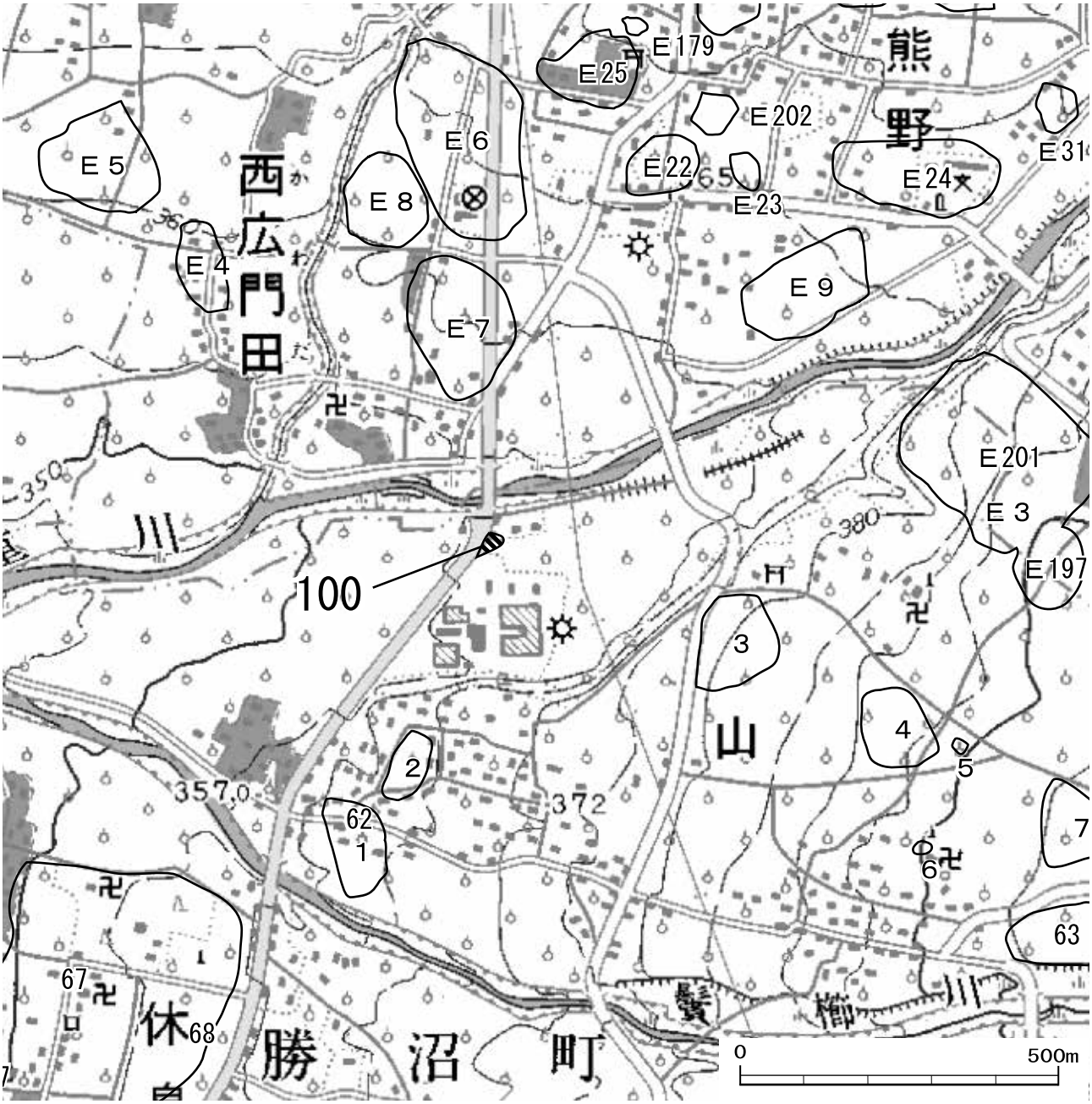
山梨県教育委員会編　昭和 59 年『牛奥遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 2 集

山梨県教育委員会編　平成 9 年『西田遺跡−第 2 次発掘調査報告書−』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 138 集

山梨県教育委員会他編　平成 14 年『五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 194 集

山梨県教育委員会他編　平成 14 年『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 196 集

山梨県教育委員会他編　平成 15 年『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 205 集『勝山記』（『山梨県史』資料編 6　中世 3 上　県内記録）平成 13 年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
E3	滝ヶ上遺跡	縄文	E202	深沢氏屋敷	
E4	西堀遺跡	平安	1	大塚南遺跡	縄文
E5	住蓮木平遺跡	縄文	2	大塚北遺跡	平安
E6	西田遺跡	縄文/弥生/古墳/奈良	3	松原遺跡	平安
E7	東田遺跡	縄文/弥生/古墳/平安	4	若林遺跡	縄文
E8	芦原田遺跡	弥生/古墳/平安	5	山富士塚	中世/近世
E9	下整田遺跡	縄文	6	上野経塚	中世
E22	中道遺跡	平安	7	天神遺跡	縄文
E23	熊野前田遺跡	平安	9	姥屋敷遺跡	縄文
E24	熊野八反田遺跡	平安	62	大塚経塚	古墳/近世
E25	熊野神社遺跡	弥生/古墳	63	塚穴遺跡	縄文
E31	石骨Ａ遺跡	縄文/平安	67	立正寺旧境内	中世/近世
E179	三山塚		68	休息経塚	
E197	西野原煉瓦工場跡	近現代	100	北田中遺跡	古墳
E201	西ノ原の堡	中世			

※遺跡番号の最初にEが付くものは旧塩山市所在の遺跡

第23図　北田中遺跡および周辺遺跡位置図(1/10000)

第 6 章　調査の方法と成果

第 1 節 調査方法

北田中遺跡は重川南岸にあたり、第２章で述べたように、重川の流路が南向きから西向きに変わり、河川の攻撃面となっている。この付近の重川南岸で、これまで確認されている遺跡は、北田中遺跡を除き重川の氾濫の影響を直接受けない段丘上に立地している。

これに対し、北田中遺跡の立地は、低位の氾濫原にあたるが、試掘調査で古墳時代の土器多数と、住居跡と推定される掘り込みを確認した。そこで、この地域では類例のない、河川の影響を強く受ける土地での遺跡の様相について、大きな関心を払って調査を進めた。

今回の発掘調査の対象としたのは、試掘調査で古墳時代の土器が大量に出土し、住居跡と思われる遺構が発見された第1号試掘溝を中心とする範囲である。調査範囲の東側は、現在の国道 411 号の擁壁に、南北は国道にほぼ直交する道路などの擁壁に囲まれた約 130m^2 の狭い部分である。

調査はまず、対象範囲の表土をバックホー（0.4m^3）によって全面的に剥ぐことから開始した。遺構確認は、全面的な表土剥ぎの後に、平面的なジョレン掛けと、調査区壁面削りだしによる土層観察を合わせて行った。

調査区北半では、黒褐色シルト質土の５～10 mm大のブロックを大量に含んだ黄灰砂質土が広がっており、この部分の堆積層の掘り下げを進めた。この黄灰砂質土層は、古墳時代の土師器・須恵器を若干含んでおり、これを覆土とする落込みを認めたので「落込１」と命名した。この黄灰砂質土層の下には、古墳時代後期の土師器・須恵器を大量に含む褐灰色砂質シルト層が広がっており、遺構を確認するべく慎重に精査を行った。住居跡プランや床面や焼土や粘土の散布する範囲を把握すべく精査を進めたが、確認できたのは水中堆積の証であるラミナ構造であり、人為的な遺構を見出すことができなかった。しかし、この層は遺物を含んでおり、出土した遺物の位置を記録した上で、遺物を取り上げ、下層へと調査を進めた。やがて河床の堆積物と考えられる巨礫混じりの中粒砂層に達し、遺物が出土しなくなったので、調査終了とした。

遺構と遺物出土位置の記録は、平板測量によって行った。

調査グリッドは、発掘対象が小面積であるために、設定しなかった。公共座標の表示は、公共座標による計測点（道路中心杭など）が示されている本体工事図面（1/500）へ調査範囲を記入し示した。本体工事の測量基準点は、日本測地系の旧座標値で示されているので、国土地理院提供の計算プログラムにより、世界測地系（日本測地系 2000）の新座標値を求めた。

第 3 表　北田中遺跡　測点平面直角座標

測点名	X座標（世界測地系）	Y座標（世界測地系）	X座標（旧日本測地系）	Y座標（旧日本測地系）
N0196	-35195.951	20474.543	-34843.6501	20192.5643
N0197	-35211.574	20462.057	-34859.2731	20180.0781
N0198	-35227.697	20450.229	-34875.3962	20168.2498
N0200	-35260.064	20426.727	-34907.7633	20144.7474
H14-T.16	-35193.451	20448.401	-34841.1508	20166.4222

※VIII系原点（北緯36°00分00秒、東経138°30分00秒）からの距離

第 2 節 基本層序

北田中遺跡の立地は、重川の流路が南向きから西向きに変わり、河川の攻撃面となる氾濫原にあたっている。重川の現河床よりは高いが、この周辺では最も低い土地である。この立地を反映して、基本土層は重川の影響を色濃く受けたものとなっている。

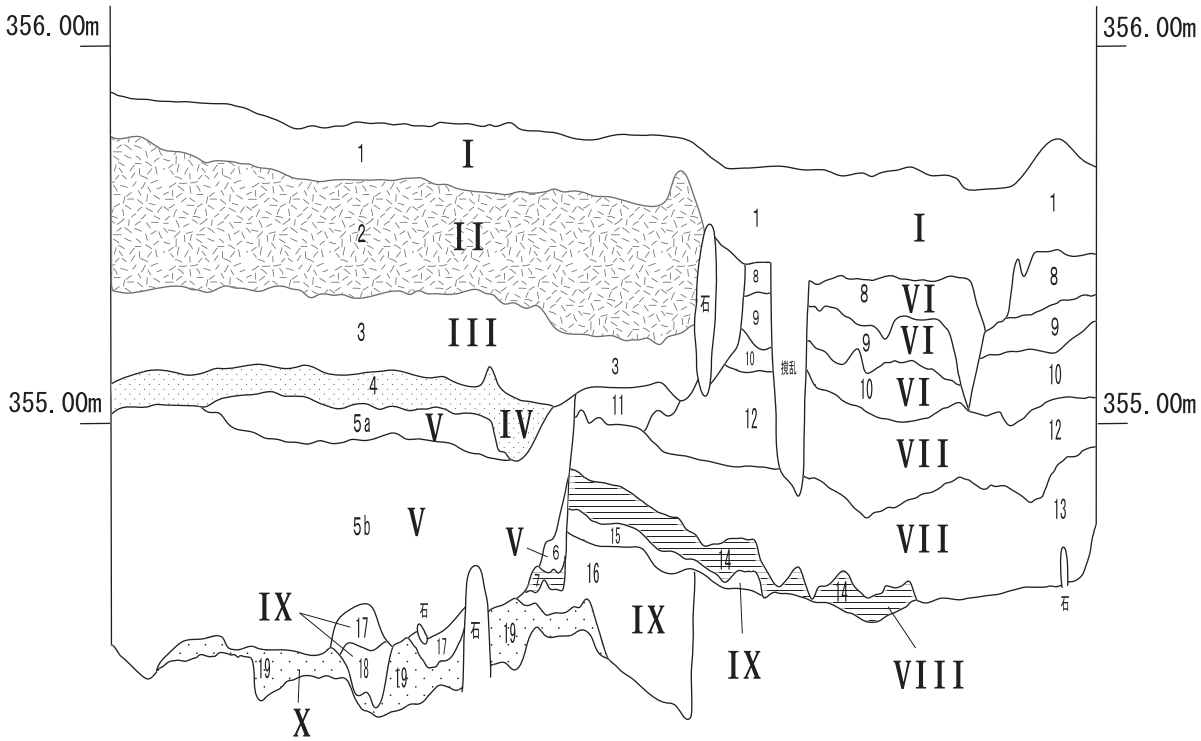
基本的な層序を下から順に概観する。まず、下部には最大径1.5m以上にもおよぶ巨礫を含む砂礫層（Ⅹ層）があり、この砂礫層を形成したのは土石流のような激しい水流であり、この砂礫層が堆積した段階は、重川の現河道のような状態であったと考えられる。その後、どれほどの時間を経たか明らかでないが、次の段階に、この間を褐灰色砂質シルト層や黒色粘質シルト層など（Ⅸ層）が充填し堆積している。この層は礫（直径4mm以上）を含まず、ラミナ（葉理）が認められゆるやかな水流で形成されたものと推定される。遺物は主にこの褐灰色砂質シルト層に含まれている。遺物に特別に磨耗の痕跡がないことは、ゆるやかな流速でこの層が形成されたことを裏付けるものと考えられる。

この上部には、酸化鉄が垂直方向に濃集した斑紋を含む褐灰色シルト質土など水田耕土と考えられる堆積層2枚が認められる（Ⅶ層）。また、この水田層の間には、灰シルトの薄い堆積層が存在し、流速の低い溢流洪水を受けたことを示している。

この上部には、旧耕作土と考えられる褐灰色細砂混じりの褐色砂質土シルト質土がある（Ⅵ層）。

さらに上部には、厚さ20～30cmに達する風化花崗岩の岩片（1～3mm）混じりの灰粗砂層が部分的にあり、これは明治40年の水害時の堆積層と考えられる（Ⅲ層）。近隣の葡萄園の地主からは、「ここは明治40年の水害でひどく流され、大変な被害を受けたので、遺跡は存在しないと思う。」という話を聞きいている。

人為的な堆積層であるが、調査範囲の北半に大きく広がり、かなりの層厚をもつため、基本土層に加えた黒褐色シルト質ブロック混じりの黄灰砂質土層がある（Ⅴ層）。規模が大きく、掘削後、短期間の内に埋め戻されたものと推定される。何らかの土木工事に類したものである可能性が高いが、詳細は不明である。掘りこみ面の境界（地山と覆土の境）が明瞭であり、この鮮明度からすると、経験的に近世～中世のものと考えられる。土中では、植物・動物・微生物の活動により、土壌は微量ながらも移動や変質を繰り返し、地山と覆土の境界は時間の経過とともに、不鮮明になっていくものと考えられるためである。



第24図　北田中遺跡基本土層図（縦1/20）

Ⅰ層　表土・畑地の耕作土

１：暗褐 (10YR3/4) 砂質土層

Ⅱ層　明治 40 年水害の洪水堆積層

２：風化花崗岩の岩片（1 ～ 3 mm）混じり灰 (5Y4/1) 粗砂層

Ⅲ層　明治 40 年以前の旧耕作土

３：黄灰 (2.5Y4/1) 砂質土　灰白細砂のラミナが部分的に認められる。

Ⅳ層　薄い洪水砂層

４：黄灰砂質土ブロック（5 ～ 20 mm）混じり灰白 (5Y8/1) 細砂層

Ⅴ層　近世から近代の落込みの覆土

5 a：黄灰 (2.5Y4/1) 砂質土

5 b：黒褐 (2.5Y3/2) シルト質土ブロック（5 ～ 10 mm）混じり黄灰 (2.5Y5/1) 砂質土層

６：黒褐 (2.5Y3/2) シルト質土ブロック（5 ～ 60mm）・黄灰 (2.5Y6/1) 砂質土ブロック（5 ～ 20mm）・灰黄 (2.5Y6/2) 砂質土の混入層　灰白砂を含む。

※ 5 a・5 b・6 層は、掘削後、短期間の内に埋め戻した層と考えられる。掘りこみ面とプランの境界（地山と覆土の境）鮮明度からすると、近世～中世のものと考えられる。

Ⅵ層　旧耕作土

８：褐 (10YR4/4) 砂質土層　[耕作土]

９：灰白 (10YR8/1) 細砂混じり褐 (10YR4/4) 砂質土層

※洪水砂に覆われた後に、耕作により擾乱されたもの、一部にラミナ（葉理）が認められる。

10：褐灰 (10YR6/1) 細砂混じり褐色砂質土層

※洪水砂に覆われた後に、耕作により擾乱されたもの、ラミナ（葉理）が認められる。

Ⅶ層　水田耕作土

12：褐灰 (10YR4/1) シルト質土層　[水田耕作土]　堆積構造なし

13：褐灰 (10YR4/1) シルト質土層　[水田耕作土]　酸化鉄の縦方向の斑紋が発達、12 層の床土となっていたものと考えられる。

Ⅷ層　洪水砂層

14：灰白 (10YR7/1) 細砂層　[洪水砂一次堆積層]　ラミナが顕著に認められる。

Ⅸ層　遺物包含層

16：褐灰 (10YR4/1) 砂質シルト層　酸化鉄の斑紋あり、ただし方向は一定しない。[遺物包含層]

※一部に灰白砂層のラミナが断片的に認められる。

Ⅹ層　巨礫混じり砂礫層

18：粗砂～中粒砂混じり灰 (N6/0) 細砂層　[洪水堆積層]

19：巨亜円礫～大亜礫混じり灰白 (N7/0) 中粒砂層　粗砂を含む。[洪水堆積層]

第 3 節 遺構

落込 1

調査区北半では、黒褐色シルト質土の 5 ～ 10 mm大のブロックを大量に含んだ黄灰砂質土層（基本土層Ⅴ層）の広がりを確認した。東壁の土層断面図の 5 a・5 b 層であり、ほぼ垂直の掘り込みが認められる。掘り込み面は、明治 40 年水害の堆積層が剥削している旧耕作土（基本土層Ⅲ層）の下である。また、掘り込みの境界（地山と覆土の境）も鮮明であることを考え合わせると、近世から近代（明治 40 年以前）の人為的な掘り込みと考えられる。遺物は、古墳時代の土器を若干含むが、ブロック状に含んでいる黒褐色シルト質土に含まれていたものであり、本来、掘り込みに伴うものではない。この黄灰砂質土層の範囲を追跡し、東西 4 m、南北 9 mの規模であることを確認した。明瞭な立ち上がりを示すのは、東壁断面付近だけで、不整形な平面形であることが判明した。落込1と命名した。試掘調査で住居跡の可能性があると、判断したのは、この落込みと思われ、住居跡プランや床面や焼土や粘土の散布する範囲を把握すべく精査を行ったが、これらを確認することができなかった。

土器集中

「落込 1」の黄灰砂質土層を取り除くと、古墳時代後期の土師器・須恵器を多数含む褐灰色砂質シルト層が広がっており、遺物の中には完形の須恵器の坏蓋や土師器の坏や甕を含んでおり、近くに住居跡などの遺構が存在する可能性が高いと判断して、遺構を確認するべく慎重に精査を進めた。しかし、遺構プランあるいは床面や焼土・粘土などの生活の痕跡を把握すべく精査を行ったが、遺構の痕跡を認めることができなかった。確認できたのは、洪水堆積層の指標とも言えるラミナ構造であった。

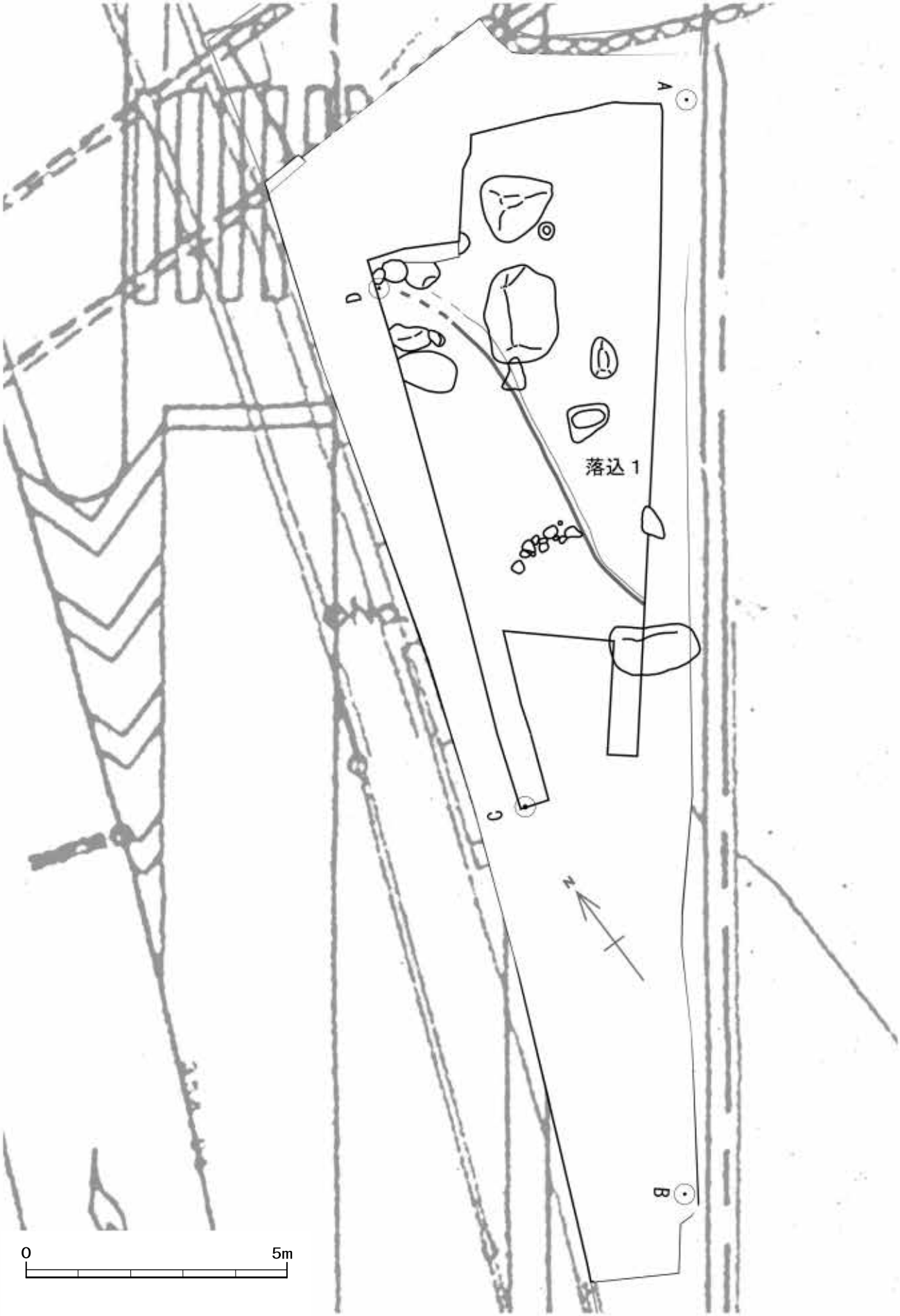
今回の調査で確認した最も下部には、最大径 1.5m 以上の極めて大きな巨礫を含む砂礫層があり、この段階では現況の川原のような状態であり、この間を褐灰色砂質シルト層や黒色粘質シルト層などが徐々に充填し堆積したと考えられる。遺物は、褐灰色砂質シルト層や黒色粘質シルト層に含まれており、これらの層中は、礫を含まず、かなりゆっくりした水流中での堆積したものと考えられる。巨礫の間から、土器が多く出土していることから、河床をゆっくりと運ばれてきた土器が、巨礫付近にできる淀みに溜まった可能性が考えられる。

また、出土した土器は水辺の祭祀に関連するとも考えられるが、実測可能な土器を図化して遺物観察表に掲載した個体数を集計すると、甕 37、坏 15（この中で須恵器は7）、高坏 7（この中で須恵器は 1 ）、甑 2 、壺・瓶 2 、ミニチュア土器 1 であり、甕などの日常的な煮沸具が過半数を占めている。祭祀専用の遺物はなく、一般的な生活により残された可能性が高い。土器は保存状態も良好であり、近隣で集落が営まれていた可能性が高いと考えられる。遺物が出土した場所は、前述のように重川の低位の氾濫原である。この立地は洪水の影響を強く受ける場所であり、こうした場所の近くに居住していたとすると、古墳時代後期には、この付近での水田が営まれていた可能性が高い。

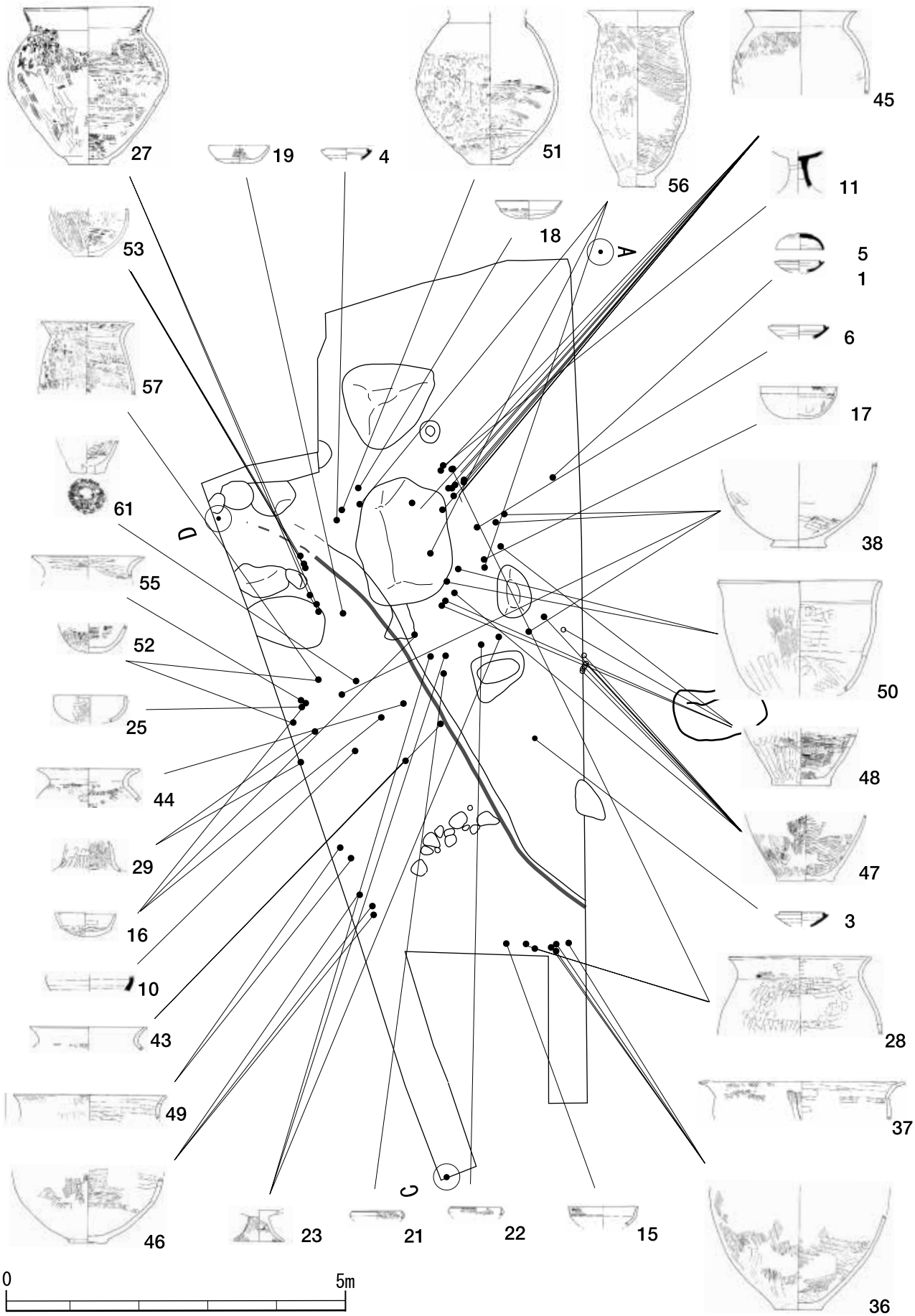
第 4 節 遺物

小片を除き実測可能な遺物の実測図を第 28 ～ 33 図に示し、遺物の観察記録を遺物観察表として掲載した。
所属時期は、37 の瓦質土器が中世と思われるが、これ以外はいずれも古墳時代後期の属するものである。

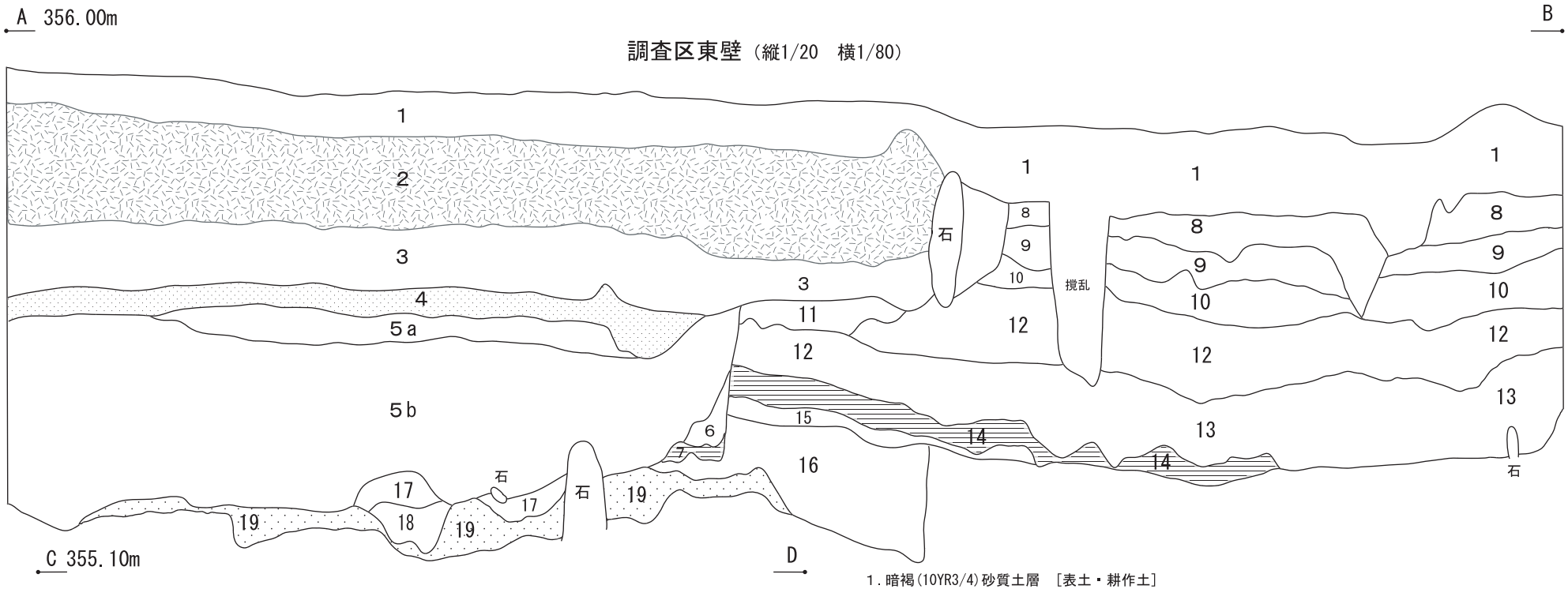
注目すべき遺物としては、黒漆が塗られた土師器高坏 (23) である。直接接合しないが、同一個体と思われる土師器高坏の坏部小片（20・21・26）がある。とくに、高坏の坏部小片（20・21）には、溜まった漆が固まったような付着物があり、単に漆塗りの製品ではなく、漆塗り工程で使用された器と考えられる。また、土師器高坏（24）も黒漆塗りが施されている。

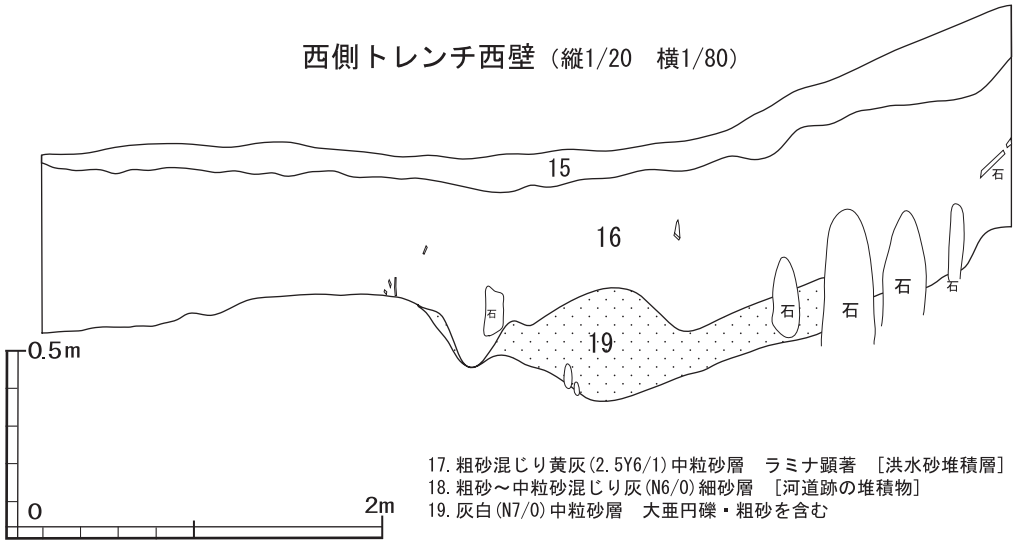


第25図　北田中遺跡発掘範囲図(1/100)



第26図　北田中遺跡遺物出土位置図(1/80)

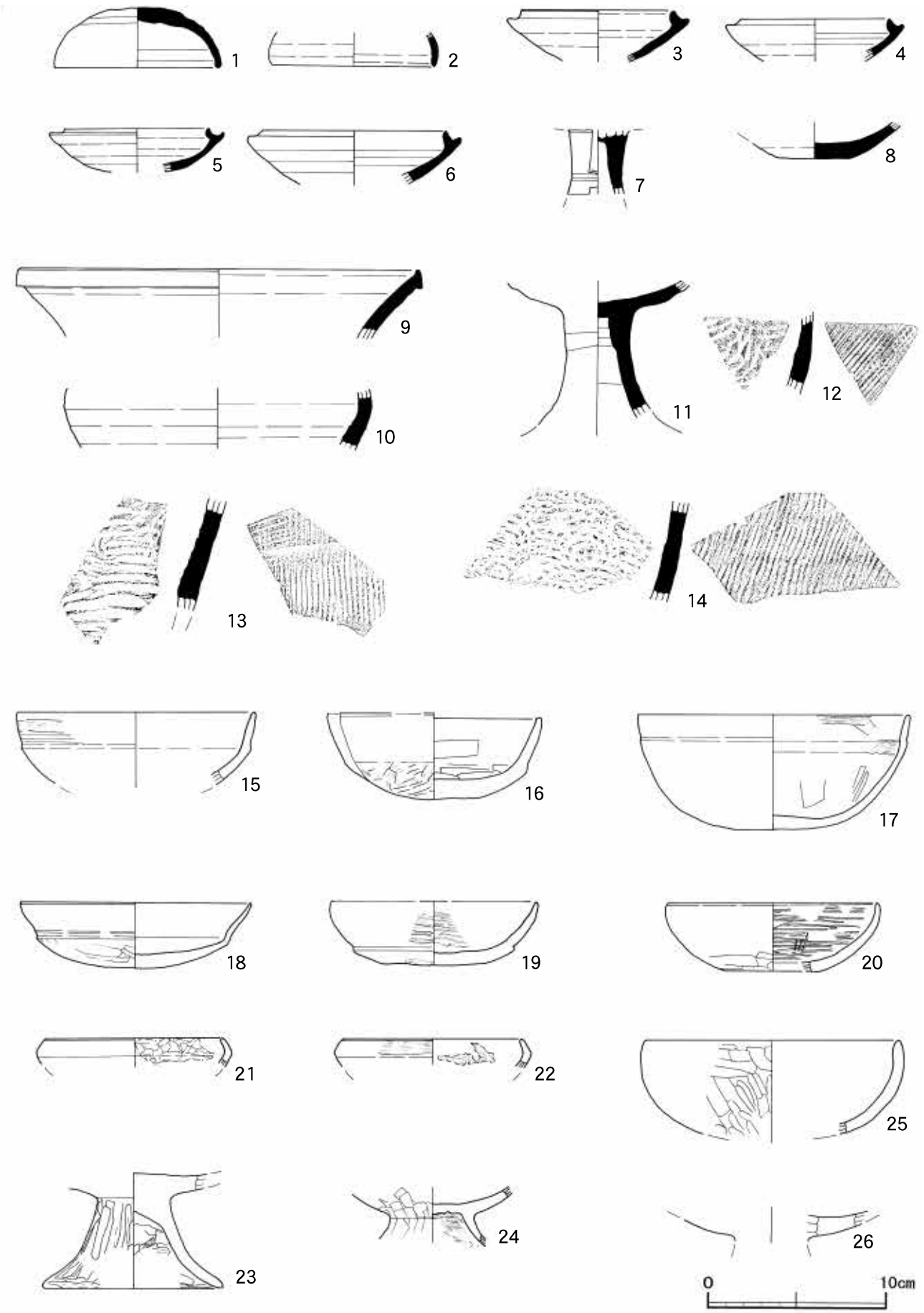




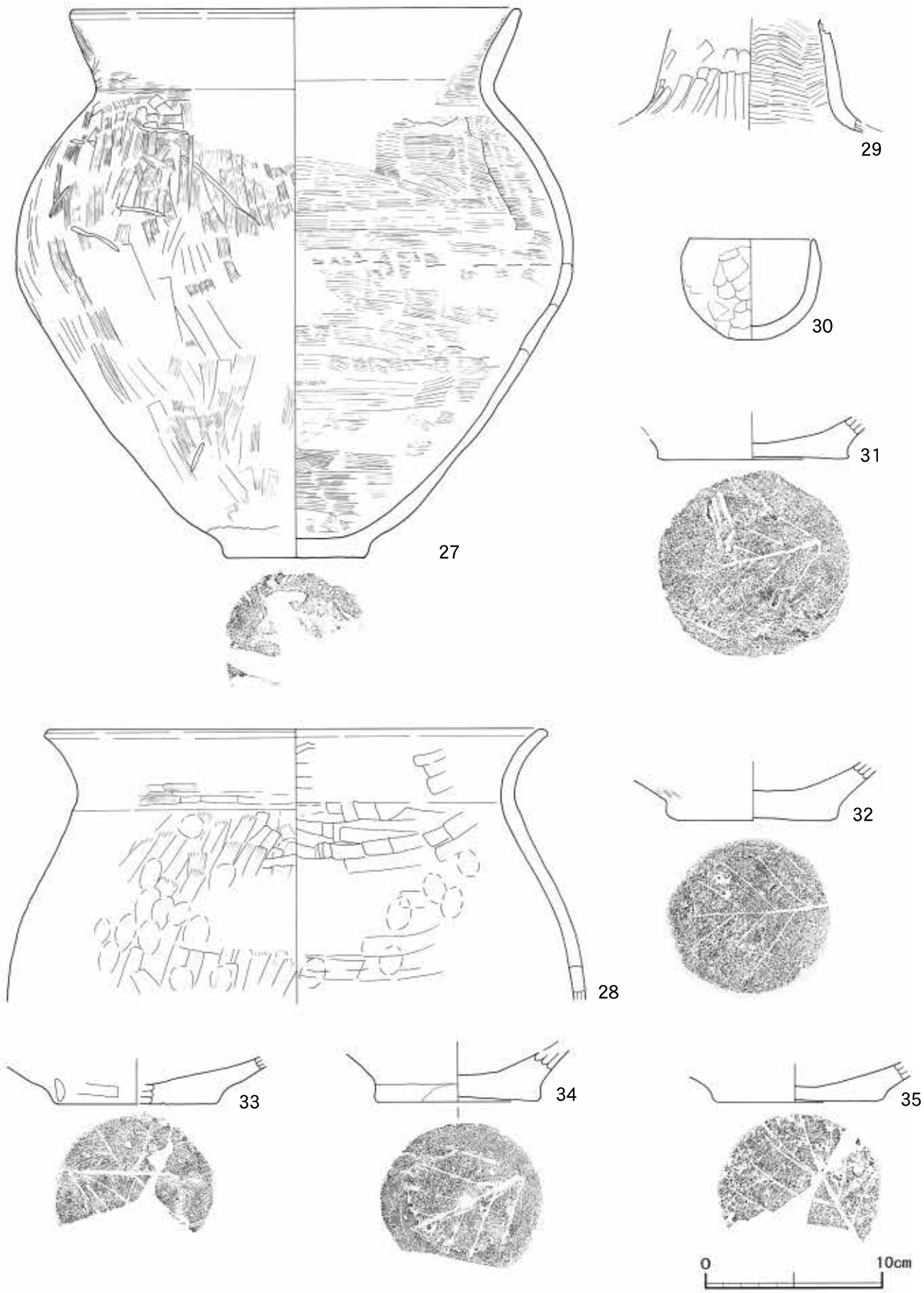
1．暗褐(10YR3/4)砂質土層　［表土・耕作土］
2．風化花崗岩の岩片（1～3mm）混じり灰(5Y4/1)粗砂層　［明治40年の洪水堆積層］しまり非常に強い
3．黄灰(2.5Y4/1)砂質土　灰白細砂のラミナが部分的に認められる。
4．黄灰砂質土ブロック（５～20mm）混じり灰白(5Y8/1)細砂層
5a.黄灰(2.5Y4/1)砂質土
5b.黒褐(2.5Y3/2)シルト質土ブロック（５～10mm）混じり黄灰(2.5Y5/1)砂質土層
6．黒褐(2.5Y3/2)シルト質土ブロック（５～60mm）・黄灰(2.5Y6/1)砂質土ブロック（５～20mm）・灰黄(2.5Y6/2)砂質土の混入層　灰白砂を含む。
※人為的に埋めた層と考えられる。掘りこみ面とプランの境界ラインの鮮明度からすると、近世～中世のものと考えられる。
7．灰白(2.5Y7/1)細砂混じり黄灰(2.5Y6/2)シルト質土層　ラミナ（葉理）が発達している。
8．褐(10YR4/4)砂質土層　［耕作土］
9．灰白(10YR8/1)細砂混じり褐(10YR4/4)砂質土層
※洪水砂に覆われた後に、耕作により擾乱されたもの、一部にラミナ（葉理）が認められる。
10.褐灰(10YR6/1)細砂混じり褐色砂質土層
※洪水砂に覆われた後に、耕作により擾乱されたもの、ラミナ（葉理）が認められる。
11.黄灰(2.5Y4/1)シルト質土層
12.褐灰(10YR4/1)シルト質土層　［水田耕作土］　堆積構造なし
13.褐灰(10YR4/1)シルト質土層　［水田耕作土］　酸化鉄の縦方向の斑紋が発達、５層の床土となっていたものと考えられる。
14.灰白(10YR7/1)細砂層　［洪水砂一次堆積層］　ラミナが顕著に認めれれる。
15.黒(10YR1.7/1)粘質シルト層　［沼沢地の堆積層か］
16.褐灰(10YR4/1)砂質シルト層　酸化鉄の斑紋あり、ただし方向は一定しない。［遺物包含層］
※一部に灰白砂層のラミナが断片的に認められる。

17.粗砂混じり黄灰(2.5Y6/1)中粒砂層　ラミナ顕著　［洪水砂堆積層］
18.粗砂～中粒砂混じり灰(N6/0)細砂層　［河道跡の堆積物］
19.灰白(N7/0)中粒砂層　大亜円礫・粗砂を含む

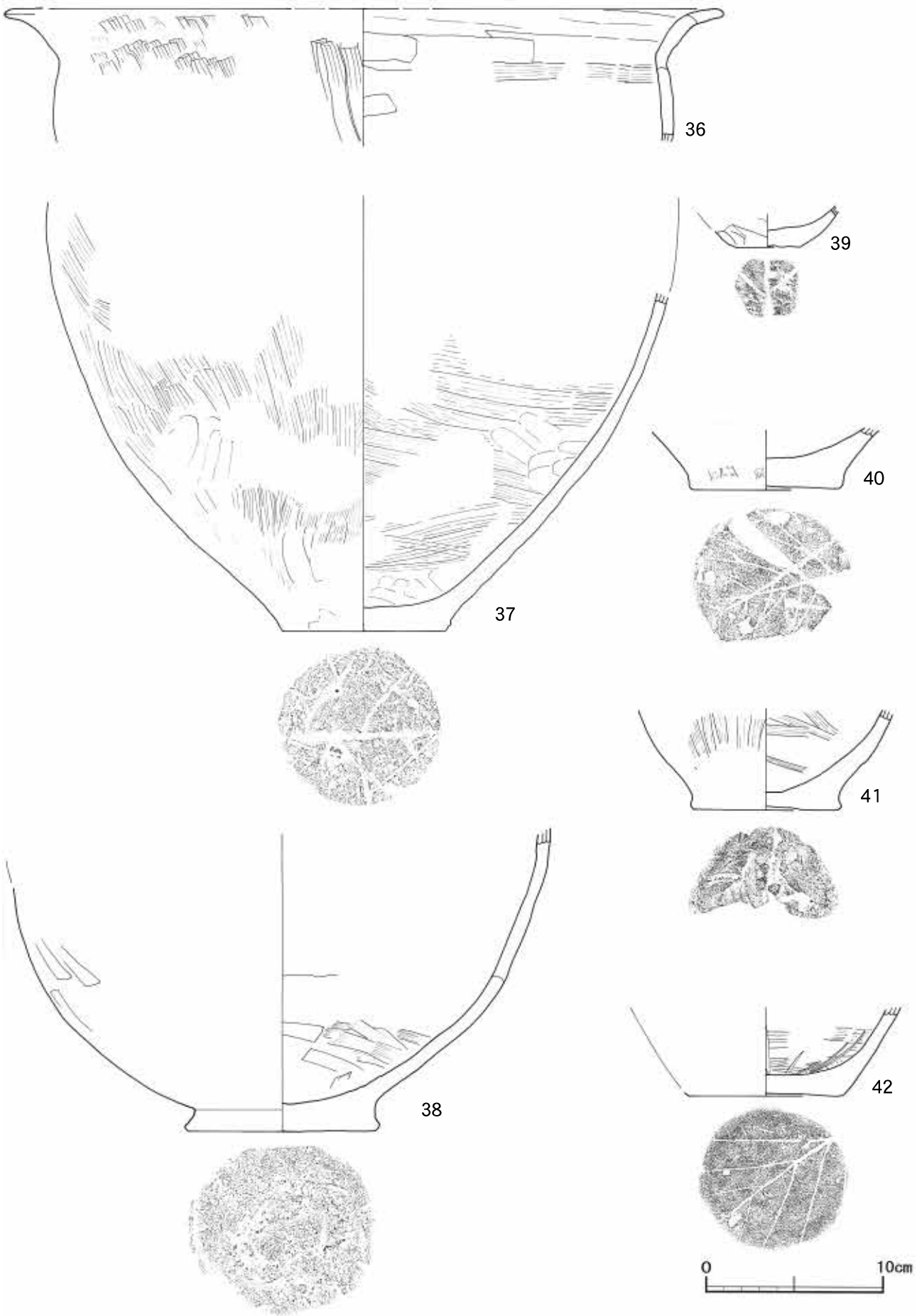
第27図　北田中遺跡土層断面図



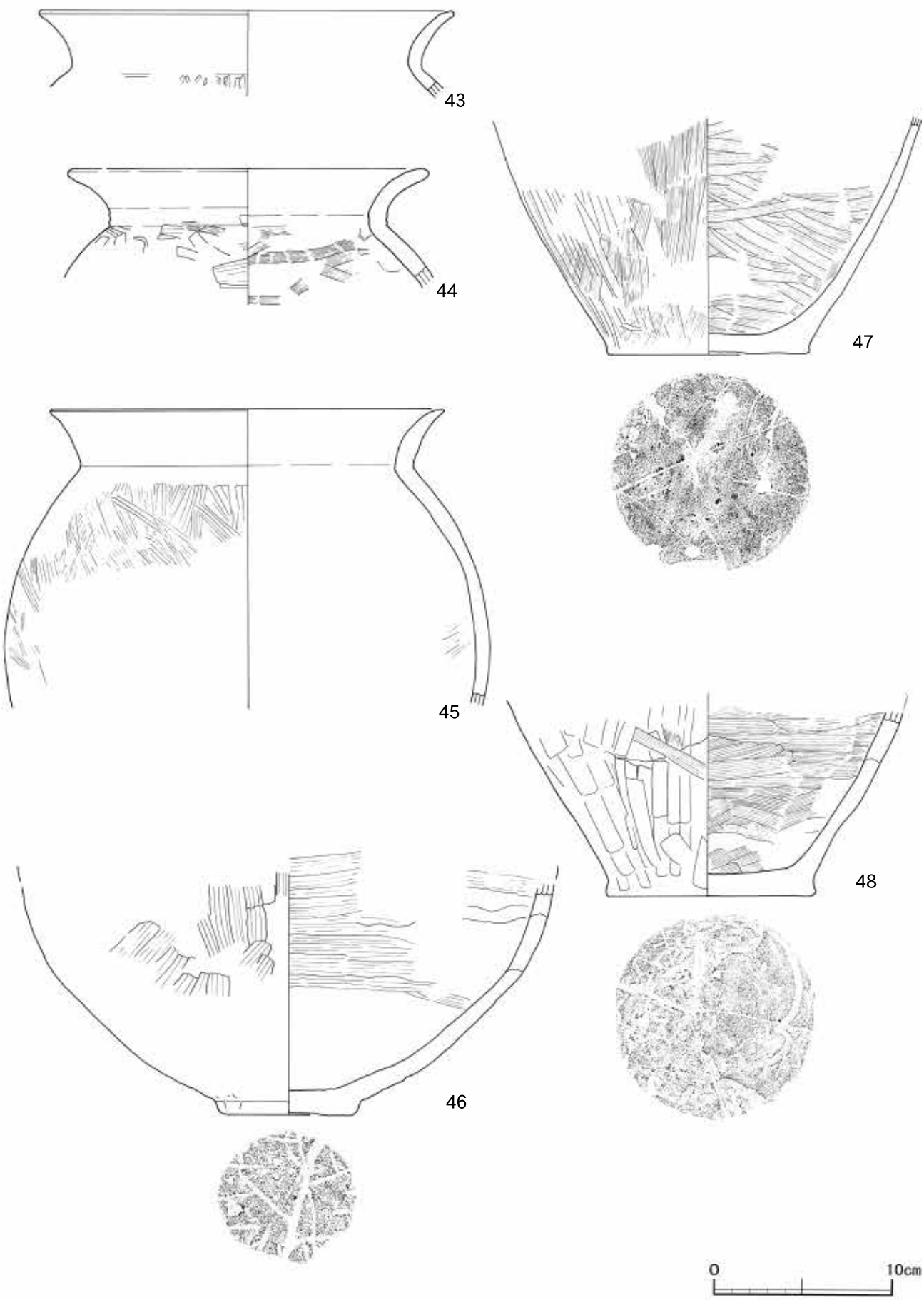
第28図　北田中遺跡出土遺物実測図（１）



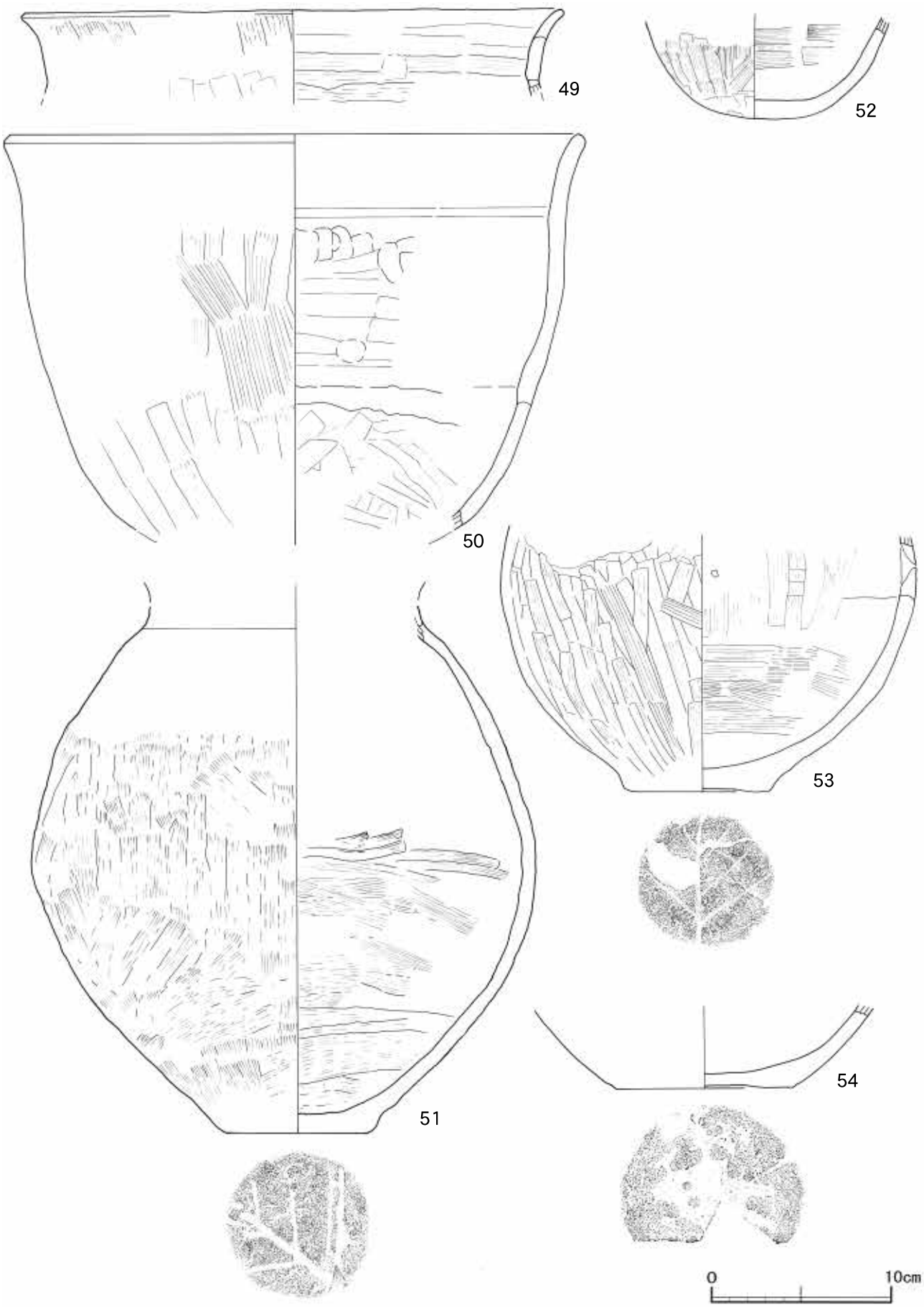
第29図　北田中遺跡出土遺物実測図（２）



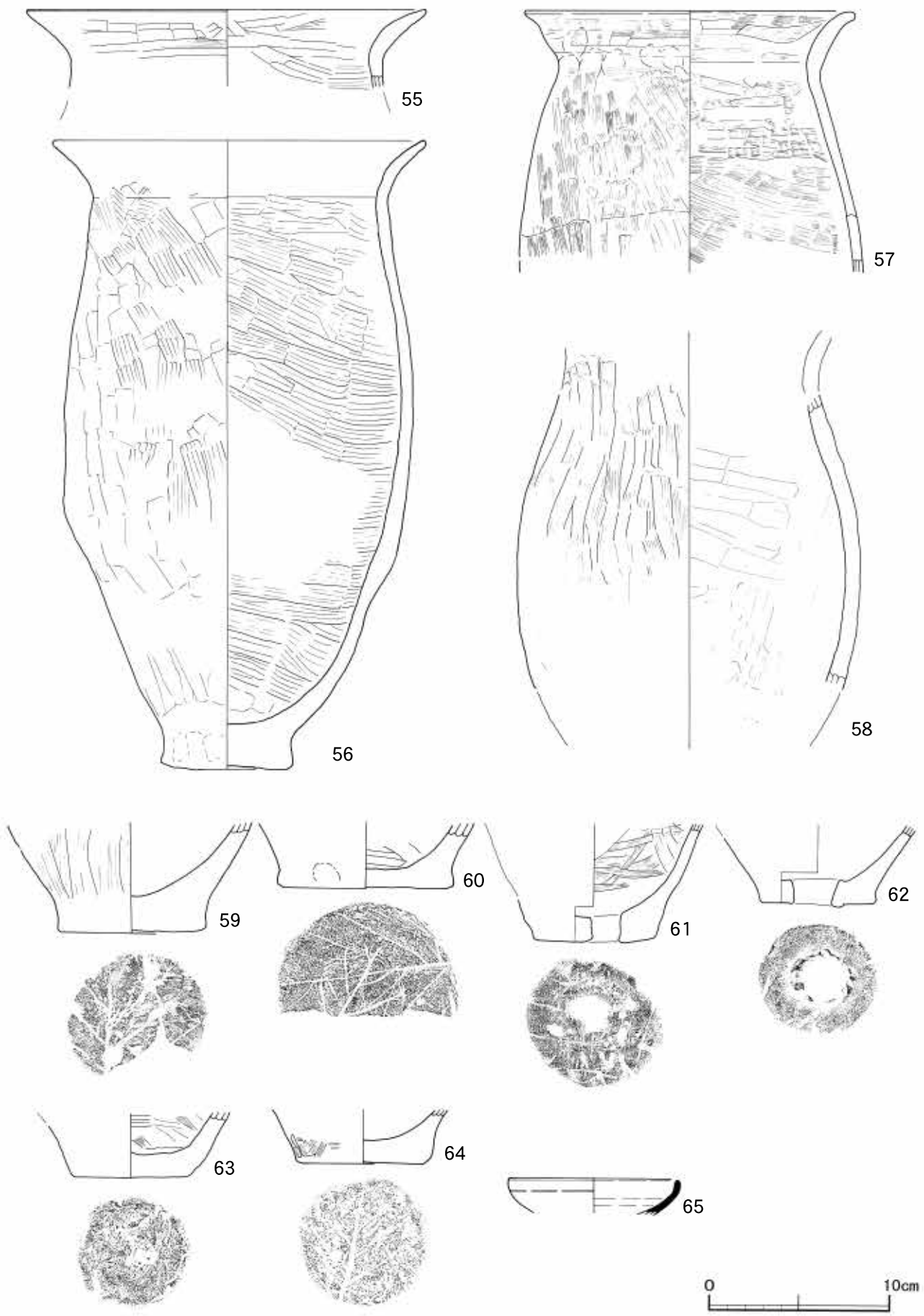
第30図　北田中遺跡出土遺物実測図（３）



第３１図　北田中遺跡出土遺物実測図（４）



第32図　北田中遺跡出土遺物実測図（５）



第33図　北田中遺跡出土遺物実測図（6）

第４表　北田中遺跡出土遺物観察表（１）

図版	遺物番号	整理番号	注記	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状態	技法・形態の特徴	焼成	色調	時期	備考
第28図	1	25	キタ田中H215	須恵器	坏蓋	－	3.3	9.2	完形品		良好	褐灰5YR5/1	古墳時代後期	
第28図	2	32	キタ田中H128・クロサシ、キタ田中0Ｔ1	須恵器	坏	9.0	1.9	－	破片		良好	灰Ｎ4/	古墳時代後期	
第28図	3	72	キタ田中H226	須恵器	坏	8.3	2.6	－	破片		良好	灰5Ｙ4/1	古墳時代後期	
第28図	4	73	キタ田中H398	須恵器	坏	8.2	2.8	－	破片		良好	灰5Ｙ4/1	古墳時代後期	
第28図	5	24	キタ田中H215	須恵器	坏身	7.8	2.3	－	1/4		良好	灰5Ｙ6/1	古墳時代後期	
第28図	6	28	キタ田中H365	須恵器	坏	10.2	3.0	－	1/6		良好	黄灰2.5Ｙ4/1	古墳時代後期	
第28図	7	29	キタ田中H391	須恵器	坏	3.4	3.5	－	破片		良好	黄灰2.5Ｙ4/1	古墳時代後期	脚部（透かし）
第28図	8	26	キタ田中H388	須恵器		－	1.9	4.2	破片		良好	灰Ｎ5/	－	
第28図	9	30	キタ田中H273	須恵器	長頸瓶？	22.0	3.7	－	破片		良好	灰10Ｙ4/1	－	
第28図	10	27	キタ田中H268	須恵器	壺・瓶	－	3.3	－	破片		良好	灰白10ＹＲ7/1	古墳時代後期	
第28図	11	31	キタ田中H214	須恵器	高坏	－	8.7	－	破片		良好	灰白10ＹＲ7/1	古墳時代後期	
第28図	12	20	キタ田中NO3、キタ田中シクツ１トレ	須恵器	大甕	－	4.3	－	破片		良好	褐灰10YR6/1	－	
第28図	13	19	キタ田中H330	須恵器	大甕	－	5.1	－	破片		良好	褐灰10YR6/1	－	

第４表 北田中遺跡出土遺物観察表（２）

第28図	14	18	キタ田中H347	須恵器	大甕	－	5.5	－	破片		良好	褐灰10YR6/1	－	
第28図	15	36	キタ田中H276	土師器	坏	13.0	4.0	－	1/6	外面の一部に黒色の塗り、黒漆か	良好	にぶい黄橙10YR6/3	古墳時代後期	外面の一部に黒色の付着物あり
第28図	16	17	キタ田中H400・H300・H416・クロサシ	土師器	坏	11.8	4.6	4.8	ほぼ完形品		良好	にぶい褐7.5YR5/4	古墳時代後期	
第28図	17	34	キタ田中H434・クロサシ	土師器	坏	15.0	6.6	4.0	3/4		不良	褐灰10YR4/1	古墳時代後期	大型
第28図	18	23	キタ田中H461	土師器	坏	12.6	3.6	3.0	ほぼ完形品	赤彩(赤褐2.5Ｙ4/8)	良好	明赤褐5YR5/6	古墳時代後期	赤彩
第28図	19	38	キタ田中H335	土師器	坏	11.2	3.5	2.2	1/3	内外面に黒色の塗り、黒漆か	良好	褐灰10YR6/1	古墳時代後期	
第28図	20	22	キタ田中クロサシ	土師器	坏	6.4	3.1	5.2	1/4	赤彩(灰赤2.5Ｙ4/2)	良好	黒褐7.5YR3/2	古墳時代後期	
第28図	21	71	キタ田中H444	土師器	高坏	9.8	1.6	－	1/5周	坏部に黒漆溜まる	良好	にぶい橙7.5ＹＲ7/3	古墳時代後期	漆塗りの工程で使用された器と思われる。
第28図	22	70	キタ田中H424	土師器	高坏	8.4	1.6	－	1/5周	坏部に黒漆溜まる	良好	にぶい橙7.5ＹＲ7/3	古墳時代後期	漆塗りの工程で使用された器と思われる。
第28図	23	40	キタ田中H414・H423・H445・クロサシ	土師器	高坏	－	6.4	9.8	脚部は全周	内外面に黒漆塗り、光沢つよい	良好	にぶい黄橙10YR7/4	古墳時代後期	41と同一個体と思われる。
第28図	24	39	キタ田中H207	土師器	高坏	－	3.3	－	破片		良好	灰白10ＹＲ7/1	古墳時代後期	黒漆塗り
第28図	25	35	キタ田中H294・クロサシ	土師器	坏	14.0	5.2	－	1/5	内外面に黒色の塗り、黒漆か	良好	にぶい黄橙10YR7/2	古墳時代後期	
第28図	26	41	キタ田中クロサシ	土師器	高坏		1.7	－	破片	内外面に黒漆塗り、光沢つよい	良好	にぶい黄橙10YR7/4	古墳時代後期	40と同一個体と思われる。

第４表　北田中遺跡出土遺物観察表（３）

第29図	27	4	キタ田中H327・H312・H463・H331・クロサシ	土師器	球胴甕	25.2	30.4	7.6	ほぼ完形品	外面のハケ目の間隔が、内面より、細かく、別のハケを使用	良好	にぶい黄橙7.5YR7/3	古墳時代後期	
第29図	28	58	キタ田中H218・クロサシ	土師器	球胴甕	28.0	15.1	－	1/5	指頭圧痕あり	やや良好	にぶい橙7.5ＹＲ6/4	古墳時代後期	
第29図	29	51	キタ田中H272・H280・クロサシ	土師器	高坏	－	6.2	－	脚部2/3	外面に赤彩（10Ｒ4/8）	良好	明黄褐10ＹＲ7/6	古墳時代後期	
第29図	30	53	キタ田中クロサシ	土師器	ミニチュア	6.9	5.7	1.4	1/2	てづくね	良好	にぶい黄橙10YR6/4	古墳時代後期	
第29図	31	9	キタ田中H217	土師器	球胴甕？	－	2.6	10.7	底部のみ		良好	にぶい黄褐7.5YR6/3	古墳時代後期	
第29図	32	14	キタ田中H223	土師器	球胴甕？	－	2.8	8.6	底部のみ		良好	にぶい褐7.5YR5/4	古墳時代後期	
第29図	33	5	キタ田中H413	土師器	球胴甕？	－	2.6	8.8	底部のみ		良好	にぶい黄褐10YR4/3	古墳時代後期	
第29図	34	3	キタ田中H350・クロサシ	土師器	球胴甕？	－	3.4	9.0	底部のみ		良好	にぶい黄橙10YR6/3	古墳時代後期	
第29図	35	6	キタ田中H412	土師器	球胴甕？	－	2.2	8.7	底部のみ		良好	にぶい黄褐10YR4/3	古墳時代後期	
第30図	36	64	キタ田中H278・H295・H297・H296・H407・クロサシ	土師器	甕	40.2	7.4	－	口縁1/4		良好	にぶい橙7.5ＹＲ6/4	古墳時代後期	
第30図	37	63	キタ田中H274・H275・H130・クロサシ	土師器	長胴甕	－	18.7	9.1	底は全周		良好	にぶい褐7.5ＹＲ5/4	古墳時代後期	
第30図	38	57	キタ田中H57・H78・H80・H321・クロサシ	土師器	球胴甕	－	16.5	10.5	1/4		やや良好	橙5YR6/6	古墳時代後期	
第30図	39	21	キタ田中H429	土師器	甕	－	2.0	3.4	破片		やや良好	褐灰10YR6/1	古墳時代後期	

第４表 北田中遺跡出土遺物観察表（４）

第30図	40	7	キタ田中 H279・H79	土師器	甕	－	8.0	3.3	底部のみ		やや良好	にぶい黄褐 10YR6/3	古墳時代後期	
第30図	41	10	キタ田中 H199・H244	土師器	甕	－	5.6	8.4	底部のみ		良好	にぶい褐 7.5YR5/3	古墳時代後期	
第30図	42	1	キタ田中H462	土師器	甕	－	5.0	8.4	底部のみ		良好	にぶい橙 7.5YR6/4	古墳時代後期	
第31図	43	48	キタ田中 H396・H348・ クロサシ	土師器	球胴甕	22.6	4.7	－	1/3周		良好	灰黄褐 10YR6/2	古墳時代後期	
第31図	44	49	キタ田中 H334・クロサシ	土師器	球胴甕	20.0	6.6	－	1/4周		良好	にぶい黄橙 10YR6/4	古墳時代後期	
第31図	45	60	キタ田中 H125・H210・ H340・H341・ H211・H212・	土師器	球胴甕	21.8	16.5	－	破片		良好	褐灰7.5ＹＲ 6/1	古墳時代後期	
第31図	46	55	キタ田中 H351・H318・ H319・クロサシ	土師器	球胴甕	－	12.7	7.0	胴部下半		良好	にぶい黄褐 10ＹＲ4/3	古墳時代後期	
第31図	47	62	キタ田中 H34・H52・ H56・H68・ H69　H205	土師器	甕	－	13.2	11.2	底は全周		良好	赤褐5ＹＲ 4/6	古墳時代後期	
第31図	48	43	キタ田中 H204・H104・ H440・H441、 キタ田中１	土師器	甕	－	10.1	11.3	1/5		良好	明赤褐 2.5YR5/6	古墳時代後期	
第32図	49	56	キタ田中 H349・H362	土師器	甕	39.4	4.4	－	口縁1/3		良好	褐7.5ＹＲ 4/3	古墳時代後期	
第32図	50	42	キタ田中 H357・H360・ クロサシ	土師器	甕	31.2	21.8	－	1/4周	輪積痕が顕著	良好	灰黄褐 10YR5/2	古墳時代後期	
第32図	51	46	キタ田中クロサシ	土師器	球胴甕	－	29.0	7.7	破片		良好	にぶい黄2.5 Ｙ6/3	古墳時代後期	
第32図	52	52	キタ田中 H337・H339	土師器	甕（丸底）	－	5.3	1.8	底のみ		良好	にぶい黄褐 10ＹＲ5/3	古墳時代後期	

第４表 北田中遺跡出土遺物観察表（５）

第32図	53	54	キタ田中 H419・H392・ H311	土師器	球胴甕	－	14.2	7.3	胴部全周		良好	にぶい黄褐 10ＹＲ5/4	古墳時代後期	
第32図	54	8	キタ田中 H100・H455・ H206・クロサシ、キタ田中	土師器	球胴甕？	－	9.6	4.5	底部のみ		良好	にぶい黄褐 10YR6/3	古墳時代後期	
第33図	55	50	キタ田中 H252・クロサシ	土師器	長胴甕	22.0	4.2	－	1/4周		やや良好	にぶい黄橙 10YR5/3	古墳時代後期	
第33図	56	59	キタ田中 H435・H460・ H65・クロサシ	土師器	長胴甕	20.5	34.5	7.2	破片		良好	にぶい橙7.5 ＹＲ6/4	古墳時代後期	
第33図	57	61	キタ田中H339	土師器	長胴甕	18.2	14.3	－	破片		良好	にぶい褐7.5 ＹＲ5/4	古墳時代後期	
第33図	58	45	キタ田中クロサシ	土師器	長胴甕	12.4	16.2	－	全周		良好	灰黄2.5Y6/2	古墳時代後期	
第33図	59	11	キタ田中 H264・H386	土師器	甕	－	6.0	8.0	底部のみ		良好	灰黄褐 10YR6/2	古墳時代後期	
第33図	60	15	キタ田中H395	土師器	甕	－	3.6	9.0	底部のみ		良好	にぶい黄橙 10YR7/3	古墳時代後期	
第33図	61	13	キタ田中H393	土師器	甑	－	6.5	6.7	底部のみ		良好	明赤褐 5YR5/6	古墳時代後期	
第33図	62	12	キタ田中H353	土師器	甑	－	4.5	6.3	底部のみ		良好	にぶい黄褐 10YR5/4	古墳時代後期	
第33図	63	16	キタ田中H399	土師器	甕	－	3.5	5.8	底部のみ		良好	灰黄褐 10YR5/2	古墳時代後期	
第33図	64	2	キタ田中303	土師器	甕	－	3.0	6.8	底部のみ	外面沈線は、木葉の茎の圧痕	良好	にぶい橙 7.5YR7/3	古墳時代後期	
第33図	65	37	キタ田中クロサシ	瓦器	坏	9.2	2.0	－	1/4		良好	褐灰10YR6/1	中世	

まとめ

今回の調査地点の土層は、基本的に河川堆積作用で形成されたもので、部分的に耕作の痕跡が認められた。

最下部には、最大径 1.5m 以上の巨礫を含む砂礫層があり、この砂礫層が形成された段階では現況の川原のような状態であり、次の段階に、この間を褐灰色砂質シルト層や黒色粘質シルト層などが充填し堆積している。遺物は主にこの褐灰色砂質シルト層に含まれていた。

この上には、酸化鉄が垂直方向に濃集した斑紋が多く見られる褐灰色シルト質土層など水田耕作土層2枚がある。また、この水田層の間には、灰シルトの薄い洪水堆積層があり、流速の低い溢流洪水を受けたことが確認できた。この上には、耕作土と思われる褐灰色細砂混じりの褐色砂質土シルト質土がある。さらにこの上から現耕作土直下まで、厚さ 20 ～ 30cm に達する風化花崗岩の岩片（1 ～ 3 mm）混じりの灰粗砂層があった。隣接する葡萄園の地主からは、ここは明治 40 年の水害でひどく流されたとの聞き取りを得ており、この風化花崗岩の岩片混じりの堆積層が、明治 40 年の水害時のものと考えられる。

遺物は、巨礫を含む砂礫層の間を埋めている褐灰色砂質シルト層から、古墳時代後期を主とする土師器・須恵器片などが多く出土した。出土した土器の量は、コンテナ (長さ 45cm ×幅 30cm ×深さ 25cm) 7 箱分であった。実測可能な土器を図化し、観察表に記載したものは 65 個体である。この中にはほぼ完形の須恵器の坏蓋や土師器の坏や甕を含んでおり、住居跡などの遺構が存在する可能性が高いと考え、慎重に調査したが遺構を確認することができなかった。

水辺の祭祀に関連する可能性を検討したが、実測可能な土器を図化し掲載し、観察表にまとめた個体数では、高坏5、坏 18（大半が須恵器小片）、甕 38、甑 2 、壺・瓶 2 、ミニチュア土器 1 であり、甕などの日常的な煮沸具が過半数を占め、一般的な生活により残された可能性が高い。土器は全体の形がわかるような残存率の高いものが多く、近隣で集落が存在する可能性が高いと考えられる。

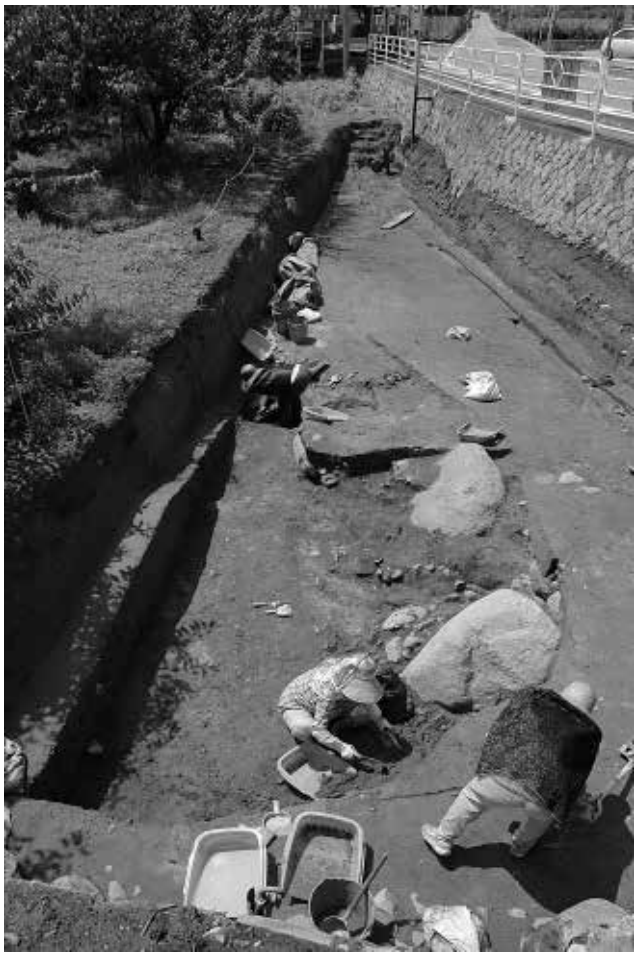
北田中遺跡の立地は、重川の現河床面より、上位であるが、この周辺の畑・宅地・工場など利用されている土地では最も低く、この地点の土層が基本的に河川堆積物から成っている。このことから、重川の洪水の影響を強く受ける土地であり、こうした低地へ遺物を多く残すようになったということは、古墳時代後期にこの付近の開発が進んでいた可能性が高い。

注目すべき遺物としては、黒漆塗りの土師器高坏（23）がある。遺物番号 21・22 は直接接合しないが、おそらく同一個体であり、また別個体の 24 がある。乾燥が進まず漆の保存に適した環境と思われ、現在も光沢を保っている。とくに注目すべきは、21 と 22 の坏部の破片であり、溜まっていた漆が固まったような状態を示している。これは、漆が塗られた製品ではなく、漆塗りの工程で使用された器と考えられる。漆塗り工房から廃棄された可能性が高い。

落ち込み1は、調査範囲内で確認できた部分で約 4 m× 9 mの平面的な広がりと深さ約 0.6 mと、ある程度の規模をもち、覆土はブロック状の塊を多く含み、人為的に埋め戻されている。時期は明治 40 年以前であり、掘り込みの境界線が鮮明で古くとも近世以前には遡らないと推定される。性格は不明であるが、耕地の改良などのための土木工事の痕跡と推定される。

北田中遺跡
写真図版

北田中遺跡　写真図版１



落込１の調査（北から）

調査区全景（北から）

落込１の覆土断面（南から）

落込１の下からの遺物出土（北から）

須恵器（１・５）の出土状態（北から）

須恵器（１・５）の出土状態（東から）

写真撮影前の清掃

写真撮影前の清掃（18・51）

土器出土状態（37）

土器出土状態（27）

土器出土状態（27）

北田中遺跡　写真図版３

調査区東壁土層断面（１）北端

調査区東壁土層断面（２）

調査区東壁土層断面（３）

調査区東壁土層断面（４）

調査区東壁土層断面（５）

調査区東壁土層断面（６）

調査区東壁土層断面（７）

調査区東壁土層断面（８）南端

球胴甕(27)

長胴甕(56)

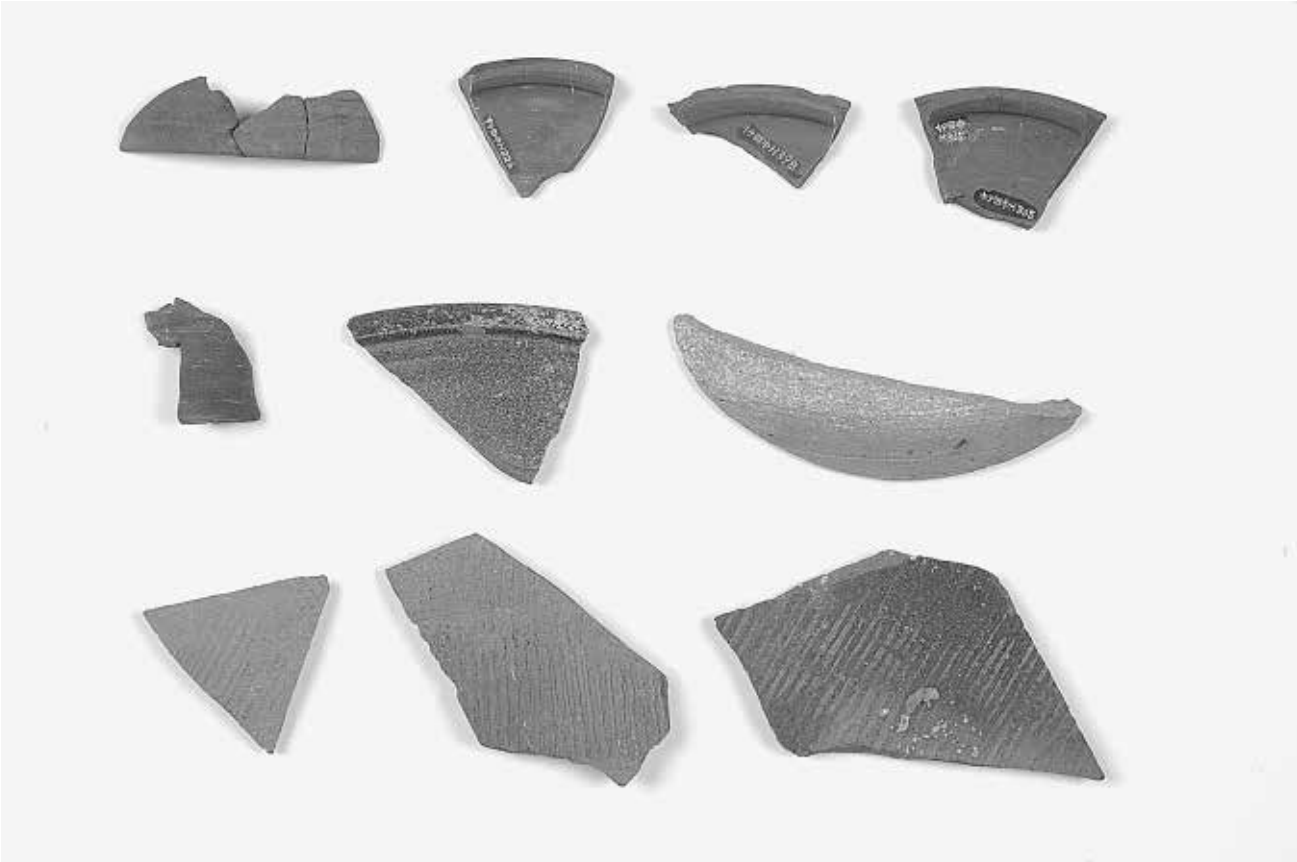
長胴甕(57)

須恵器杯蓋（１）

須恵器杯身（５）

須恵器（８）

須恵器高杯（11）



須恵器

土師器杯（15）

土師器杯（16）

土師器杯（17）

土師器杯（18）

土師器杯（19）

土師器杯（20）

土師器杯（25）

土師器高杯（29）

土師器高杯［黒漆塗］(23)

土師器高杯［漆付着］(21)

土師器高杯［漆付着］(20)

土師器高杯［漆付着］(21)

土師器高杯外面(26)

北田中遺跡　写真図版８

土師器高杯見込（26）

土師器高杯［黒漆塗］（24）

土師器球胴甕（28）

ミニチュア土器（30）

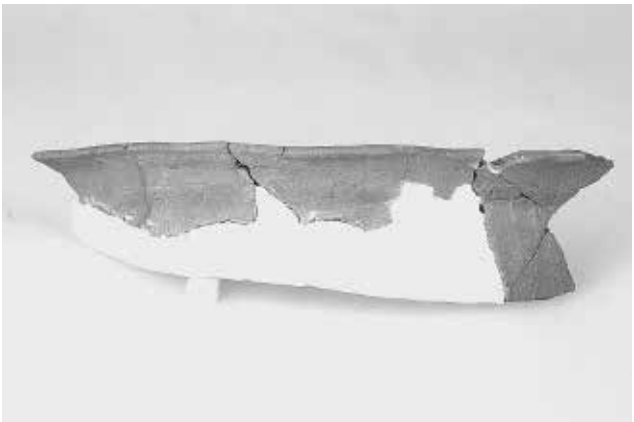
土師器底部木葉痕（31）

土師器底部木葉痕（32）

土師器底部木葉痕（33）

土師器底部木葉痕（34）

土師器底部木葉痕（35）



土師器底部木葉痕（36）

土師器球胴甕（37）

土師器球胴甕（38）

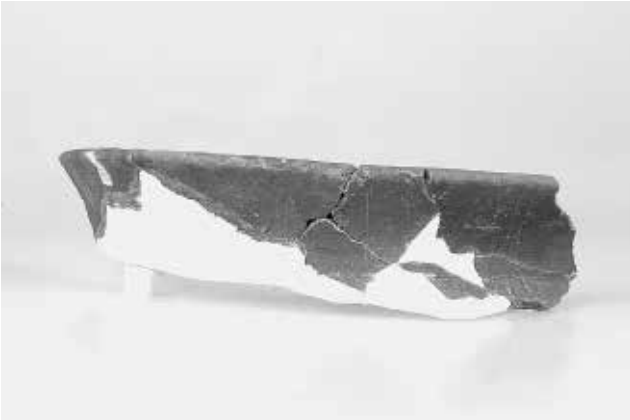
土師器底部木葉痕（39）

土師器底部木葉痕（40）

土師器甕（42）

土師器底部木葉痕（42）

土師器底部木葉痕(41)



土師器球胴甕(43)

土師器球胴甕(44)

土師器球胴甕(45)

土師器球胴甕(46)

土師器甕(48)

土師器甕(49)

土師器甕(50)

土師器球胴甕(51)

土師器甕(52)

土師器球胴甕(53)

土師器甕(54)

土師器甕(55)

土師器球胴甕(58)

土師器甕(59)

土師器底部木葉痕(59)

土師器甑(61)

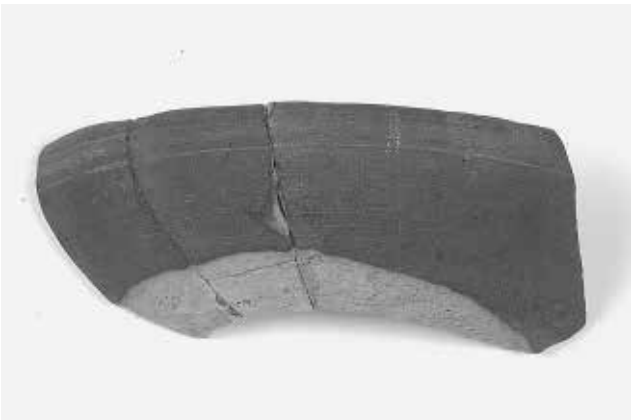
甑底部(61)

土師器甑(62)

土師器甑底部(62)

土師器底部(64)

土師器底部木葉痕(64)



瓦器(65)

瓦器(65)

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはたびーいせき・きたななかいせき
書名	西畑B遺跡・北田中遺跡
副書名	国道411号線塩山バイパス建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第252集
編著者名	村石眞澄・大木丈夫
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508　山梨県甲府市下曾根町923　055-266-3016
発行年月日	2008/3/31

ふりがな所収遺跡	ふりがな所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはたびいいせき 西畑B遺跡	やまなしけんこうしゅうしえんざんあかお 山梨県甲州市塩山赤尾671番地外	192139	52	35°41′54″	138°44′16″	2006.７.５～９.13 2007.２.13～３.２	約712	国道411号塩山バイパス建設
きたたなかいせき 北田中遺跡	やまなしけんこうしゅうしかつぬまやま 山梨県甲州市勝沼山429・430	192139	100	35°41′08″	138°43′23″	2006.８.７～９.15	約130	国道411号塩山バイパス建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西畑B遺跡	散布地	縄文時代・中世	縄文土器集中、石垣基礎	縄文土器、内耳鍋、カワラケ	中世から継続すると思われる屋敷地の隣接地
北田中遺跡	散布地	古墳時代後期	土器集中	須恵器・土師器	河川堆積層中から古墳時代の土器が集中的に出土

山梨県埋蔵文化財調査報告書　　第 252 集

2008 年（平成 20 年 3 月 17 日）印刷
2008 年（平成 20 年 3 月 31 日）発行

西畑（にしはたびー）B（いせき）遺跡・北田（きた）中（なか）遺跡（いせき）

－国道 411 号線塩山バイパスに伴う発掘調査報告書－

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923
℡　055-266-3016
E-mail：　maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp
発　行　　山梨県教育委員会
　　山梨県土木部
印　刷　　(株)内田印刷所